

エレミヤ記

第一章

一 ことはベニヤミンの地アナトテの祭司の一人なるヒルキヤの子エレミヤの言なり
 二 アモンの子ユダの王ヨシヤの時すなはちその治世の十三年にエホバの言エレミヤに臨めり
 三 その言またヨシヤの子ユダの王エホヤキムの時にもぞみてヨシヤの子ユダの王ゼデキヤの十一年のをはり即ちその年の五月エルサレムの民の移されたる時まででいたれり

四 エホバの言我にのぞみて云ふ
 五 われ汝を腹につくらざりし先に汝をしり汝が胎をいでざりし先に汝を聖

六 め汝をたて、萬國の預言者となせりと
 七 我こたへけるは噫主エホバよ視よわれは幼少により語ることを知らず

八 エホバわれにいひたまひけるは汝われは幼少といふ勿れすべて我汝を遣すところにゆき我汝に命ずるすべての

九 ことを語るべし
 一〇 なんぢ彼等の面を畏る、勿れ蓋われ汝と偕にありて汝をすくふべければなりとエホバいひたまへり

一一 エホバ遂にその手をのべて我口につけエホバ我にいひたまひけるは視よわれ我言を汝の口にいたり

一二 みよ我けふ汝を萬國のうへと萬國のうへにたて汝をして或は抜き或は毀ち或は滅し或は覆し或は建て或は植

しめん

一三 エホバの言また我に臨みていふエレミヤよ汝何をみるや我こたへけるは巴旦杏の枝をみる
 一四 エホバ我

にいひたまひけるは汝善く見たりそはわれ速に我言をなさんとすればなり

一五 エホバの言また我に臨みていふ汝何をみるや我こたへけるは沸騰たる鏝をみるその面は北より此方に

イ 番二一・一八 代上 口耶二五・三
 六・六〇 耶三二・八 耶三九・二
 七・九 二王下二五・八
 水耶五二・二一、二五 申一・一五、四一 加 二、三〇 賽六・五 結二・六、三・九
 へ 賽四九・一、五 一・一五、二六 又 民二二・二〇、三八 耶一・一七
 ト 出三三・一二、一七 出四・一〇、六・一 太二八・二〇 申三・一
 六、八 番一・五 耶 一五、二〇 徒二六・ 一七 來一三・六 一四
 一 賽六・七 力 賽五一・一六 耶五・

七 いづこにあるといはざりき われ汝等を導きて園のごとき地にいれ其實と佳物をくらはしめたり然ど汝等此處

八 にいり我地を汚し我産業を憎むべきものとなせり 祭司はエホバは何處にいますといはず律法をあつかふ者は

我を知らず牧者は我に背き預言者はバアルによりて預言し益なきものに從へり

二〇九 故にわれ尙汝等とあらそはん且なんぢの子孫とあらそふべしとエホバいひたまふ 汝等キツテムの諸島

二 にわたりて觀よまた使者をケダルにつかはし斯のごとき事あるや否を詳細に察せしめよ その神を神にあらざ

三 る者に易たる國ありや然るに我民はその榮を益なき物にかへたり 天よこの事を驚け慄けいたく怖れよとエホ

三 バいひたまふ 蓋わが民はふたつの惡事をなせり即ち活る水の源なる我をすて自己水溜を掘れりすなはち壞

れたる水溜にして水を有たざる者なり

二四 イスラエルはしもべなるか家にうまれし僕なるかいかにして擄掠となれるや わかき獅子かれにむか

二六 ひて哮えその聲をあげてその地を荒せりその諸邑は焚れて住む人なし ノフとタバネスの諸子も汝の頭首の髪

二七 をくらはん 汝の神エホバの汝を途にみちびきたまへる時に汝これを棄たるによりて此事汝におよぶにあらす

一八 や 汝ナイルの水を飲んとてエジプトの路にあるは何ゆるぞまた河の水を飲んとてアツスリヤの路にあるは何

故ぞ 汝の惡は汝をこらしめ汝の背は汝をせめん斯く汝が汝の神エホバをすてたると我を畏るゝことの汝の衷

にあらざるとは悪く且つ苦きことなるを汝見てしるべしと主なる萬軍のエホバいひ給ふ

二〇 汝昔より汝の軛ををり汝の縛を截ちていひけるは我つかふることをせじと即ち汝すべての高山のうへと

イ民一三・二七、一四、 耶三・一、一六、一八、 へ結二〇・三五、三六、 二〇
七、八、申八・七、九、 八馬二・六、七、 羅二、 米六・二、 一、
口利一八・二五、二七、 二〇、 ト出二〇・五、利二〇、 又詩一〇六・二〇、 羅
二八民三五・三三、 二耶二三・一三、 五、 一・二三、 力出四・二二、
三四詩七八・五八、 ホ耶二・二一、 哈二、 チ詩一一五・四、 黎三、 ル耶二・八、
五九、一〇六・三八、 一八、 七・一九、 耶一六、 ヲ黎一・二、 耶六・一九、 夕耶四三・七、 九、
ナ黎三〇・二、 二、
ヲ詩三六・九、 耶一七、 レ申三三・二〇、 黎八、 ヲ黎三・九、 何五・五、
・二、 一八、 一四、 八、 出一九・八、 番二四、
ソ申三三・一〇、 一八、 士一〇・一六、
ツ耶四・一八、 母前二二・一〇、
ネ番一三・三、 ウ申一二・二、 黎五七、
ナ黎三〇・二、 二、 五、 七、 耶三・六、

半出三四・一五、一六 二・一 路二〇・九 四・一七 何一三・六
 ノ出 一五・一七 詩四 才申三三・三二 賽一 一・二 耶一八・二二 八・三四 賽二六・ 一六 九・二六 太二三・
 四・二六、八〇・八 賽 二・二、五・四 マ鐵三〇・二二 二申三三・二六 耶三 ア申三三・三七 十一 二九 徒七・五二
 五・一、六〇・二二 夕伯九・三〇 ケ耶七・三一 〇・一四 耶五・三 耶一五・九・一三 撒前二・一五
 太二一・三三 可一 ヤ申三三・三四 伯一 フ伯三九・五 耶一四 テ士一〇・一〇 詩七 サ賽四五・二〇 ミ代下三六・一六 尼

二 諸の青木の下に妓女のごとく身をかぐめたり 二一 われ汝を植て佳き葡萄の樹となし全き眞の種となせしにいかな

三 れば汝われに向ひて異なる葡萄の樹の悪き枝にかはりしや 二三 たとひ嚙咄をもて自ら濯ひまたおほくの灰汁を加

三三 ふるも汝の悪はわが前に汚れたりと主エホバいひ給ふ 三三 汝いかで我は汚れずバアルに従はざりしといふことを

三四 得んや汝谷の中のおこなひを觀よ汝のなせしことを知れ汝は疾走るわかき牝の駱駝にしてその途にさまよへり

二四 汝は曠野になれたる野の牝驢馬なり其欲のために風にあへぐその欲のうごくときは誰かこれをとどめえん凡

二五 てこれを尋る者は自ら勞するにおよばすその月の中に之にあふべし 二五 汝足をつゝしみて跣足にならざるやうに

二六 し喉をつゝしみて渴かぬやうにせよしかるに汝いふ是は徒然なり然りわれ異なる國の者を愛してこれに従ふなり

二六 盗人の執へられて恥辱をうくるがごとくイスラエルの家恥辱をうく彼等その王その牧伯その祭司その預言

二七 者みな然り 二七 彼等木にむかひて汝は我父なりといひまた石にむかひて汝は我を生たりといふ彼等は背を我にむ

二八 けて其面をわれに向けずされど彼等災にあふときは起てわれらを救ひ給へといふ 二八 汝がおのれの爲に造りし

二八 神はいづこにあるやもし汝が災にあふときかれら汝を救ふを得ば起つべきなりそはユダよ汝の神は汝の邑の數

二九 に同じければなり

二九 汝等なんぞ我とあらしそふやなんぢらは皆我に背けりとエホバいひ給ふ 三〇 我がなんぢらの衆子を打しは益

三〇 なかりき彼等は懲治をうけず汝等の劍は猛き獅子のごとく汝等の預言者を滅せり 三一 なんぢらこの世の人よエホ

才王下一七・一三
 夕結一六・四六、二三
 二、四
 才結二三・九
 才王下一七・六、一八
 夕結二三・一一
 才結二七・三、二一
 才結二二・二七
 才代下三四・三三句
 七、一四
 才結一六・五一、二三
 才結二六・四〇 申三
 〇・一、二 二 二八
 才王下一七・六
 一三
 才結八六・一五、一〇
 才結三・二 結一六・
 三、八、九 才結三・五
 一五、二四、二五
 才結二二・二二
 〇・二、三 弗四・一一
 才結二二・二五
 才結三・一、三、二
 何二
 才結二〇・二八
 才結六五・一七
 才結六〇・九
 才結三・四 結三四
 才結二一・八
 才結二一・二三 結
 二 才結九・一五
 八

七 高山にのぼりすべての青木の下にゆきて其處に姦淫を行へり 彼このすべての事を爲せしのみ我かれに汝われ

八 に歸れと言しかどもわれに歸らざりき其悖れる姉妹なるユダ之を見たり 我に背けるイスラエル姦淫をなせし

九 により我かれを出して離縁状をあたへたれどその悖れる姉妹なるユダは懼れずして往て姦淫を行ふ我これを見る

一〇 九 また其姦淫の噪をもてこの地を汚し且つ石と木とに姦淫を行へり 此諸の事あるも仍其悖れる姉妹なる

一一 ユダは眞心をもて我にかへらず偽れるのみとエホバいひたまふ

一二 二 エホバまた我にいひたまひけるは背けるイスラエルは悖れるユダよりも自己を義とす 汝ゆきて北にむ

一三 かひ此言を宣ていふべしエホバいひたまふ背けるイスラエルよ歸れわれ怒の面を汝らにむけじわれは矜恤ある者

一四 一三 たり怒を限なく含みをもることあらじとエホバいひたまふ 汝たゞ汝の罪を認はせそは汝の神エホバにそむき經

一五 一四 めぐりてすべての青木の下にて異邦人にゆき汝等わが聲をきかざればなりとエホバいひ給ふ エホバいひたま

一六 一五 ふ背ける衆子よ我にかへれそはわれ汝等を娶ればなりわれ邑より一人支派より二人を取りて汝等をシオンにつれ

一七 一六 ゆかん 一五 われ我心に合ふ牧者を汝等にあたへん彼等は知識と明哲をもて汝等を養ふべし エホバいひたまふ

一八 一七 汝等地に増して多くならんときは人々復エホバの契約の櫃といはず之を想ひいでず之を憶えずこれを尋ねずこれ

一九 一八 を作らざるべし 一七 その時エルサレムはエホバの座位と稱へられ萬國の民こゝに集るべし即ちエホバの名により

二〇 一八 てエルサレムに集り重て其惡き心の剛愎なるにしたがひて行まざるべし 一八 その時ユダの家はイスラエルの家と

二一 ともに行みて北の地よりいで我なんぢらの先祖たちに與へて嗣しめし地に偕にきたるべし

一九 嗚呼わが腸よ我腸よ 痛苦心の底におよびわが心胸とゞろくわれ黙しがたし我靈魂よ汝箠の聲と軍の

二〇 鬨をきくなり 敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒されわが幕屋は頃刻にやぶられ我幕は忽ち破られたり

二一 我が旗をみ箠の聲をきくは何時までぞや 三三 それ我民は愚にして我を識らず拙き子等にして曉ることなし

彼らは悪を行ふに智けれども善を行ふことを知ず

二三 われ地を見るに形なくして空くあり天を仰ぐに其處に光なし 二四 我山を見るに皆震へまた諸の丘も動けり

二五 我見人に人あることなし天空の鳥も皆飛されり 二六 我みるに肥美なる地は沙漠となり且その諸の邑はエホバの

前にその烈しき怒の前に毀たれたり

二七 そはエホバかくいひたまへりすべて此地は荒地とならんされど我ことごとくは之を滅さじ 二八 故に地は皆

二九 哀しみ上なる天は暗くならん我すでに之をいひ且これを定めて悔いすまた之をなす事を止ざればなり 二九 邑の人

三〇 みな騎兵と射者の咄喊のために逃て叢林にいり又岩の上へに升れり邑はみな棄られて其處に住む人なし 三〇 滅され

たる者よ汝何をなさんとするや設令汝くれなるの衣をき金の飾物をもて身を粧ひ目をぬりて大きくするとも汝が身

を粧ふはいたづらなり汝の戀人らは汝をいやしめ汝のいのちを索るなり 三一 われ子をうむ婦のごとき聲首子をう

む者の苦むがごとき聲を聞く是れシオンの女の聲なりかれ自ら歎き手をのべていふ嗚呼われは禍なるかな我靈魂

殺す者のために疲れはてぬ

第五章

一 汝等エルサレムの邑をめぐりて視且つ察りその街を尋ねよ汝等もし一人の公義を行ひ眞理を求る者に逢はゞわれ之(エルサレム)を赦すべし 二 彼らエホバは活くといふとも實は偽りて誓ふなり

イ賽一五・五、一六、一〇 路一九・四二、八耶一〇・二〇、一、二、三、二、口詩四二・七、結七、二羅一六・一九、二、四、耶九・一、二六、ホ賽二四・一九、二〇、ヘ則一・二、ト賽五・二五、結三八、チ番一・三、リ耶五・一〇、一八、又何四・三、三〇・一、四六、ル賽五・三〇、五〇・三、ワ王下九・三〇、結、ヲ民二三・一九、耶七、二二三・四〇、カ耶二三・二〇、二二、哀一・二、一九

ヨ賽一・一五 哀一・
 一七 一七
 夕結二二・三〇
 一創一八・二三 詩
 一・二二
 ソ判一八・二六

ツ耶四・二
 ネ多一・一六
 ナ耶七・九

耶二・三〇
 ウ耶七・二八 番三・二
 中耶八・七
 ノ米三・一
 オ詩二・三
 ク耶四・七

ラ代下一六・九
 ム賽一・五、九・一三
 フ番二二・七 番一・五
 キ耶三九・八

ヤ詩一〇四・二〇 哈
 一・八 番三・三
 マ何一三・七
 ケ申三三・二二 加四
 ア耶五・二九、九・九
 サ耶四四・二二
 キ耶三九・八

コ申三二・一五
 エ結二二・一一
 テ耶一三・二七
 ア耶五・二九、九・九
 サ耶四四・二二
 キ耶三九・八

ユ耶四・二七、五・一八
 ヌ耶三・二〇
 ミ代下三六・一六 耶
 四・一〇
 シ賽二八・一五
 エ耶一四・一三

ヒ耶一・九
 モ賽三九・三 耶四・
 一六
 七申二八・四九 賽五
 ・二六 耶一・一五、
 六・二二

三 エホバよ汝の目は誠實を顧みるにあらずや汝彼らを撻どもかれら痛苦をおほえす彼等を滅せどもかれら懲治をうけず其面を磐よりも硬くして歸ることを拒めり

四 故に我いひけるは此輩は惟いやしき愚なる者なればエホバの途と其神の鞫を知ざるなり 五 われ貴人にゆきて之に語らんかれらはエホバの途とその神の鞫を知るなり然に彼らも皆鞫を折り縛を断り 故に林よりいづる獅子は彼らを殺しアラバの狼はかれらを滅し豹はその邑をねらふ此處よりいづる者は皆裂るべしそは其罪

七 我なに故に汝をゆるすべきや汝の諸子われを棄て神にあらざる神を指して誓ふ我すでに彼らを誓はせたり 九 エ

九八 ど彼ら姦淫して娼妓の家に群集る 八 彼らは肥たる牡馬のごとくに行めぐりおのおの嘶きて隣の妻を慕ふ 九 エ

一〇 ホバいひたまふ我これらの事のために彼らを罰せざらんや我心はかくの如き民に仇を復さざらんや 二 汝等その石垣にのぼりて滅せされど悉くはこれを滅す勿れその枝を截除けエホバのものに有ざればなり

二二 イスラエルの家とユダの家は大に我に悖るなりとエホバいひたまふ 二三 彼等はエホバを認ずしていふエホバはある者にあらず災われらに來らじ我儕劍と飢饉をも見ざるべし 二三 預言者は風となり言はかれらの衷にあらず

二四 斯彼らになるべしと 一四 故に萬軍の神エホバかくいひたまふ汝等この言を語により視よわれ汝の口にある我言を火となし此民を薪となさんその火彼らを焚盡すべし 一五 エホバいひ給ふイスラエルの家よみよ我遠き國人をなんぢらに來らしめん

二六 其國は強くまた古き國なり汝等その言をしらず其語ることをも曉らざるなり 一六 その籠は啓きたる墓のごとし彼

二七 らはみな勇士なり 一七 彼らは汝の穢れたる物と汝の糧食を食ひ汝の子女を食ひ汝の羊と牛を食ひ汝の葡萄の樹

二八 と無花果の樹を食ひまた劍をもて汝の頼むところの堅き邑を滅さん 一八 されど其時われことごとくは汝を滅さじ

とエホバいひたまふ

一九 汝等何ゆゑにわれらの神エホバ此等の諸のことを我儕になしたまふやといはゞ汝かれらに答ふべし汝ら

二〇 我をすてなんぢらの地に於て異なる神に奉へしごとく汝らのものにあらざる地に於て異邦人につかふべしと

二一 汝これをヤコブの家へのまたこれをユダに示していへ 二一 おろか 愚にして了知なく目あれども見えす耳あれど

二二 も聞えざる民よこれをきけ 二三 エホバいひ給ふ汝等われを畏れざるか我前に戰慄かざるか我は沙を置いて海の界と

二三 なしこれを永遠の限界となし踰ることをえざらしむ其浪さかまきいたるも勝ことあたはず澎湃もこれを踰るあた

二四 はざるなり 二四 然るにこの民は背き且悖れる心あり既に背きて去れり 二四 彼らはまた我儕に雨をあたへて秋の雨

二五 と春の雨を時にしたがひて下し我儕のために収穫の時節を定めたまへる我神エホバを畏るべしと其心にいはざる

二六 なり 二五 汝等の愆はこれらの事を退け汝等の罪は嘉物を汝らに來らしめざりき 二六 我民のうち悪者あり網を張

二七 る者のごとくに身をかゝめてうかゞひ罟を置いて人をとらふ 二七 樊籠に鳥の盈るがごとく不義の財彼らの家に充つ

二八 この故に彼らは大なる者となり富る者となる 二八 彼らは肥て光澤あり其悪き行は甚し彼らは訟をたゞさず孤

二九 の訟を糺さずして利達をえ亦貧者の訴を鞠かず 二九 エホバいひ給ふわれかくのごときことを罰せざらんや我心

イ利二六・一六 申 二二・一六・一〇 一一・四〇 徒二八 一〇・一一 詩一〇〇 ル申一一・一四 耳二 一八 哈一・一五 一一・二二 耶一一・一

二八・三一・三三 二耶二・一三 二六 羅一一・八 四・九 箴八・二九 申三三・一五 ソ耶五・九 馬三・五

口耶四・二七 申二八・四八 何七・一一 又詩一四七・八 耶 一四・二二 太五・ 一〇 夕賽一・二三 亞七・

ハ申二九・二四 王上 八 賽六・九 結一一・ 一 申一四・二二 太五・ 一〇 夕賽一・二三 亞七・

九・八・九 耶一三・ 二 太一三・一四 約 一 伯二六・一〇、三八 四五 徒一四・二七 力箴一・一一、一七、 一 伯一二・六 詩七三

ツ耶二三・一四 何六

二四 者より大なる者にいたるまで皆貪婪者なり又預言者より祭司にいたるまで皆詭詐をなす者なればなり 一四 かれら
 二五 浅く我民の女の傷を醫し平康からざる時に平康平康といへり 一五 彼らは憎むべき事を爲て恥辱をうくれども毫も
 恥すまた愧を知らずこの故に彼らは傾仆るゝ者と偕にたふれん我來るとき彼ら躓かんとエホバいひたまふ
 一六 エホバかくいひたまふ汝ら途に立て見古き徑に就て何か善道なるを尋ねて其途に行めさらば汝らの靈魂安
 二六 を得ん然ど彼らこたへて我儕はそれに行まじといふ 一七 われ 我また汝らの上に守望者をたて箴の聲をきけといへり然
 二七 ど彼等こたへて我儕は聞じといふ 一八 故に萬國の民よきけ會衆よかれらの遇とてを知られ 一九 地よきけわれ災を
 二〇 この民にくださんこは彼らの思の結ぶ果なりかれら我言とわが律法をきかずして之を棄るによる 二〇 シバより我
 許に乳香きたり遠き國より莒蒲きたるは何のためぞやわれは汝らの燔祭をよるこばず汝らの犠牲を甘しとせず
 二二 故にエホバかくいひたまふみよ我この民の前に躓礙をおく父と子とそれに躓隣人とその友偕に滅ぶべし
 二三 エホバかくいひたまふみよ民北の國よりきたる大なる民地の極より起る 二三 彼らは弓と槍をとる殘忍にし
 二四 て憫なしその聲は海の如く鳴るシオンの女よかれらは馬に乗り軍人のごとく身をよるひて汝を攻めん 二四 我儕そ
 二五 の風聲をきゝたれば我儕の手弱り子をうむ婦のごとき苦痛と劬勞われらに迫る 二五 なんぢら田地に出る勿れまた
 路に行むなかれ敵の劍と畏怖四方にあればなり 二六 我民の女よ麻衣を身にまとひ灰のうちにまるび獨子を喪ひ
 しごとくに哀みていたく哭けそは毀滅者突然に我らに來るべければなり
 二七 われ汝を民のうちに立て金を驗る者のごとくなし又城のごとくなすこは汝をしてその途を知しめまた試み

イ賽五六・二一 耶八
 一〇、一四・一八、八 耶四・一〇、一四、一六・二九 一五馬四・四路 三・二七 哈二・一
 二二・二一 米三、一三、二二、二七 へ太二・二九 七一九賽一・二一、一五、一〇・二二、五〇・四三
 五、二一 二耶三・三、八、二二 二賽二・二一、五八 又賽六〇・六 米六・六 方賽五・三〇 夕耶四・八
 口耶八・二一 結一三 未賽八・二〇 耶一八 二 耶二五・四結 詩四〇・六、五〇、一五、五、二一、四九・二四、ソ亞二・一〇 二〇
 ツ耶一・二八、一五、

一四 呼びたれども答へざりき 一四 この故に我シロになせしごとく我名をもて稱へらるゝ此室になさんすなはち汝等が
 一五 頼むところ我なんぢらと汝らの先祖にあたへし此處になすべし 一五 またわれ汝等のすべての兄弟すなはちエフラ
 イムのすべての裔を棄しごとく我前より汝らをも棄つべし
 一六 故に汝この民のために祈る勿れ彼らの爲に歎くなかれ求むるなかれ又我にとりなしをなす勿れわれ汝にき
 一七 汝かれらがユダの邑とエルサレムの街になすところを見ざるか 一八 諸子は薪を拾め父は火を燃き婦は麵
 一九 を搏ねパンをつくりて之を天后にそなふ又かれら他の神の前に酒をそゝぎて我を怒らす 一九 エホバいひたまふ彼
 二〇 ら我を怒らするか是れおのが面を辱むるにあらずや 二〇 是故に主エホバかくいひたまふ視よわが震怒とわが憤怒
 はこの處と人と獸と野の樹および地の果にそゝがんに且燃て滅ざるべし
 二一 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らの犠牲に燔祭の物をあはせて肉をくらへ 二三 そはわれ
 二三 汝等の先祖をエジプトより導きいだせし日に燔祭と犠牲とに就てかたりしことなく又命ぜしことなし 二三 惟われ
 二四 この事を彼等に命じ汝ら我聲を聽ばわれ汝らの神となり汝ら我民とならん且わが汝らに命ぜしすべての道を行み
 て福祉をうべしといへり 二四 されど彼らはきかず其耳を傾けずおのれの悪き心の謀と剛愎なるとにしたがひて
 二五 行みまた後を我にむけて其面を向けざりき 二五 汝らの先祖がエジプトの地をいでし日より今日にいたるまでわれ
 二六 我僕なる預言者を汝らにつかはし日々晨より之をつかはせり 二六 されど彼らは我にきかず耳を傾けずして其項を
 強くしその列祖よりも愈りて悪をなすなり

イ母前四・一〇、一一 二出三三・一〇 耶 一三 耶 一四 耶 一五 耶 一六 耶 一七 耶 一八 耶 一九 耶 二〇 耶 二一 耶 二二 耶 二三 耶 二四 耶 二五 耶 二六 耶 二七 耶 二八 耶 二九 耶 三〇 耶 三一 耶 三二 耶 三三 耶 三四 耶 三五 耶 三六 耶 三七 耶 三八 耶 三九 耶 四〇 耶 四一 耶 四二 耶 四三 耶 四四 耶 四五 耶 四六 耶 四七 耶 四八 耶 四九 耶 五〇 耶 五一 耶 五二 耶 五三 耶 五四 耶 五五 耶 五六 耶 五七 耶 五八 耶 五九 耶 六〇 耶 六一 耶 六二 耶 六三 耶 六四 耶 六五 耶 六六 耶 六七 耶 六八 耶 六九 耶 七〇 耶 七一 耶 七二 耶 七三 耶 七四 耶 七五 耶 七六 耶 七七 耶 七八 耶 七九 耶 八〇 耶 八一 耶 八二 耶 八三 耶 八四 耶 八五 耶 八六 耶 八七 耶 八八 耶 八九 耶 九〇 耶 九一 耶 九二 耶 九三 耶 九四 耶 九五 耶 九六 耶 九七 耶 九八 耶 九九 耶 一〇〇 耶 一〇一 耶 一〇二 耶 一〇三 耶 一〇四 耶 一〇五 耶 一〇六 耶 一〇七 耶 一〇八 耶 一〇九 耶 一一〇 耶 一一一 耶 一一二 耶 一一三 耶 一一四 耶 一一五 耶 一一六 耶 一一七 耶 一一八 耶 一一九 耶 一二〇 耶 一二一 耶 一二二 耶 一二三 耶 一二四 耶 一二五 耶 一二六 耶 一二七 耶 一二八 耶 一二九 耶 一三〇 耶 一三一 耶 一三二 耶 一三三 耶 一三四 耶 一三五 耶 一三六 耶 一三七 耶 一三八 耶 一三九 耶 一四〇 耶 一四一 耶 一四二 耶 一四三 耶 一四四 耶 一四五 耶 一四六 耶 一四七 耶 一四八 耶 一四九 耶 一五〇 耶 一五一 耶 一五二 耶 一五三 耶 一五四 耶 一五五 耶 一五六 耶 一五七 耶 一五八 耶 一五九 耶 一六〇 耶 一六一 耶 一六二 耶 一六三 耶 一六四 耶 一六五 耶 一六六 耶 一六七 耶 一六八 耶 一六九 耶 一七〇 耶 一七一 耶 一七二 耶 一七三 耶 一七四 耶 一七五 耶 一七六 耶 一七七 耶 一七八 耶 一七九 耶 一八〇 耶 一八一 耶 一八二 耶 一八三 耶 一八四 耶 一八五 耶 一八六 耶 一八七 耶 一八八 耶 一八九 耶 一九〇 耶 一九一 耶 一九二 耶 一九三 耶 一九四 耶 一九五 耶 一九六 耶 一九七 耶 一九八 耶 一九九 耶 二〇〇 耶 二〇一 耶 二〇二 耶 二〇三 耶 二〇四 耶 二〇五 耶 二〇六 耶 二〇七 耶 二〇八 耶 二〇九 耶 二一〇 耶 二一一 耶 二一二 耶 二一三 耶 二一四 耶 二一五 耶 二一六 耶 二一七 耶 二一八 耶 二一九 耶 二二〇 耶 二二一 耶 二二二 耶 二二三 耶 二二四 耶 二二五 耶 二二六 耶 二二七 耶 二二八 耶 二二九 耶 二三〇 耶 二三一 耶 二三二 耶 二三三 耶 二三四 耶 二三五 耶 二三六 耶 二三七 耶 二三八 耶 二三九 耶 二四〇 耶 二四一 耶 二四二 耶 二四三 耶 二四四 耶 二四五 耶 二四六 耶 二四七 耶 二四八 耶 二四九 耶 二五〇 耶 二五一 耶 二五二 耶 二五三 耶 二五四 耶 二五五 耶 二五六 耶 二五七 耶 二五八 耶 二五九 耶 二六〇 耶 二六一 耶 二六二 耶 二六三 耶 二六四 耶 二六五 耶 二六六 耶 二六七 耶 二六八 耶 二六九 耶 二七〇 耶 二七一 耶 二七二 耶 二七三 耶 二七四 耶 二七五 耶 二七六 耶 二七七 耶 二七八 耶 二七九 耶 二八〇 耶 二八一 耶 二八二 耶 二八三 耶 二八四 耶 二八五 耶 二八六 耶 二八七 耶 二八八 耶 二八九 耶 二九〇 耶 二九一 耶 二九二 耶 二九三 耶 二九四 耶 二九五 耶 二九六 耶 二九七 耶 二九八 耶 二九九 耶 三〇〇 耶

ナ結二・七 四八・三七 米一・三四 結七・二〇、ク申一七・三
 ラ耶五・三、三三・三三 一六 八・五、六、九、二七 ヤ耶一九・六
 ム耶九・三 牛王下二一・四、七代 ノ王下二三・一〇 耶マ王下二三・一〇 耶二・二〇
 ウ伯一・二〇 賽一五 下三三・四、五、七 一九・五、三三・三五 一九・二一 結六・五 フ賽二四・七、八 耶 〇・三三・一一 結 五王下二三・五 結八 二二、一六・四
 二一耶一六・六、 耶三三・一一、三三 才詩一〇六・三八 ケ申二八・二六 詩 一六・九、二五・一 七、三三・二六 八三・一〇 耶九・ 九・六

二七 汝彼らに此等のすべてのことばを語るとも汝にきかずかれらと呼ぶとも汝にこたへざるべし 汝かく彼
 二八 然らば語れこれは其神エホバの聲を聴すその訓を受ざる民なり眞實はうせてその口に絶たり

二九 (シオンの女よ) 汝の髪を剃りてこれを棄て山の上に哀哭の聲をあげよエホバその怒るところの世の人をす
 三〇 て、これを離れたまへばなり エホバいひたまふユダの民は我前に悪を行へり即ちその憎むべき者を我名をも

三一 て稱へらるゝ室に置いてこれを汚せり 又ベンヒンノムの谷に於てトペテの崇邱を築きてその子女を火に焚
 三二 んとせり我これを命ぜずまた斯ることを思はざりし エホバいひたまふ然ば視よ此處をトペテまたはベンヒン

三三 ノムの谷と稱へずして殺戮の谷と稱ふる日きたらん其は葬るべき地所なきまでにトペテに葬るべければなり
 三四 この民の屍は天空の鳥と地の獣の食物とならんこれを逐ふものなかるべし その時われユダの邑とエルサ

三レムの街に欣喜の聲 歡樂の聲 新婚の聲 新婦の聲なからしむべしこの地荒蕪ればなり
 一 エホバいひたまふその時人ユダの王等の骨とその牧伯等の骨と祭司の骨と預言者の骨とエルサレ

二 ムの民の骨をその墓よりほりいだし 彼等の愛し奉へ従ひ求め且祭れるところの日と月と天の衆
 三 群の前にこれを曝すべし其骨はあつむる者なく葬る者なくして糞土のごとくに地の面にあらん この悪き民の

四 中ののこれる餘遺の者すべてわが逐やりしところに餘れる者皆生るよりも死ぬることを願んと萬軍のエホバ云た
 まふ

第八章

四 汝また彼らにエホバかくいふと語るべし人もし仆るれば起きかへるにあらずやもし離るれば歸り來るに

一〇 エホバは眞の神なり彼は活る神なり永遠の王なり其怒によりて地は震ふ萬國はその憤怒にあたること能はず

二 汝等かく彼らにいふべし天地を造らざりし諸神は地の上よりこの天の下より失さらんと

三 エホバはその能をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒べたまへり 一三 かれ聲を

四 いだせば天に衆の水ありかれ雲を地の極よりいだし電と雨をおこし風をその府庫よりいだす 一四 すべての人は

五 獸の如くにして智なしすべての鑄匠はその作りし像のために辱をとる其鑄るところの像は偽物にしてその中に

六 靈魂なければなり 一五 是らは虚き者にして迷妄の工作なりその罰せらるゝときに滅ぶべし 一六 ヤコブの分は是の

七 ごとくならず彼は萬物の造化主なりイスラエルはその産業の杖なりその名は萬軍のエホバといふなり

八 圍の中に坐する者よ汝の包を地より取りあげよ 一八 エホバかくいひたまふみよ我この地にすめる者を此度

九 擲たん且かれらをせめなやまして擄へられしむべし 一九 われ毀傷をうく嗚呼われは禍なるかな我傷は重し我いふこれまことにわが患難なりわれ之を忍べし 二〇

一 幕屋はやぶれわが繩索は悉く断れ我衆子は我をすてゆきて居ずなりぬ幕屋を張る者なくわが幃をかくる者なし

二 牧者は愚にしてエホバを求めず故に利達すその群はみな散れり 二三 きげよ風聲あり北の國より大なる騒きたる

三 是ユダの諸邑を荒して山犬の巢となさん 二四 エホバよわれ知る人の途は自己によらず且歩行む人は自らその步履を定むること能はざるなり 二五

四 エホバよわれ知る人の途は自己によらず且歩行む人は自らその步履を定むること能はざるなり 二五

五 よ我を懲したまへ但道にしたがひ怒らずして懲したまへおそらくは我無に歸せん 二五 汝を知らざる國人と汝の名を

- イ詩三一・五
- 口提前六・一七
- ハ詩一〇・一六
- ニ詩九六・五
- ホ耶一〇・一五
- 一八 亞二三・二
- ヘ制一・一六、九
- 一三六・五、六
- 五二・一五
- ト詩九三・一
- チ伯九・八
- 詩一〇四
- ヲ箴三〇・二
- 二一 賽四〇・二二
- リ伯三八・三四
- 又詩一三五・七
- ル耶五一・二七、一八
- ヨ耶一〇・二一
- ク詩一六・五、七三
- 二六、一一九・五七
- タ詩一六・五、七三
- ニ六、一一九・五七
- ソ賽四七・四、五一
- レ申三三・九
- 詩七四
- 一八、五〇・三四
- ツ耶六・一
- 結二・三
- 二一、九・一
- ネ原前二五・二九
- 耶一六・一三
- ム詩七七・一〇
- ウ米七・九
- ナ結六・一〇
- 半耶四・二〇
- ラ耶四・一九、八
- ノ耶一・一五、四・六

五・二五、六・三二 耶三〇・一一 撒前
 才耶九・一一 四・五 撒後一・八
 二四 二四
 才詩六・二、三八・一

ケ詩七九・六 五・一
 フ耶八・一六 七・二三
 コ申二七・二六 加三 七・二三
 ア申七・二二、一三詩 二耶七・二三、二五、
 一〇五九、一〇 三五・一五 九

サ申二七・一五—二六 *耶七・二六
 キ羅二・一三 雅一・ 二耶三・一七、七、
 二四、九、一四 二四、九、一四
 シ結三二・二五 何六
 九

エ結二〇・一八

顛ざる族に汝の怒を斟ぎたまへ彼らはヤコブを噬ひ之をくらふて滅しその牧場を荒したればなり

第一章

エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 汝らこの契約の言をきよユダの人とエルサレムにすめ
 る者に告よ 汝かれらに語れイスラエルの神エホバかくいひたまふこの契約の言に遵はざる人は

四 此の契約はわが汝らの先祖をエジプトの地鐵の爐の中より導き出せし日にかれらに命ぜしものなり即
 ち我いひけらくなんぢら我聲をきよ我汝らに命ぜし諸の事に従ひて行はよ汝らは我民となり我は汝らの神となら

五 われ汝らの先祖に乳と蜜の流るゝ地を與へんと誓ひしことを成就んと即ち今日のごとしその時我こたへて
 アーメン、エホバといへり

六 またエホバ我にいひたまひけるは汝すべて此等の言をユダの諸邑とエルサレムの衢にしめし汝ら此契約の
 言をきよてこれを行へといふべし われ汝らの列祖をエジプトの地より導き出せし日より今日にいたるまで切

七 然ど彼らは遵はずその耳を傾けずおのおの其惡き心の剛愎
 八 に彼らを戒め頻に戒めて汝ら我聲に遵へといへり 然ど彼らは遵はずその耳を傾けずおのおの其惡き心の剛愎
 なるにしたがひて歩めり故にわれ此契約の言を彼等にきたらす是はわがかれらに之を行へと命ぜしかども彼等が

九 おこなはざりし者なり
 九 またエホバ我にいひたまひけるはユダの人々とエルサレムに住る者の中に叛逆の事あり 彼らは我言を
 きくことを好まざりしところのその先祖の罪にかへり亦他の神に従ひて之に奉へたりイスラエルの家とユダの家

二 はわがその列祖たちと締たる契約をやぶれり 二 この故にエホバかくいひ給ふみよわれ災禍をかれらにくださん

三 彼らこれを免かるゝことをえざるべし彼ら我をよぶとも我聽じ 三 ユダの邑とエルサレムに住る者はゆきてその

三 香を焚し神を顛んされど是等はその災禍の時に絶てかれらを救ふことあらじ 三 ユダよ汝の神の數は汝の邑の數

三 のごとし且汝らエルサレムの衢の數にしたがひて恥べき者に壇をたてたり即ちバアルに香を焚んとて壇をたつ

一四 故に汝この民の爲に祈る勿れ又その爲に泣きあるひは求める勿れ彼らがその災禍のために我を呼ときわれ彼

一五 らに聽ざるべし 一五 わが愛する者は我室にて何をなすや惡き謀をなすや願と聖き肉汝に災を脱れしむるや

一六 もし然らば汝よろこぶべし 一六 エホバ汝の名を嘉果ある美しき青橄欖の樹と稱たまひしがおほいなる喧嘩の聲を

一七 もて之に火をかけ且その枝を折りたまふ 一七 汝を植し萬軍のエホバ汝の災をさだめ給へりこれイスラエルの家

とユダの家みづから害ふの惡をなしたるによるなり即ちバアルに香を焚きてわれを怒らせたり

一八 エホバ我に知せたまひければ我これを知るその時なんぢ彼らの作爲を我にしめしたまへり 一八 我は牽れて

一八 牽られにゆく羔の如く彼らが我をそこなはんとて謀をなすを知らず彼らいふいざ我ら樹とその果とを共に滅さん

二〇 かれを生る者の地より絶てその名を人に忘れしむべしと 二〇 義き鞫をなし人の心腸を察りたまふ萬軍のエホバよ

二 我わが訴を汝にのべたればわれをして汝が彼らに仇を報すを見せしめたまへ 二 是をもてエホバ、アナトテの人

二 人につきてかくいひたまふ彼等汝の生命を取んと索めて言ふ汝エホバの名をもて預言する勿れ恐らくは汝我らの

三 手に死んと 三 故に萬軍のエホバかくいひたまふみよ我かれらを罰すべし壯丁は劍に死にその子女は飢饉にて

三 死なん 三 餘る者なかるべし我災をアナトテの人々にきたらしめわが彼らを罰するの年をきたらしめん

イ詩一八・四一 箴一 申三三・三七、三八 一六、一四、一一 基二・二二—二四 五・二二 耶二・二二 母前一六・七 代上 三三〇・一〇 箴二

二八 賽一・一五 公耶二・二八 約登五・一六 多一・一五 耶一八・一八 二八・九 詩七・九 二二、七、一三、 五〇・二七 路一九

耶一四・一二 結八 二耶三・二四 何九・ へ詩五〇・一六 賽一 一 又詩五二・八 羅一一 六・九、一四二・五 耶一七・一〇、二〇 一六 米二・六 耶一七・一〇、二〇 二二 默二・二三 一 耶三三・一二、四六 二二、四八・四四、

七・一三 米三・四 亞 一〇 又詩五二・八 羅一一 六・九、一四二・五 耶一七・一〇、二〇 一六 米二・六 耶一七・一〇、二〇 二二 默二・二三 一 耶三三・一二、四六 二二、四八・四四、

ツ詩五一・四 ナ賽二九・一三 太ウ發五・五 九・一〇 何四・三 一九・二二
 未伯一二・六、二一・七 一五・八 可七・六 申耶二三・一〇 何四 夕審三・一五 代上 マ鐵二六・二五 二八・三八 米六・
 詩三七・一、三五、 一三九 一三九 一九・五 耶四九 夕審五六・九 耶七 一五 基一・六
 七三・三 耶五・二八 ノ詩一〇七・三四 一九・五〇 四四 三三三 耶四二・二五 阿賽四二・二五
 哈一・四 馬三・一五 ム耶一一・二〇 才耶四・二五、七・二〇 ヤ耶九・四、一一、 フ耶六・三 申 伊利二六・一六 申

第一二章

一 エホバよわが汝と争ふ時に汝は義し惟われ鞫の事につきて汝と言ん悪人の途のさかえ悖れる者の
 二 みな福なるは何故ぞや 汝かれらを植たり彼らは根づき成長て實を結べりその口は汝に近けども
 三 その心は汝に遠さかる エホバ汝われを知り我を見またわが心の汝にむかひて何なるかを試みたまふ羊を宰り
 四 に牽いだすがごとく彼らを牽いだし殺す日の爲にかれらをそなへたまへ いつまでこの地は哭きすべての畑の
 五 蔬菜は枯るべけんやこの地に住る者の悪によりて畜獸と鳥は滅さる彼らいふ彼は我らの終をみざるべしと
 六 汝もし歩行者とともに趨てつかれなばいかで騎馬者と競はんや汝平安なる地を恃まばいかでヨルダンの
 七 傍の叢に居ることをえんや 汝の兄弟となんぢの父の家も汝を欺きまた大聲をあげて汝を追ふかれらしたし
 八 汝に語るともこれを信する勿れ
 九 われ我家を離れわが産業をすて我靈魂の愛する所の者をその敵の手にわたせり わが産業は林の獅子の
 一〇 ごとし我にむかひて其聲を揚ぐ故にわれ之を惡めり 我産業は我におけること班駁ある鳥のごとくならずや鳥
 一 之を圍むにあらずや野のすべての獸きたりあつまれ來てこれを食へ 衆の牧者わが葡萄園をほろぼしわが地を
 二 踐踏しわがうるはしき地を荒野となせり 彼らこれを荒地となせりその荒地我にむかひて哭くなり一人もかへ
 三 りみる者なければこの全地は荒たり 毀滅者は野のすべての童山のうへに來れりエホバの劍地のこの極より
 四 かの極までを滅ぼすすべて血氣ある者は安をえず 彼らは麥を播て荆棘をかる勞れども得るところなし汝らは
 五 その作物のために恥るにいたらん是エホバの烈き怒によりてなり

一四 わがイスラエルの民に嗣しむる産業をせむるところのわが惡き隣にむかひてエホバかくいふみよ
 一五 われ彼等をその地より拔出しましたユダの家を彼らの中より拔出すべし われ彼らを拔出せしのみまた彼らを恤
 一六 みておのおのを其産業にかへし各人をその地に歸らしめん 彼等もし我民の道をまなび我名をさしてエホバは
 一七 活くと誓ふこと嘗て我民を教へてバアルを指て誓はしめし如くせば彼らはわが民の中に建らるべし されど
 彼らもし聽かざれば我かならずかゝる民を全く拔出して滅すべしとエホバいひたまふ

第一三章

一 エホバかくいひたまへり汝ゆきて麻の帯をかひ汝の腰にむすべ水に入る勿れ われすなはち
 二 エホバの言に遵ひ帯をかひてわが腰にむすべり エホバの言ふたゞび我にのぞみて云ふ 汝が
 三 買て腰にむすべる帯を取り起てユフラテにゆき彼處にてこれを磬の穴にかくせと ことゝに於てわれエホバの命
 四 じたまひし如く往てこれをユフラテの涯にかくせり おほくの日を経しのうちエホバ我にいひたまひけるは起て
 五 ユフラテにゆきわが汝に命じて彼處にかくさしめし帯を取れと われすなはちユフラテにゆき帯を我隠せしと
 六 ころより掘取しにその帯は朽て用ふるにたへず
 七 またエホバの言われにのぞみて云ふ エホバかくいふ我かくの如くユダの驕傲とエルサレムの大なる
 八 驕傲をやぶらん この惡き民はわが言を聽ことをこばみ己の心の剛愎なるにしたがひて行み且他の神に従ひて
 九 これにつかへ之を拜す彼等は此帯の用ふるにたへざるが如くなるべし エホバいふ帯の人の腰に附がごとくわ
 一〇 れイスラエルのすべての家とユダのすべての家を我に附しめ之を我民となし名となし譽となし榮となさんとせり
 然るに彼等はきかざりき

イ 昭二・八 ハ 結二八・二五 ヘ 弗二・二〇、二二 彼 チ 利二六・一九 又 出 一九・五
 ロ 申三〇・三 耶 三二 二 歴九・一四 前 二・五 リ 耶九・一四、一一 九 耶 三三・九
 ホ 耶四・二 二 三 ト 察六〇・二二 八、一六・二二 七 賽五二・一七、二二、
 二七、五一・七 耶 二五・ カ 賽五・三〇、八・三二
 歴 八・九 詩 二・九

ヨ書七・一九
夕賽五九・九
レ詩四四・一九
ヨ耶九・一、一四・一七
哀一・二、一六、二二
一八
ツ耶九・一、一四・一七
ツ王下二四・二二
耶
ナ耶六・二四
ラ耶五・一九、一六
一〇
ム賽三・一七、四七
余三・五
二、三耶一三・二六
ウ詩一・四何一三・三
ノ耶一〇・一四
結一六・三七—三九
牛伯二〇・二九
詩
オ耶一三・二二
哀一
一〇
八 結一六・三七
三三・二九
何二、一〇

三 故に汝この言を彼らに語るべしイスラエルの神エホバかくいふ酒壺には皆酒盈つと彼汝にこたへていはん

三 我儕豈酒壺に酒の盈ることを知らんやと 其時汝かれらにいふべしエホバかくいふみよわれ此地に住るすべ

四 での者とダビデの位に坐する王等と祭司と預言者およびエルサレムに住るすべての者に酔を盈せ 彼らを此と

彼と打あはせて碎かん父と子をも然すべしわれ彼らを恤まず惜まず憐まずして滅さん

一五 汝らきけ耳を傾けよ驕る勿れエホバかたりたまふなり 汝らの神エホバに其いまだ暗を起したまはざる

一七 先汝らの足のくらき山に躓かざる先に榮光を販すべし汝ら光明を望まんにエホバ之を死の蔭に變へ之を昏黒とな

したまふにいたらん 汝ら若これを聴ずば我靈魂は汝らの驕を隠なるところに悲まん又エホバの群の掠めら

るゝによりて我目いたく泣て涙をながすべし

一八 なんぢ王と太后につげよ汝ら自ら謙りて坐せそは汝らの美しき冕なんぢらの首より落べければなり

一九 南の諸邑は閉てこれを啓く人なしユダは皆擄移され 盡くとらへ移さる

二〇 汝ら目を擧て北より來る者をみよ汝らが賜はりし群汝のうるはしき群はいづこにあるや かれ汝の親み

馴たる者を汝の上にてて首領となさんとき汝何のいふべきことあらんや汝の痛は子をうむ婦のごとくならざら

んや 汝心のうちに何故にこの事我にきたるやといふか汝の罪の重によりて汝の裾は掲げられなんぢの踵は

あらはさるゝなり エテオピア人その膚をかへうるか若これを爲しえは惡に慣たる汝

らも善をなし得べし 故にわれ彼らを散して野の風に吹散さるゝ皮壳のごとくせん エホバいひたまふこは

汝の得べき分わが量て汝にあたふる産業なり汝我をわすれて虚假を依頼ばなり 故にわれ汝の前の裳を剥ぎて

二三 汝の羞恥をあらはさん 二七 われ汝の姦淫と汝の嘶と汝が岡のうへと野になせし汝の亂淫の罪と汝の憎むべき行
 をみたりエルサレムよ汝は禍なるかな汝の潔くせらるゝには尙いくばくの時を経べきや

第一四章

一 乾旱の事につきてエレミヤにのぞみしエホバの言は左のごとし

二 ユダは悲むその門は傾き地にたふれて哭くエルサレムの咷は上る 三 その侯伯等は僕をつか
 はして水を汲しむ彼ら井にいたれども水を見ず空き器をもちて歸り恥かつ憂へてその首をおほふ 四 地に雨ふら
 ずして土燥裂たるにより農夫は恥て首を掩ふ 五 また野にある麀は子をうみて之を棄つ草なければなり 六 野の
 驢馬は童山のうへにたちて山犬のごとく喘ぎ草なきによりて目眩む

七 エホバよ我儕の罪われらを訟へて證をなすとも願くは汝の名の爲に事をなし給へ我儕の違背はおほいな
 り我儕汝に罪を犯したり 八 イスラエルの企望なる者その艱るときに救ひたまふ者よ汝いかなれば此地に於て
 他邦人のごとくし一夜寄宿の旅客のごとくしたまふや 九 汝いかなれば呆てをる人のごとくし救をなすこと能は
 ざる勇士のごとくしたまふやエホバよ汝は我らの間にいます我儕は汝の名をもて稱へらるゝ者なり我らを棄たま
 ふ勿れ

一〇 エホバこの民にかくいひたまへり彼らかく好んでさまよひ其足を禁めざればエホバ彼らを悦ばずいまその
 愆をおほえ其罪を罰すべし 一一 エホバまた我にいひたまひけるは汝この民のために恩をいのる勿れ 一二 彼ら斷食
 するとも我その呼籲をきかず燔祭と素祭を獻るとも我これをうけず却てわれ劍と饑饉と疫病をもて彼らを滅す
 べし

イ耶五・八 六・一三 六・二六 六・二七 六・二八 六・二九 六・三〇 六・三一 六・三二 六・三三 六・三四 六・三五 六・三六 六・三七 六・三八 六・三九 六・四〇 六・四一 六・四二 六・四三 六・四四 六・四五 六・四六 六・四七 六・四八 六・四九 六・五〇 六・五一 六・五二 六・五三 六・五四 六・五五 六・五六 六・五七 六・五八 六・五九 六・六〇 六・六一 六・六二 六・六三 六・六四 六・六五 六・六六 六・六七 六・六八 六・六九 六・七〇 六・七一 六・七二 六・七三 六・七四 六・七五 六・七六 六・七七 六・七八 六・七九 六・八〇 六・八一 六・八二 六・八三 六・八四 六・八五 六・八六 六・八七 六・八八 六・八九 六・九〇 六・九一 六・九二 六・九三 六・九四 六・九五 六・九六 六・九七 六・九八 六・九九 六・一〇〇 六・一〇一 六・一〇二 六・一〇三 六・一〇四 六・一〇五 六・一〇六 六・一〇七 六・一〇八 六・一〇九 六・一一〇 六・一一一 六・一一二 六・一一三 六・一一四 六・一一五 六・一一六 六・一一七 六・一一八 六・一一九 六・一二〇 六・一二一 六・一二二 六・一二三 六・一二四 六・一二五 六・一二六 六・一二七 六・一二八 六・一二九 六・一三〇 六・一三一 六・一三二 六・一三三 六・一三四 六・一三五 六・一三六 六・一三七 六・一三八 六・一三九 六・一四〇 六・一四一 六・一四二 六・一四三 六・一四四 六・一四五 六・一四六 六・一四七 六・一四八 六・一四九 六・一五〇 六・一五一 六・一五二 六・一五三 六・一五四 六・一五五 六・一五六 六・一五七 六・一五八 六・一五九 六・一六〇 六・一六一 六・一六二 六・一六三 六・一六四 六・一六五 六・一六六 六・一六七 六・一六八 六・一六九 六・一七〇 六・一七一 六・一七二 六・一七三 六・一七四 六・一七五 六・一七六 六・一七七 六・一七八 六・一七九 六・一八〇 六・一八一 六・一八二 六・一八三 六・一八四 六・一八五 六・一八六 六・一八七 六・一八八 六・一八九 六・一九〇 六・一九一 六・一九二 六・一九三 六・一九四 六・一九五 六・一九六 六・一九七 六・一九八 六・一九九 六・二〇〇 六・二〇一 六・二〇二 六・二〇三 六・二〇四 六・二〇五 六・二〇六 六・二〇七 六・二〇八 六・二〇九 六・二一〇 六・二一一 六・二一二 六・二一三 六・二一四 六・二一五 六・二一六 六・二一七 六・二一八 六・二一九 六・二二〇 六・二二一 六・二二二 六・二二三 六・二二四 六・二二五 六・二二六 六・二二七 六・二二八 六・二二九 六・二三〇 六・二三一 六・二三二 六・二三三 六・二三四 六・二三五 六・二三六 六・二三七 六・二三八 六・二三九 六・二四〇 六・二四一 六・二四二 六・二四三 六・二四四 六・二四五 六・二四六 六・二四七 六・二四八 六・二四九 六・二五〇 六・二五一 六・二五二 六・二五三 六・二五四 六・二五五 六・二五六 六・二五七 六・二五八 六・二五九 六・二六〇 六・二六一 六・二六二 六・二六三 六・二六四 六・二六五 六・二六六 六・二六七 六・二六八 六・二六九 六・二七〇 六・二七一 六・二七二 六・二七三 六・二七四 六・二七五 六・二七六 六・二七七 六・二七八 六・二七九 六・二八〇 六・二八一 六・二八二 六・二八三 六・二八四 六・二八五 六・二八六 六・二八七 六・二八八 六・二八九 六・二九〇 六・二九一 六・二九二 六・二九三 六・二九四 六・二九五 六・二九六 六・二九七 六・二九八 六・二九九 六・三〇〇 六・三〇一 六・三〇二 六・三〇三 六・三〇四 六・三〇五 六・三〇六 六・三〇七 六・三〇八 六・三〇九 六・三一〇 六・三一〇〇

七・二三
 ヲ耶六・二〇、七。
 ツ耶九・二六
 本耶四・一〇
 ナ耶二七・一〇
 ラ耶三三・二二、二七
 一五、二九・八、九
 ム耶五・二二、二三
 ウ詩七九・三
 申耶九・一、三・一七
 哀一・一六、二・一八
 ノ耶八・二二
 オ結七・一五
 ク耶五・三一
 申哀五・二二
 マ耶一五・一八
 ケ耶八・一五
 フ詩一〇六・六 但九
 テ亞一〇・一、二
 八
 コ詩七四・二、二〇、
 一〇六・四五
 エ申三三・二二
 ア詩一三五・七、一四
 七・八 賽三〇・二三
 耶五・二四、一〇、
 一三

一三 われいひけるは嗚呼主エホバよみよ預言者たちはこの民にむかひ汝ら剣を見ざるべし饑饉は汝らにきたら

一四 じわれ此處に鞏固なる平安を汝らにあたへんといへり エホバ我にいひたまひけるは預言者等は我名をもて

一五 詭を預言せりわれ之を遣さず之に命ぜずまた之にはす彼らは虚誕の黙示と卜筮と虚きことと己の心の詐を

一六 汝らに預言せり この故にかの吾が遣さざるに我名をもて預言して剣と饑饉はこの地にきたらじといへる預言

者等につきてエホバかくいふこの預言者等は剣と饑饉に滅さるべし また彼等の預言をうけし民は饑饉と剣に

一七 よりてエルサレムの街に擲棄られんこれを葬る者なかるべし彼等とその妻および其子その女みな然りそはわれ彼

一八 らの悪をその上に斟げばなり 汝この言を彼らに語るべしわが目は夜も晝もたえず涙を流さんそは我民の童女

大なる滅と重き傷によりて亡さるればなり われ出て畑にゆくに剣に死る者あり我邑にいるに饑饉に艱むもの

あり預言者も祭司もみなその地にさまよひて知ところなし

一九 汝はユダを悉くすてたまふや汝の心はシオンをきらふや汝いかなれば我儕を撃て愈しめざるか我ら平安を

二〇 望めども善ことあらず又醫さるゝ時を望むに却て驚懼あり エホバよ我らはおのれの悪と先祖の愆を知るわれ

二一 ら汝に罪を犯したり 汝の名のために我らを棄たまふ勿れ汝の榮の位を辱めたまふ勿れ汝のわれらに立し

二二 契約をおぼえて毀りたまふなかれ 異邦の虚き物の中に雨を降せうるものあるや天みづから白雨をくだすをえ

二二 んや我らの神エホバ汝これを爲したまふにあらずや我ら汝を望むそは汝すべて此等を悉く作りたまひたれば

なり

第一五章

一 エホバ我にいひたまひけるはたとひモーセとサムエルわが前にたつとも我こゝろは斯民を顧ざるべしかれらを我前より逐ひていでさらしめよ 彼らもし汝にわれら何處にいでさらんやといはじ

二 汝彼らにエホバかくいへりといへ死に定められたる者は死にいたり剣に定められたる者は剣にいたり饑饉に定め

三 られたる者は饑饉にいたり虜に定められたる者は虜にいたるべしと エホバ云たまひけるはわれ四の物をもて

四 彼らを罰せんすなはち剣をもて戮し犬をもて噬せ天空の鳥および地の獸をもて食ひ滅さしめん またユダの王

五 ヒゼキヤの子マナセがエルサレムになせし事によりわれ彼らをして地のすべての國に艱難をうけしめん

六 エルサレムよ誰かなんちを憐まんたれか汝のために嘆かん誰かちかづきて汝の安否を問はん エホバ

七 ひたまふ汝われをすてたり汝退けり故にわれ手を汝のうへに伸て汝を滅さんわれ憫に倦り われ風扇をもて

八 我民をこの地の門に煽がんかれらは其途を離れざるによりて我その子を絶ち彼らを滅すべし 彼らの寡婦はわ

九 が前に海濱の沙よりも多し晝われほろほす者を携へきたりて彼らと壯者の母とをせめ驚駭と恐懼を突然にかれの

上におこさん 七人の子をうみし婦は衰へて氣たえ尙晝なるにその日は早く没る彼は辱められて面をあからめ

一〇 其餘れる者はわれ之をその敵の劍に付さんとエホバいひたまふ

一〇 嗚呼われは禍なるかな我母よ汝なに故に我を生しや全國の人我と争ひ我を攻むわれ人に貸さず人また我に

貸さず皆我を詛ふなり

二 エホバいひたまひけるは我實に汝に益をえせしめんために汝を惱す我まことに敵をして其艱の時と災の

イ出三三・一一、一二 二、一二 亞一一・ト王下二二・一一、 四六 一四 一七三

詩九九・六 九 三三・二六、 二四・ 四六 一四 一七三

口母前七・九 九 三三・二六、 二四・ 四六 一四 一七三

ハ結一四・二四 八 申二八・二六 耶七 申二八・二五 耶 四〇・四、五 一七三

ニ耶四三・一一 結五 三三 耶七 申二八・二五 耶 四〇・四、五 一七三

・二二
 ム詩六九・七
 ウ結三・一、三 獸一〇
 九、一〇
 牛伯二三・二二 詩一
 一九・七二、一一一
 才耶三〇・一五
 ノ詩一・一、二六・四、
 夕伯六・一五
 ヤ耶一・一八、一九
 マ亞三・七
 ケ耶二五・一
 フ結二二・二六、四四
 ・二三
 コ耶一・一八、六・二七
 ア耶三二・一八、一九、
 エ耶二〇・二一、二二
 二五・三三
 サ詩八三・一〇 耶八
 二、九・二二
 キ詩七九・二 耶七・
 三三、三四・二〇

二二 時に汝に求むることをなさしめん 鐵いかに北の鐵と銅を碎かんや われ汝の資産と汝の資財を擄掠物

二四 とならしめ價をうることなからしめん是汝のすべての罪によるなりすべて汝の境のうちにかなさん われ汝

一五 敵をして汝を汝の識ざる地にとらへ移さしめん夫我怒によりて火燃えなんぢを焚んとするなり

一六 エホバよ汝これを知りたまふ我を憶え我をかへりみたまへ我を迫害るものに仇を復したまへ汝の容忍によ

一七 りて我をとらへられしむる勿れ我汝の爲に辱を受るを知りたまへ われ汝の言を得て之を食へり汝の言は

一八 わが心の欣喜快樂なり萬軍の神エホバよわれは汝の名をもて稱へらるゝなり われ嬉笑者の會に坐せずまた

一九 喜ばずわれ汝の手によりて獨り坐す汝憤怒をもて我に充したまへり 何故にわが痛は息ずわが傷は重くして

二〇 愈ざるか汝はわれにおけること水をたもたずして人を欺く溪河のごとくなるや

二一 是をもてエホバかくいひたまへり汝もし歸らば我また汝をかへらしめて我前に立しめん汝もし賤をすてゝ

二二 貴をいださば我口のごとくならん彼らは汝に歸らんされど汝は彼らにかへる勿れ われ汝をこの民の前に堅

二三 き銅の牆となさんかれら汝を攻るとも汝にかたざるべしそはわれ汝と偕にありて汝をたすけ汝を救へばなりと

二四 エホバいひたまへり 我汝を悪人の手より救ひとり汝を怖るべき者の手より放つべし

二五 エホバの言また我にのぞみていふ 汝この處にて妻を娶るなかれ子女を得るなかれ 此處

二六 第一六章 生きるゝ子女とこの地に之を生む母と之を生む父とに就てエホバかくいひたまふ 彼らは慘し

二七 き病に死し哀まれず葬られずして糞土のごとくに田地の面にあらんまた劍と饑饉に滅されて其屍は天空の鳥と

二八 地の獸の食物とならん

八七 七 おほよそエホバをたのみエホバを其恃とする人は福なり 彼は水の旁に植たる樹の如くならん其根を河にのべ炎熱きたるも恐るゝところなしその葉は青く亢旱の年にも憂へずして絶す果を結ぶべし

一〇九 九 心は萬物よりも偽る者にして甚だ悪し誰かこれを知るをえんや われエホバは心腹を察り腎腸を試み

二 おののに其途に順ひその行爲の果によりて報ゆべし 鷓鴣のおのれの生ざる卵をいだくが如く不義をもて財

二二 二 獲る者あり其人は命の半にてこれに離れその終に愚なる者とならん

二三 三 榮の位よ原始より高き者わが聖所たる者 イスラエルの望なるエホバよ凡て汝を離るゝ者は辱められ

二四 四 我を棄る者は土に録されん此はいける水の源なるエホバを離るゝによる エホバよ我を醫し給へ然らばわれ

二五 五 愈んわれを救ひたまへさらば我救はれん汝はわが頌るものなり 彼ら我にいふエホバの言は何にあるやいま之

二六 六 をのぞましめよと われ牧者の職を退かずして汝にしたがひ又禍の日を願はざりき汝これを知りたまふ我

二七 七 唇よりいづる者は汝の面の前にあり 汝我を懼れしむる者となり給ふ勿れ禍の時に汝は我避場なり 我を

二八 八 攻る者を辱しめ給へ我を辱しむるなかれ彼らを怖れしめよ我を怖れしめ給ふなかれ禍の日を彼らに來らしめ滅亡

二九 九 を倍して之を滅し給へ

一〇 一〇 エホバ我にかくいひ給へり汝ゆきてユダの王等の出入する民の門及びエルサレムの諸の門に立て 彼ら

一一 一 にいへ此門より入る所のユダの王等とユダのすべての民とエルサレムに住るすべての者よ汝らエホバの言をきけ

一二 二 エホバかくいひたまふ汝ら自ら慎め安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいる勿れ また安息日に

イ詩二・一二、三四、八、一二五、一、四六・五、一六、二〇、三三・一八、口伯八・一六詩一・三

ハ摩前一六・七代上二八・九詩七・九、一三九・二三、二四、二七、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ヘ路二二・二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ト耶一四・八、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

チ詩七三・二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

リ路一〇・二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ヲ賽五・一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ヨ詩三五・四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ニ民一五・三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

夕詩二五・二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

レ耶一一・二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ソ耶一九・三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

ネ出二〇・八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

結二〇・二二　　ラ耶二二・四　　ウ亞七・七
ナ耶七・二四、二六、　　ム耶三二・四四、三三　　才耶二一・一四、四九　　一六・一七　　廢一・四、七、一〇、　　五二・一三　　マ賽六四・八
一一・一〇　　・一三　　ノ詩一〇七・二二、一　　・二七　　哀四・一一　　ク王下二五・九　　耶　　二〇、二一　　ヤ賽四五・九　　羅九・　　ケ耶一・二〇　　コ耶二六・三　　余三・
一〇

二三　汝らの家より荷を出す勿れ諸の工作をなす勿れ我汝らの先祖に命ぜしごとく安息日を聖くせよ　　三三　されど彼らは

二四　遵はず耳を傾けずまたその項を強くして聽ず訓をうけざるなり

二五　エホバいひ給ふ汝らもし謹慎て我にきゝ安息日に荷をたづさへてこの邑の門にいらす安息日を聖くなして

二六　諸の工作をなさずば　　二五　ダビデの位に坐する王等牧伯たちユダの民エルサレムに住る者車と馬に乗てこの邑の門

二七　よりいることをえんまた此邑には限なく人すまはん　　二六　また人々ユダの邑とエルサレムの四周およびベニヤミン

二八　の地と平地と山と南の方よりきたり燔祭犠牲素祭馨香謝祭を携へてエホバの室にいらん　　二七　されど汝らもし

二九　我に聽ずして安息日を聖くせず安息日に荷をたづさへてエルサレムの門にいらばわれ火をその門の内に燃して

三〇　エルサレムの殿舎を燬んその火は滅ざるべし

第一八章

一　エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ　　二　汝起て陶人の屋にくだれ我かしこに於てわが言を汝に

三　聞しめんと　　三　われすなはち陶人の屋にくだり視るに轆轤をもて物をつくりをりしが　　四　その泥を

四　もて造れるところの器陶人の手のうちに傷ねたれば彼その心のまゝに之をもて別の器をつくれり

五　時にエホバの言我にのぞみていふ　　六　エホバいふイスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすこ

七　とをえざるかイスラエルの家よ陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり　　七　われ急に民あるひは國をぬく

八　べし敗るべし滅すべしといふことあらんに　　八　もし我いひしところの國その惡を離れなば我之に災を降さんと

九　おもひしことを悔ん　　九　我また急に民あるひは國を立べし植べしといふことあらんに　　一〇　もし其國わが目に悪く

一〇　見ゆるところの事を行ひわが聲に遵はずば我これに福祉を錫へんといひしことを悔ん　　一一　汝いまユダの人々と

エルサレムに住る者にいへエホバかくいへり視よ我汝らに災をくださんと思ひめぐらし汝らをはかる計策を設く故に汝らのおの其悪き途を離れ其途と行をあらためよと しかるに彼らいふ是は徒然なりわれらは自己の

圖維ところにしたがひ各自その悪き心の剛愎なるを行はんと

この故にエホバかくいひたまふ汝ら異國のうちに問へ斯の如きことを聞きし者ありやイスラエルの處女は

いと驚くべきことをなせり レバノンの雪豈野の磬を離れんや遠方より流くる冷なる水豈澗かんや しかる

に我民は我をわすれて虚き物に香を焚り是等の物彼らをその途すなはち古き途に蹶かせまた徑すなはち備なき道

に行しめ その地を荒して恒に人の笑とならしめん凡て其處を過る者は驚きてその首を揺らん われ東風の

ごとくに彼らをその敵の前に散さん其滅亡の日にはわれ背を彼らに向て面をむけじ

彼らいふ去來われら計策を設てエレミヤをはからんそれ祭司には律法あり智慧ある者には謀畧あり預言者

には言ありて失ざるべし去來われら舌をもて彼を撃ちその諸の言を聽ことをせざらんと

エホバよ我にきゝたまへ又我と争ふ者の聲をきゝたまへ 惡をもて善に報ゆべきものならんや彼らはわ

が生命をとらん爲に坑を掘りわが汝の前に立て彼らを善く言ひ汝の憤怒を止めんとせしを憶えたまへ

ばかれらの子女を饑饉にあたへ彼らを劍の刃にわたしたまへ其妻は子を失ひ且寡となり其男は死をもて亡され

その少者は劍をもて戦に殺されよかし 汝突然に敵をかれらに臨ませたまふ時號呼をその家の内より聞えし

めよそは彼ら坑を掘りて我を執へんとしたまた機檻を置てわが足を執へんとすればなり エホバよ汝はかれらが

イ王下一七・一三 耶一・一〇 哥前五 一七・一三 一三・五〇・一三 耶二・二七 夕詩三五・七、五七、

七・三、二五・五、 耶一・一五、一六 王上九・八 哀二・ 七 耶一・一九 六 耶一八・二二 夕詩三五・四、一〇九

二六・一三、三五、 二耶五・三〇 二一九 一五 米六・一六 カ利一〇・一、馬二、 七 詩一〇九・九、一〇 〇、一五・一五

一五 水耶二・一三、三一、三 一六 又詩四八・七 七 約七・四八、四九 ソ耶一八・二〇 未審一五・八 王下

口耶二・二五 二二、一三、二五、 耶一九・八、四九、 耶一三・二四 詩一〇九・四、五 二二・二二

ム申二八・二〇 察 一五・六、一七・一三 申耶七・三一、三二、 才番一五・八 十詩七九・二 耶七・マ耶一八・一六、四九 二八・五三 察九・コ詩二・九 察三〇・
六五・一一 耶二・ウ王下二二・一六 耶 三二・三五 夕利二六・一七 申 三三・一六、四、三四 二〇・衰四・一〇 一四 衰四・二
一三、一七、一九、 二・三四 利一八・二一 二八・二五 二〇 ケ利二六・二九 申 フ耶五一・六三、六四

我を殺さんとするすべての謀畧を知りたまふ其惡を赦すことなく其罪を汝の前より抹去りたまふなかれ彼らを汝の前に仆れしめよ汝の怒りたまふ時にかく彼らになしたまへ

第十九章

エホバかくいひたまふ往て陶人の瓦罇をかひ民の長老と祭司の長老の中より數人をともなひて陶人の門の前にあるベンヒンノムの谷にゆき彼處に於てわが汝に告んところの言を宣よ 云く

ユダの王等とエルサレムに住る者よエホバの言をきけ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よ我災を此處にくだすべし凡そ之をきく者の耳はかならず鳴らん 此は彼ら我を棄てこの處を瀆し此にて自己とその先祖およびユダの王等の知ざる他の神に香を焚き且辜なきものの血をこの處に盈せばなり 又彼らはバアルの爲に崇邱を築き火をもて己の兒子を焚き燔祭となしてバアルにさげたり此わが命ぜしことにあらず我いひしことにあらず又我心に意はざりし事なり エホバいひたまふさればみよ此處をトベテまたはベンヒンノムの谷と稱ずして屠戮の谷と稱ふる日きたらん また我この處に於てユダとエルサレムの謀をむなしし劍をもて彼らを其敵の前とその生命を索る者の手に仆れまたその屍を天空の鳥と地の獸の食物となし かつ此邑を荒して人の胡盧とならしめん凡そこゝを過る者はその諸の災に驚きて笑ふべし また彼らがその敵とその生命を索る者と共に圍みくるしめらるゝ時我彼らをして己の子の肉女の肉を食はせん又彼らは互にその友の肉を食ふべし

汝ともに行く人の目の前にてその瓦罇を毀ちて彼らにいふべし 萬軍のエホバかくいひ給ふ一回毀てば復全うすること能はざる陶人の器を毀つが如くわれ此民とこの邑を毀たんまた彼らは葬るべき地なきによりて

トペテに葬られん 三 エホバいひ給ふ我この處とこの中に住る者とに斯なし此邑をトペテの如くなすべし 且

エルサレムの室とユダの王等の室はトペテの處のごとく汚れん其は彼らすべての室の屋蓋のうへにて天の衆群に

香をたき他の神に酒をそよげばなり

一四 エレミヤ、エホバの己を遣して預言せしめたまひしトペテより歸りきたりエホバの室の庭に立ちすべての

民に語りていひけるは 一五 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれ我いひし諸の災をこの邑と

その諸の郷村にくださん彼らその項を強くして我言を聴ざればなり

第二〇章

一 祭司インメルの子エホバの室の宰の長なるバシユル、エレミヤがこの言を預言するをきけり 是に於てバシユル預言者エレミヤを打ちエホバの室にある上のベニヤミンの門の桎梏に繋げり

三 翌日バシユル、エレミヤを桎梏より釋はなちしにエレミヤ彼にいひけるはエホバ汝の名をバシユルと稱ずして

四 マゴルミツサビブ(驚懼周圍にあり)と稱び給ふ 即ちエホバかくいひたまふ視よわれ汝をして汝と汝のすべて

の友に恐怖をおこさしむる者となさん彼らはその敵の劍に仆れん汝の目はこれを見べし我またユダのすべての民

五 をバビロン王の手に付さん彼は彼らをバビロンに移し劍をもて殺すべし 我またこの邑のすべての貨財とその

得たる諸の物とその諸の珍寶とユダの王等のすべての儲蓄を其敵の手に付さん彼らはこれを掠めまた民を擄へ

六 てバビロンに移すべし 六 バシユルよ汝と汝の家にすめる者は悉く擄へ移されん汝はバビロンにいたりて彼處に

死にかしこに葬られん汝も汝が偽りて預言せし言を聴し友もみな然らん

七 エホバよ汝われを勧めたまひてわれ其勸に従へり汝我をとらへて我に勝給へりわれ日々に人の笑となり

イ耶七・三二 三三・二九番一・五 へ耶七・二六、一七・チ詩三一・一三 耶二 王下二〇・一七、二四 二二
ロ王下二三・一〇 二耶七・一八 〇・一〇、六・二五、二四・二二一六、又耶一四・一三、一四、ル耶一・六、七
ハ王下二三・一二 耶 ホ代下二〇・五 ト代上二四・一四 四六・五、四九・二九 二五・二三 耶三・ 二八・一五、二九、ヲ哀三・一四

七 耶六・七
 カ伯三二・一八、一九
 詩三九・三
 三 伯三二・一八 徒
 一八・五
 タ詩三一・二三
 レ伯一九・一九 詩
 四一・九、五五・
 一三、一四 路二一
 五三、五四
 ツ耶一・八、一九
 ツ耶一五・二〇、一七
 ナ耶二一・二〇、一七
 ヲ耶一・一〇
 ラ詩五四・七、五九・
 一〇
 ム詩三五・九、一〇、
 一〇九・三〇、三一
 ウ伯三・三 耶一五・
 一〇
 井創一九・二五
 ノ耶一八・二三
 オ伯三・一〇、一一
 ク伯三・二〇
 ヤ哀三・一
 マ耶三八・一
 ケ王下二五・一八 耶
 二九・二五、三七・三
 フ耶三七・三、七

八 人皆我を嘲りぬ 八 われ語り呼はるごとく暴逆殘虐の事をいふエホバの言日々にわが身の恥辱となり嘲弄となる

九 なり 九 是をもて我かさねてエホバの事を宣す又その名をもてかたらじといへり然どエホバのことは我心にあり

一〇 て火のわが骨の中に閉こもりて燃るがごとくなれば忍耐につかれて堪難し 一〇 そは我おほくの人の讒をきく驚懼

一 からは我儕彼に勝て仇を報ゆることをえんと 一 然どエホバは強き勇士のごとくにして我と偕にいます故に我を

二 攻る者は蹶きて勝ことをえずそのなし遂ざるが爲に大なる恥辱を取ん其羞恥は何時迄も忘られざるべし 二 義

三 人を試み人の心腸を見たまふ萬軍のエホバよ我汝に訴を申たれば我をして汝が彼らに仇を報すを見せしめよ

三 エホバに歌を謡へよエホバを頌めよそは貧者者の生命を悪者の手より救ひ給へばなり

四 あゝ我生れし日は詛はれよ我母のわれを生し日は祝せられざれ 四 わが父に男子汝に生れしと告て父を大

五 に喜ばせし人は詛はれよ 其人はエホバの憫まらずして滅したまひし邑のごとくなれよ彼をして朝に號呼をきか

六 しめ午間に鬨聲をきかしめよ 彼我を胎のうちに殺さず我母を我の墓となさず常にその胎を大ならしめざり

七 しが故なり 七 我何なれば胎をいでて艱難と憂患をかうむり恥辱をもて日を送るや

八 第二一章 王ネブカデネザル我らを攻むれば汝われらの爲にエホバに求めよエホバ恒のごとくそのもろもろの

奇なる跡をもて我らを助けバビロンの王を我らより退かしめたまふことあらんと曰しむ其時エホバの言エレミヤ

エレミヤ記 一〇・八—一一・二

一三一

に臨めり

四三 エレミヤ彼らにこたへけるは汝らゼデキヤにかく語ふべし 四 イスラエルの神エホバかくいひたまふ視よ

われ汝らがこの邑の外にありて汝らを攻め圍むところのバビロン王およびカルデア人とたゝかひて手に持ところ

のその武器をかへし之を邑のうちに聚めん 五 われ手を伸べ臂をつよくし震怒と憤恨と烈き怒をもて汝らをせむ

七六 べし 我また此邑にすめる人と畜を撃ん皆重き疫病によりて死べし 七 エホバいひたまふ此後われユダの王ゼ

デキヤとその諸臣および民此邑に疫病と劍と饑饉をまぬかれて遺れる者をバビロンの王ネブカデネザルの手と其

敵の手および凡そその生命を索る者の手に付さんバビロンの王は劍の刃をもて彼らを撃ちかれらを惜まず顧みず

恤れまざるべし

九八 汝また此民にエホバかくいふと語るべし視よわれ生命の道と死の道を汝らの前に置く 九 この邑にとどま

る者は劍と饑饉と疫病に死べしされど汝らを攻め圍むところのカルデアヤ人に出降る者はいきん其命はおのれの

掠取物となるべし 一〇 エホバいひたまふ我この邑に面を向しは福をあたる爲にあらず禍をあたる爲なり

この邑はバビロンの王の手に付されん彼火をもて之を焚くべし 二一 またユダの王の家に告べし汝らエホバの言をきけ 二二 ダビデの家よエホバかくいふ汝朝ごとくに義く鞫をな

し物を奪はるゝ人をその暴逆者の手より救へ否ざれば汝らの行の悪によりて我怒火のごとくに發で燃て滅ざる

べし 二三 エホバいひたまふ谷と平原の磐とにすめる者よみよ我汝に敵す汝らは誰か降て我儕を攻んや誰かわれら

の居處にいらんやといふ 二四 我汝らをその行の果によりて罰せん又其林に火を起し其四周をことごとく焚つくす

イ賽一三・四 五、五二・九 申三〇・一九 申三九・一八、四五 四四・一一 歴九・四 三七・一〇、三八・ 九 詩一〇一・八 九 耶四九・四 口出六・六 申二八・五〇 代下 八耶三八・二、一七、 五 耶三八・三 一八、二三、五二・ 九 耶三三・三 亞七・九 三 箴一・三一 三 八耶三七・一七、三九 三六・一七 一八 利一七・一〇 耶 又耶三四・二、二二、 一三 結一三・八 一〇、一一 三三

夕代下三六・一九 耶 ン耶二一・二二
 五二・二三 ツ耶三三・二七
 一耶一七・二〇 ネ耶一七・二五
 ナ來六・二三、一七 ウ申二九・二四、二五 下三四・二五
 ラ賽三七・二四 王上九・八、九 ノ王下二二・二〇
 ム耶二一・一四 牛王下二二・一七 代 オ耶二二・一一
 夕代上三・一五 王下 マ利一九・一三 申 雅五・四
 二二・三〇 二四・一四、一五 米 ケ王下二三・三五 耶
 三・一〇 哈二・九 三二・一八

べしとエホバいひたまふ

第二章

エホバかくいひたまへり汝ユダの王の室にくだり彼處にこの言をのべていへ
 するユダの王よ汝と汝の臣および此門よりいる汝の民エホバの言をきけ
 エホバかくいふ汝ら

公道と公義を行ひ物を奪はるゝ人をその暴虐者の手より救ひ異邦人と孤子と廢婦をなやまし虐ぐる勿れまた此處
 に無辜の血を流す勿れ 汝らもし此言を眞に行はゞダビデの位に坐する王とその臣および其民は車と馬に乗
 てこの室の門にいることをえん 然ど汝らもし此言を聽ずばわれ自己を指して誓ふ此室は荒地となるべしとエ

ホバいひたまふ エホバ、ユダの王の家につきてかく曰たまふ汝は我におけることギレアデのごとくレバノン
 の巔のごとし然どわれかならず汝を荒野となし人の住はざる邑となさん われ破壊者をまふけて汝を攻めしめ

ん彼ら各人その武器を執り汝の美しき香柏を斫てこれを火に投いれん 多の國の人此邑をすぎ互に語てエホバ
 何なれば此大なる邑にかく爲せしやといはん 人こたへて是は彼等其神エホバの契約をすて、他の神を拜し

之に奉へしに由なりといはん
 死者の爲に泣くことなくまた之が爲に嗟くこと勿れ寧擲へ移されし者の爲にいたく嗟くべし彼は再び歸て

その故園を見ざるべければなり ユダの王ヨシヤの子シャルム即ちその父に繼で王となりて遂に此處をいでた

る者につきてエホバかくいひたまへり彼は再び此處に歸らじ 彼はその移されし處に死んふたゝび此地を見ざ
 るべし

不義をもて其室をつくり不法をもて其樓を造り其隣人を傭て何をも與へず其價を拂はざる者は禍

二四 なるかな 彼いふ我己の爲に廣厦と涼しき樓をつくり又己の爲に窓を造り香柏をもて之を蔽ひ赤く之を

二五 塗んと 汝香柏を争ひもちふるによりて王たるを得るか汝の父は食飲せざりしや公義と公道を行ひて福を

二六 得ざりしや 彼は貧者と患難者の訟を理して祥をえたりかく爲すは我を識ことに非ずやとエホバひ給ふ

二七 然ど汝の目と心は惟貪をなさんとし無辜の血を流さんとし虐遇と暴逆をなさんとするのみ 故に

二八 エホバ、ユダの王ヨシヤの子エホヤキムにつきてかく曰たまふ衆人は哀しいかな我兄かなしいかな我姉といひて

二九 嗟かず又哀しいかな主よ哀しいかな其榮と曰て嗟かじ 彼は驢馬を埋るがごとく埋られん即ち曳れてエルサレ

三〇 ムの門の外に投棄らるべし 汝レバノンに登りて呼ばはりバシヤンに汝の聲を揚げアバリムより呼ばれ其は汝の愛する者悉く滅され

三一 たればなり 汝の平康なる時我なんぢに語しかども汝は我にきかじといへり汝いとけなき時よりわが聲を聴す

三二 これ汝の故習なり 汝の牧者はみな風に吞つくされ汝の愛する者はとらへ移されん其時汝はおのれの諸の悪

三三 のために痛く恥べし 汝レバノンにすみ巢を香柏につくる者よ汝の劬勞子を産む婦の痛苦のごとくにきたらん

三四 とき汝の哀慘はいかにぞや エホバひたまふ我は活くユダの王エホヤキムの子エコニヤは我右の手の指環なれども我これを拔ん

三五 われ汝の生命を索る者の手および汝が其面を畏るゝ者の手すなはちバビロンの王ネブカデネザルの手とカル

三六 デヤ人の手に汝を付さん われ汝と汝を生し母を汝等がうまれざりし他の地に逐やらん汝ら彼處に死べし

三七 彼らの靈魂のいたく歸らんことを願ふところの地に彼らは歸ることをえず この人エコニヤは賤むべき壤

三八

イ王下二三・二五 八結一九・六 耶 耶二三・一 耶 耶二三・二〇 耶 耶二三・二一 耶 耶二三・二二 耶 耶二三・二三 耶 耶二三・二四 耶 耶二三・二五 耶 耶二三・二六 耶 耶二三・二七 耶 耶二三・二八 耶 耶二三・二九 耶 耶二三・三〇 耶 耶二三・三一 耶 耶二三・三二 耶 耶二三・三三 耶 耶二三・三四 耶 耶二三・三五 耶 耶二三・三六 耶 耶二三・三七 耶 耶二三・三八 耶 耶二三・三九 耶 耶二三・四〇 耶 耶二三・四一 耶 耶二三・四二 耶 耶二三・四三 耶 耶二三・四四 耶 耶二三・四五 耶 耶二三・四六 耶 耶二三・四七 耶 耶二三・四八 耶 耶二三・四九 耶 耶二三・五〇 耶 耶二三・五一 耶 耶二三・五二 耶 耶二三・五三 耶 耶二三・五四 耶 耶二三・五五 耶 耶二三・五六 耶 耶二三・五七 耶 耶二三・五八 耶 耶二三・五九 耶 耶二三・六〇 耶 耶二三・六一 耶 耶二三・六二 耶 耶二三・六三 耶 耶二三・六四 耶 耶二三・六五 耶 耶二三・六六 耶 耶二三・六七 耶 耶二三・六八 耶 耶二三・六九 耶 耶二三・七〇 耶 耶二三・七一 耶 耶二三・七二 耶 耶二三・七三 耶 耶二三・七四 耶 耶二三・七五 耶 耶二三・七六 耶 耶二三・七七 耶 耶二三・七八 耶 耶二三・七九 耶 耶二三・八〇 耶 耶二三・八一 耶 耶二三・八二 耶 耶二三・八三 耶 耶二三・八四 耶 耶二三・八五 耶 耶二三・八六 耶 耶二三・八七 耶 耶二三・八八 耶 耶二三・八九 耶 耶二三・九〇 耶 耶二三・九一 耶 耶二三・九二 耶 耶二三・九三 耶 耶二三・九四 耶 耶二三・九五 耶 耶二三・九六 耶 耶二三・九七 耶 耶二三・九八 耶 耶二三・九九 耶 耶二三・一〇〇 耶 耶二三・一〇一 耶 耶二三・一〇二 耶 耶二三・一〇三 耶 耶二三・一〇四 耶 耶二三・一〇五 耶 耶二三・一〇六 耶 耶二三・一〇七 耶 耶二三・一〇八 耶 耶二三・一〇九 耶 耶二三・一一〇 耶 耶二三・一一一 耶 耶二三・一一二 耶 耶二三・一一三 耶 耶二三・一一四 耶 耶二三・一一五 耶 耶二三・一一六 耶 耶二三・一一七 耶 耶二三・一一八 耶 耶二三・一一九 耶 耶二三・一二〇 耶 耶二三・一二一 耶 耶二三・一二二 耶 耶二三・一二三 耶 耶二三・一二四 耶 耶二三・一二五 耶 耶二三・一二六 耶 耶二三・一二七 耶 耶二三・一二八 耶 耶二三・一二九 耶 耶二三・一三〇 耶 耶二三・一三一 耶 耶二三・一三二 耶 耶二三・一三三 耶 耶二三・一三四 耶 耶二三・一三五 耶 耶二三・一三六 耶 耶二三・一三七 耶 耶二三・一三八 耶 耶二三・一三九 耶 耶二三・一四〇 耶 耶二三・一四一 耶 耶二三・一四二 耶 耶二三・一四三 耶 耶二三・一四四 耶 耶二三・一四五 耶 耶二三・一四六 耶 耶二三・一四七 耶 耶二三・一四八 耶 耶二三・一四九 耶 耶二三・一五〇 耶 耶二三・一五一 耶 耶二三・一五二 耶 耶二三・一五三 耶 耶二三・一五四 耶 耶二三・一五五 耶 耶二三・一五六 耶 耶二三・一五七 耶 耶二三・一五八 耶 耶二三・一五九 耶 耶二三・一六〇 耶 耶二三・一六一 耶 耶二三・一六二 耶 耶二三・一六三 耶 耶二三・一六四 耶 耶二三・一六五 耶 耶二三・一六六 耶 耶二三・一六七 耶 耶二三・一六八 耶 耶二三・一六九 耶 耶二三・一七〇 耶 耶二三・一七一 耶 耶二三・一七二 耶 耶二三・一七三 耶 耶二三・一七四 耶 耶二三・一七五 耶 耶二三・一七六 耶 耶二三・一七七 耶 耶二三・一七八 耶 耶二三・一七九 耶 耶二三・一八〇 耶 耶二三・一八一 耶 耶二三・一八二 耶 耶二三・一八三 耶 耶二三・一八四 耶 耶二三・一八五 耶 耶二三・一八六 耶 耶二三・一八七 耶 耶二三・一八八 耶 耶二三・一八九 耶 耶二三・一九〇 耶 耶二三・一九一 耶 耶二三・一九二 耶 耶二三・一九三 耶 耶二三・一九四 耶 耶二三・一九五 耶 耶二三・一九六 耶 耶二三・一九七 耶 耶二三・一九八 耶 耶二三・一九九 耶 耶二三・二〇〇 耶 耶二三・二〇一 耶 耶二三・二〇二 耶 耶二三・二〇三 耶 耶二三・二〇四 耶 耶二三・二〇五 耶 耶二三・二〇六 耶 耶二三・二〇七 耶 耶二三・二〇八 耶 耶二三・二〇九 耶 耶二三・二一〇 耶 耶二三・二一一 耶 耶二三・二一二 耶 耶二三・二一三 耶 耶二三・二一四 耶 耶二三・二一五 耶 耶二三・二一六 耶 耶二三・二一七 耶 耶二三・二一八 耶 耶二三・二一九 耶 耶二三・二二〇 耶 耶二三・二二一 耶 耶二三・二二二 耶 耶二三・二二三 耶 耶二三・二二四 耶 耶二三・二二五 耶 耶二三・二二六 耶 耶二三・二二七 耶 耶二三・二二八 耶 耶二三・二二九 耶 耶二三・二三〇 耶 耶二三・二三一 耶 耶二三・二三二 耶 耶二三・二三三 耶 耶二三・二三四 耶 耶二三・二三五 耶 耶二三・二三六 耶 耶二三・二三七 耶 耶二三・二三八 耶 耶二三・二三九 耶 耶二三・二四〇 耶 耶二三・二四一 耶 耶二三・二四二 耶 耶二三・二四三 耶 耶二三・二四四 耶 耶二三・二四五 耶 耶二三・二四六 耶 耶二三・二四七 耶 耶二三・二四八 耶 耶二三・二四九 耶 耶二三・二五〇 耶 耶二三・二五一 耶 耶二三・二五二 耶 耶二三・二五三 耶 耶二三・二五四 耶 耶二三・二五五 耶 耶二三・二五六 耶 耶二三・二五七 耶 耶二三・二五八 耶 耶二三・二五九 耶 耶二三・二六〇 耶 耶二三・二六一 耶 耶二三・二六二 耶 耶二三・二六三 耶 耶二三・二六四 耶 耶二三・二六五 耶 耶二三・二六六 耶 耶二三・二六七 耶 耶二三・二六八 耶 耶二三・二六九 耶 耶二三・二七〇 耶 耶二三・二七一 耶 耶二三・二七二 耶 耶二三・二七三 耶 耶二三・二七四 耶 耶二三・二七五 耶 耶二三・二七六 耶 耶二三・二七七 耶 耶二三・二七八 耶 耶二三・二七九 耶 耶二三・二八〇 耶 耶二三・二八一 耶 耶二三・二八二 耶 耶二三・二八三 耶 耶二三・二八四 耶 耶二三・二八五 耶 耶二三・二八六 耶 耶二三・二八七 耶 耶二三・二八八 耶 耶二三・二八九 耶 耶二三・二九〇 耶 耶二三・二九一 耶 耶二三・二九二 耶 耶二三・二九三 耶 耶二三・二九四 耶 耶二三・二九五 耶 耶二三・二九六 耶 耶二三・二九七 耶 耶二三・二九八 耶 耶二三・二九九 耶 耶二三・三〇〇 耶 耶二三・三〇一 耶 耶二三・三〇二 耶 耶二三・三〇三 耶 耶二三・三〇四 耶 耶二三・三〇五 耶 耶二三・三〇六 耶 耶二三・三〇七 耶 耶二三・三〇八 耶 耶二三・三〇九 耶 耶二三・三一〇 耶 耶二三・三一〇

夕詩三一・一二 耶 ン代上三・一六、一七 ナ出三三・三四
 四八・三八 何八・八 太一・一二 ラ耶三二・三七 結 四〇・一〇、一一 耶 申詩七二・二 賽九・ 才耶三二・三七
 申三二・一 賽一・ ッ耶三六・三〇 三四・二三 三三・一四、一六 七、三三・一、一八 一・三〇 才耶三三・一六 哥前 才耶一六・一四、一五
 二、三四・一 米一 耶一〇・二一、二二 ム耶三・一五 結三四 但九・二四 亞三・ ノ申三三・二八 亞 才耶四三・五、六 耶 才耶五・七、八、九・二
 二二 結三四・二 二二三 八、六・一二 約一 一四・一一 二二三・三 耶 才耶九・一〇、一二、四

二九 二九 地よ地よ地よエホバの言をきけ エホバかくいひたまふこの人を子なくして其生命の中に榮えざる人と
 二〇 録せそはその子孫のうち榮えてダビデの位に坐しユダを治る人かさねてなかるべければなり

二一 第二三章 一 エホバいひ給ひけるは嗚呼わが養ふ群を滅し散す牧者は禍なるかな 故にイスラエルの神エ
 二 ホバ我民を養ふ牧者につきて斯いふ汝らはわが群を散しこれを逐はなちて顧みざりき視よわれ汝ら

三 の悪き行によりて汝等に報ゆべしとエホバいふ 三 われ我群の遺餘たる者をその逐はなちたる諸の地より集め
 四 再びこれを其牢に歸さん彼らは子を産て多くなるべし 四 我これを養ふ牧者をその上に立ん彼等はふたゝび慄か

五 エホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き杖を起す日來らん彼王となりて世を治め榮え公道と
 七六 公義を世に行ふべし 六 其日ユダは救をえイスラエルは安に居らん其名はエホバ我儕の義と稱らるべし 七 この

八 故にエホバいひ給ふ視よイスラエルの民をエジプトの地より導出せしエホバは活くと人衆復いはずして 八 イ
 スラエルの家の裔を北の地と其諸て逐やりし地より導出せしエホバは活くといふ日來らん彼らは自己の地に居

九 預言者輩のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震ふ且エホバとその聖言のためにわれは酔る人の
 一〇 ごとく酒に勝るゝ人のごとし 一〇 この地は姦淫をなすもの盈ち地は呪詛によりて憂へ曠野の艸は枯る彼らの途は

エレミヤ記 二二・二九——二三・一〇 一三一五

九 預言者輩のために我心はわが衷に壞れわが骨は皆震ふ且エホバとその聖言のためにわれは酔る人の
 一〇 ごとく酒に勝るゝ人のごとし 一〇 この地は姦淫をなすもの盈ち地は呪詛によりて憂へ曠野の艸は枯る彼らの途は

エレミヤ記 二二・二九——二三・一〇 一三一五

二 あしく其力は正しからず 預言者と祭司は偕に邪悪なりわれ我家に於てすら彼等の悪を見たりとエホバいひた

三 まふ 故にかれらの途は暗に在る滑なる途の如くならん彼等推れて其途に仆るべし我災をその上にのぞまし

めん是彼らが刑罰らるゝ年なりとエホバいひたまふ

三 われサマリヤの預言者の中に愚昧なる事あるをみたり彼等はバアルに託りて預言し我民イスラエルを惑は

四 せり 我エルサレムの預言者の中にも憎むべき事あるを見たり彼等は姦淫をなし詐偽をおこなひ悪人の手を堅

くして人をその悪に離れざらしむ彼等みな我にはソドムのごとく其民はゴモラのごとし この故に萬軍のエホ

バ預言者につきてかくいひたまふ視よわれ茵蔯を之に食はせ毒水をこれに飲せんそは邪悪エルサレムの預言者よ

りいでて此全地に及べばなり

一六 萬軍のエホバかくいひたまふ汝等に預言する預言者の言を聴く勿れ彼等はなんぢらを欺きエホバの口より

一七 いでざるおのが心の黙示を語るなり 常に彼らは我を藐忽する者にむかひて汝等平安をえんとエホバいひたま

一八 へりといひ又己が心の剛愎なるに循ひて行むところのすべての者に向ひて災汝らに來らじといへり 誰かエ

一九 ホバの議會に立て其言を見聞せし者あらんや誰か其耳を傾けて我言を聴し者あらんや みよエホバの暴風あり

二〇 怒と旋轉風いでて悪人の首をうたん エホバの怒はかれがその心の思を行ひてこれを遂げ給ふまでは息じ末の

日に汝ら明にこれを曉らん 預言者等はわが遣さざるに趨り我告ざるに預言せり 彼らもし我議會に立ち

しならば我民にわが言をきかして之をその悪き途とそその悪き行に離れしめしならん

イ耶六・一三、八・一〇 三九 へ賽九・一六 九・一〇 結三三・一〇 亞 二六 耶一四・一四、二七

番三・四 八詩三五・六 微四・ 一〇 耶二五・三二、三〇 一五、二九 九

口耶七・三〇、一一 一九 耶一三・一六 一四 耶一四・一四、二三 一三 耶二二・一八

一五、三三、三四 二耶一・二三 一三 耶一四・一四、二三 一三 耶二二・一八

結八・一一、二三、 一八 又申三・三二 賽一 一七 耶六・一四、八・一一 夕伯一五・八 哥前二 一 創四九・一

二三 エホバはいひ給ふ我はたゞ近くにおいてのみ神たらんや遠くに於ても神たるにあらずや 二四 エホバはいひた

二五 まふ人我に見られざる様に密なる處に身を匿し得るかエホバはいひたまふ我は天地に充るにあらずや 二五 われ我名

二六 をもて 謊を預言する預言者等がわれ夢を見たりと曰ふをきけり 二六 謊を預言する預言者等は

二七 いつまで此心をいだくや彼らは其心の詐偽を預言するなり 二七 彼らは其先祖がバアルによりて我名を忘れしごと

二八 く互に夢をかたりて我民にわが名を忘れしめんと思ふや 二八 夢をみし預言者は夢を語るべし我言を受し者は誠實

二九 をもて我言を語るべし糠いかにで麥に比擬ことをえんやとエホバはいひたまふ 二九 エホバ言たまはく我言は火のごと

三〇 くならずや又磬を打碎く槌の如くならずや 三〇 故に視よわれ我言を相互に竊める預言者の敵となるとエホバはい

三二 たまふ 三二 視よわれは彼はいひたまへりと舌をもて語るところの預言者の敵となるとエホバはいひたまふ 三三 エホバ

三三 いひたまひけるは視よわれ 偽の夢を預言する者の敵となる彼らは之を語りまたその 謊と其誇をもて我民を惑

はす我かれらを遣さずかれらに命ぜざるなり故に彼らは斯民に益なしとエホバはいひたまふ

三三 この民或は預言者又は祭司汝に問てエホバの重負は何ぞやといはゞ汝彼等にこたへてエホバの重負は我汝

三四 等を棄んとエホバの云たまひし事是なりといふべし 三四 エホバの重負といふところの預言者と祭司と民には我そ

三五 の人と其家にこれを降さん 三五 汝らはおのおの斯互に言ひその兄弟にいふべしエホバは何と應へたまひしやエホ

三六 バは何と云たまひしやと 三六 汝ら復びエホバの重負といふべからず人の重負となる者は其人の言なるべし汝らは

三七 活る神萬軍のエホバなる我らの神の言を枉るなり 三七 汝かく預言者にいふべしエホバは汝に何と答へたまひしや

三八 エホバは何といひたまひしやと 三八 汝らもしエホバの重負といはゞエホバそれにつきてかくいひたまふ我人を汝

らに遺して汝等エホバの重負といふべからずといはしむるも汝らはエホバの重負といふ此言をいふによりて
三九 われ必ず汝らを忘れ汝らと汝らの先祖にあたへし此邑と汝らとを我前より棄ん
四〇 且われ永遠の辱と永遠なる忘らるゝことなき恥を汝らにかうむらしめん

第二十四章

一 バビロンの王ネブカデネザル、ユダの王エホヤキムの子エコニヤおよびユダの牧伯等と木匠と
 鐵匠をエルサレムよりバビロンに移せしのうちエホバ我にエホバの殿の前に置れたる二筐の無花果を
 二 示したまへり 二 その一の筐には始に熟せしがごとき至佳き無花果ありその一の筐にはいと悪くして食ひ得ざる
 三 ほどなる悪き無花果あり 三 エホバ我にいひたまひけるはエレミヤよ汝何を見しや我答へけるは無花果なりその
 佳き無花果はいと佳しその悪きものは至悪くして食ひ得ざるほどに悪し

四 エホバの言また我にのぞみていふ 五 イスラエルの神エホバかくいふ我わが此處よりカルデア人の地に逐
 六 やりしユダの虜人を此佳き無花果のごとくに顧みて恵まん 六 我彼等に目をかけて之をめぐみ彼らを此地にか
 七 へし彼等を建て侍さず植て拔じ 七 我彼らに我のエホバなるを識るの心をあたへん彼等我民となり我彼らの神と
 八 ならん彼等は一心をもて我に歸るべし

八 エホバかくいひたまへり我ユダの王ゼデキヤとその牧伯等およびエルサレムの人の遺りて此地にをる者な
 九 らびにエジプトの地に住る者とを此悪くして食はれざる悪き無花果のごとくなさん 九 我かれらをして地のも
 ろもろの國にて虐遇と災害にあはしめん又彼らをしてわが逐やらん諸の處にて辱にあはせ諺となり嘲と詛に
 遭しめん 一〇 われ劍と饑饉と疫病をかれらの間におくりて彼らをしてわが彼らとその先祖にあたへし地に絶るに

イ何四・六 二王下二四・一二 代 一〇
 口耶二三・三三 下三六・一〇 へ歴七・一、四、八・一 十耶三三・四一、三三
 八耶二〇・一一 ホ耶三三・二四、二九 ト耶二二・二五、二九 七、四二・一〇
 一〇 申三〇・六 耶三三 又耶三〇・二二、三二 又耶三三・三三、三三
 九三六・二六、二七 ル耶二九・一三 九三六・二六、二七
 一〇 王上九・七 代下七 二二〇 耶一五・四、
 二九・一八、三四

二三 空曠となさん 我かの地につきて我かたりし諸の言をその上に臨しめん是エレミヤが萬國の事につきて預言し

二四 たる者にて皆この書に録さるゝなり 多の國々と大なる王等は彼らをして己につかへしめん我かれらの行爲と

その手の所作に循ひてこれに報いん

二五 イスラエルの神エホバかく我に云たまへり我手より此怒の杯をうけて我汝を遣すところの國々の民に飲

二六 しめよ 彼らは飲てよろめき狂はんこは我かれらの中に劍をつかはすによりてなり 是に於てわれエホバの

二七 手より杯をうけエホバのわれを遣したまふところの國々の民に飲しめたり 即ちエルサレムとユダの諸の邑

とその王等およびその牧伯等に飲せてこれをほろぼし詫異物となし人の嗤笑となし詛るゝ者となせり今日のご

二九 とし またエジプトの王バロと其臣僕その牧伯等その諸の民と 諸の雜種の民およびウズの諸の王等およ

三〇 びペリシテ人の地の諸の王等アシケロン、ガザ、エクロン、アシドドの遺餘の者 エドム、モアブ、アンモンの子

三一 孫 ツロのすべての王等シドンのすべての王等海のかなたの島々の王等 デダン、テマ、ブスおよびすべて鬚

三二 をそる者 アラビヤのすべての王等曠野の雜種の民の諸の王等 ジムリの諸の王等エラムの諸の王等メデア

三三 のすべての王等 北のすべての王等その彼と此とにおいて或は遠者或は近きもの凡地の面にある世の國々の

王等はこの杯を飲んセシヤク王はこれらの後に飲べし

二七 故に汝かれらに語ていへ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我汝等の中に劍を遣すによりて汝

二八 らは飲みまた酔ひまた吐き又仆て再び起ざれと 彼等もし汝の手より此杯を受て飲ずば汝彼らにいへ萬軍の

イ耶五〇・九、五一・二耶五〇・二九、五一 へ耶五一・七 結二三 又耶二五・二四 ヨ耶四八・一
二七、二八 六、二四 三、二四 翁三・一一 ル伯一・一 夕耶四九・一
口耶五〇・四一、五一 ホ伯二一・二〇 詩 卜耶二五・九、一一 ヲ耶四七・一、五、七 ナ代下九・一四 牛耶五一・四一
二七 七五・八 賽五一・チ耶二四・九 七賽二〇・一 ソ耶四九・二三 ヲ耶二五・二〇、四九 ノ哈二・一六
ハ耶二七・七 一七 獸一四・一〇 リ耶四六・二、二五 カ耶四九・七 ツ耶四九・八 三、一、五〇・三七 才察五一・二二、六三

ク但九・二八、一九 マ結三八・二二
 十鐵一・三三 耶 夕釋四二・三三 耳三
 四九・二二 結九・一六 廢一・二二
 六 阿一六路三三 フ詩一・四 耶一七
 三一 彼前四・一七 二二
 コ王上九・三 詩一三 阿釋六六・一六 耳三
 二・一四 二二
 エ賽一六・九 耶四八 サ耶二三・一九、三〇
 二二三
 テ何四・一 米六・二 キ賽六六・一六
 ユ耶一六・四、六 エ詩七六・二
 ヌ詩七九・三 耶八・二 ヒ耶一九・一四
 默一・九 二〇
 ミ耶四・八、六、二六 二〇
 シ廢二・一四 七徒二〇・二七
 ス耶三六・三

二九 エホバかくいひたまふ汝ら必ず飲べし 視よわれ我名をもて稱へらるゝこの邑にすら災を降すなり汝らいか
 で罰を免るゝことをえんや汝らは罰を免れじ蓋われ剣をよびて地に住るすべての者を攻べければなりと萬軍の
 エホバいひたまふ

三〇 汝彼等にこの諸の言を預言していふべしエホバ高き所より呼號り其聖宮より聲を出し己の住家に向てよば
 三二 はり地に住る諸の者にむかひて葡萄を踐む者のごとく咷たまはん 號咷地の極まで聞ゆ蓋エホバ列國と争ひ
 萬民を審き悪人を劍に付せば也とエホバ曰たまへり

三三 萬軍のエホバかく曰たまふ視よ災いでて國より國にいたらん大なる暴風地の極よりおこるべし 其日
 三四 エホバの戮したまふ者は地の此極より地の彼の極に及ばん彼等は哀まれず殮められず葬られずして地の面に糞土
 とならん 牧者よ哭き叫べ群の長等よ汝ら灰の中に轉ぶべし蓋汝らの屠らるゝ日滿れば也我汝らを散すべけれ
 ば汝らは貴き器のごとく墮べし 牧者は避場なく群の長等は逃る處なし 牧者の呼號の聲と群の長等の哀哭
 きこゆ蓋エホバ其牧場を滅したまへば也 エホバの烈き怒によりて平安なる牧場は滅さる 彼は獅子の如く
 其巢を出たり滅す者の怒と其烈き忿によりて彼らの地は荒されたり

第二十六章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のころエホバより此言いでていふ エホバかくい
 ふ汝エホバの室の庭に立我汝に命じていはしむる諸の言をユダの邑々より來りてエホバの室に拜を
 する人々に告よ一言をも滅す勿れ 彼等聞ておのおの其惡き途を離るゝことあらん然ば我かれらの行の惡が

四 ために災を彼らに降さんとせることを悔べし 汝彼等にエホバかくいふといへ汝等もし我に聽すわが汝らの

六五 前に置し律法を行はず 我汝らに遣し切に遣せし我僕なる預言者の言を聽すば(汝らは之をきかざりき) 我

七 この室をシロの如くなし又この邑を地の萬國に誣はるゝ者となすべし 祭司と預言者及び民みなエレミヤが

エホバの室に立てこの言をのぶるをきけり

八 エレミヤ、エホバに命ぜられし諸の言を民に告畢りしとき祭司と預言者および諸の民彼を執へいひけるは

九 汝は必ず死べし 汝何故にエホバの名をもて預言し此室はシロの如くなりこの邑は荒蕪となりて住む者なき

にいたらんと云しやと民みなエホバの室にあつまりてエレミヤを攻む

一〇 ユダの牧伯等この事をききて王の家をいでエホバの室にのぼりてエホバの家の新しき門の入口に坐せり

二 祭司と預言者等牧伯等とすべての民に訴ていふ此人は死にあたる者なり是は汝らが耳に聽しごとくこの邑に

三 むかひて惡き預言をなしたるなり 是に於てエレミヤ牧伯等とすべての民にいひけるはエホバ我を遣し汝らが

三 聽る諸の言をもて此宮とこの邑にむかひて預言せしめたまふ 故に汝らいま汝らの途と行爲をあらためて汝ら

四 の神エホバの聲にしたがへ然ばエホバ汝らに災を降さんとせしことを悔たまふべし みよ我は汝らの手にあり

五 汝らの目に善とみゆるところ義とみゆることを我に行へ 然ど汝ら善くこれを知れ汝らもし我を殺さば必ず

無辜ものの血なんぢらの身とこの邑と其中に住る者に歸せんエホバ我を遣してこの諸の言を汝らの耳につげしめ

たまひしなればなり

一六 牧伯等とすべての民すなはち祭司と預言者にいひけるは此人は死にあたる者にあらず是は我らの神エホバ

イ耶一八・八 拿三・二八・一五 四 一・二二・一四 二 耶三三・四 八 耶七・一三、二五、二 耶四・一〇、一一 ホ賽六五・一五 耶 一 耶七・三 口利二六・一四 申 一一・七、二五・三、 詩七八・六〇 耶七 二四・九 耶 二 耶二六・三、一九 へ耶三八・四 耶七・三 耶 二 耶二六・三、一九 耶 二 耶三八・五

又徒五・三四
ル米一・一
ヲ米三・一二
ワ代下三二・二六
カ出三二・二四
母後
タ王下二二・一二、
二四・二六
ヨ徒五・三九
タ王下二二・一二、
一四 耶三九・一四
ソ耶二八・一〇、一二
ツ詩一五・一五、一
ネ詩一五・一六 但
レ耶二七・三、一二、
二〇、二八・一
二四・三
結四・一、一二・三、
四六・六 衆四五・
一一
四・一七、二五、三二

一七 の名によりて我儕に語りしなりと 時にこの地の長老數人立て民のすべての集れる者につけていひけるは

一八 ユダの王ヒゼキヤの代にモレシテ人ミカ、ユダの民に預言して云けらく萬軍のエホバかくいひ給ふシオンは

一九 田地のごとく耕されエルサレムは邱墟となり此室の山は樹深き崇邱とならんと ユダの王ヒゼキヤとすべて

のユダ人は彼を殺さんとせしことありしやヒゼキヤ、エホバを畏れエホバに求ければエホバ彼らに降さんと告給

ひし災を悔給ひしにあらずや我儕かく爲すは自己の靈魂をそこなふ大なる惡をなすなり

二〇 又前にエホバの名をもて預言せし人あり即ちキリヤテヤリムのシマヤの子ウリヤなり彼エレミヤの凡てい

二一 へるごとく此邑とこの地にむかひて預言せり エホヤキム王と其すべての勇士とすべての牧伯等その言を聽り

二二 是において王彼を殺さんと欲ひしがウリヤこれをき懼てエジプトに逃ゆきしかば エホヤキム王人をエジプ

二三 トに遣せり即ちアクボルの子エルナタンに數人をそへてエジプトにつかはしければ 彼らウリヤをエジプト

二四 より引出しエホヤキム王の許に携きたりしに王劍をもて之を殺し其屍骸を賤者の墓に棄せたりと 時にシ

ヤバンの子アヒカム、エレミヤをたすけこれを民の手にわたして殺さざらしむ

第二十七章

ユダの王ヨシヤの子エホヤキムが位に即し初のところエホバより此言エレミヤに臨みていふ 二
なはちエホバかく我に云たまへり汝索と鞭をつくりて汝の項に置き 三
之をエルサレムにきたりて

ゼデキヤ王にいたるところの使臣等の手によりてエドムの王モアブの王安モン人の王ツロの王シドンの王に送

るべし 四 汝彼らに命じて其主にいはしめよ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝ら其主にかく告べ

五 し われ我大なる能力と伸たる臂をもて地と地の上にをる人と獸とをつくり我心のまゝに地を人にあたへたり

六 いま我この諸の地を我僕なるバビロンの王ネブカデネザルの手にあたへ又野の獸を彼にあたへてかれにつかへしむ
七 かれの地の時期いたるまで萬國民は彼と其子とその孫につかへん其時いたらばおほくの國と大なる王は彼を己に事へしむべし
八 バビロンの王ネブカデネザルに事へずバビロンの王の軛をその項に負ざる國と民は我彼の手をもて悉くこれを滅すまで劍と饑饉と疫病をもてこれを罰せんとエホバひたまふ
九 故に汝らの預言者なんぢらの占筮師汝らの夢みる者汝らの法術士汝らの魔法士汝らに告て汝らはバビロンの王に事ふることあらじといふとも聽なかれ
一〇 彼らは 謊を汝らに預言して汝らをその國より遠く離れしめ且我をして汝らを逐しめ汝らを滅さしむるなり
一一 然どバビロンの王の軛をその項に負ふて彼に事ふる國々の人は我これをその故土に存し其處に耕し住しむべしとエホバひたまふ
一二 我この諸の言のごとくユダの王ゼデキヤに告ていひけるは汝らバビロンの王の軛を汝らの項に負ふて彼と其民につかへよ然ば生べし
一三 汝と汝の民なんぞエホバがバビロンの王につかへざる國につきていひたまひし如く劍と饑饉と疫病に死ぬべけんや
一四 故に汝らはバビロンの王に事ふることあらじと汝等に告る預言者の言を聽なかれ彼らは 謊を汝らに預言するなり
一五 エホバひたまひけるは我彼らを遣さざるに彼らは我名をもて 謊を預言す是をもて我汝らを逐はなち汝らと汝らに預言する預言者等を滅すにいたらん
一六 我また祭司とこのすべての民に語りていひけるはエホバかくいひたまふ視よエホバの室の器皿いま速にバビロンより持歸さるべしと汝らに預言する預言者の言をきく勿れそは彼ら 謊を汝らに預言すればなり
一七 汝ら彼らに聽なかれバビロンの王に事へよ然ば生べしこの邑を何ぞ荒蕪となすべけんや
一八 もし彼ら預言者にし

イ耶二八・一四 二〇 二耶二五・二二、五〇 へ耶二五・二四 一七
 口耶二五・九、四三・ 八耶二八・一四 但二 二七 但五・二六 ト耶二七・二四 一七
 一〇 結二九・一八、 三三 水代下三六・二〇 チ耶二八・一、三八、 又耶一四・一四、二三 耶二八・三但一・二
 二二、二九・八、九 代下三六・七、一〇

ヲ王下二五・二三 耶 王下二四・一四、 代下三六・一八、 塔喇一・七、七・一九、 ツ耶二七・一六
五二・一七、二〇、 一五 耶二四・一、 代下三六・二一 耶 耶二七・一
二一 力王下二五・一三、 二九・一〇、三三・五、 ソ耶二七・一二、 ネ王上一・三六

一八 移されざることを萬軍のエホバに求むべきなり 一九 萬軍のエホバ柱と海と臺およびこの邑に餘れる器皿につきて
二〇 かくいひたまふ 是はバビロンの王ネブカデネザルがユダの王エホヤキムの子エコニヤおよびユダとエルサレ
二一 ムのすべての牧伯等をエルサレムよりバビロンにとらへ移せしときに掠ざりし器皿なり 二二 すなはち萬軍のエホ
二三 バ、イスラエルの神エホバの室とユダの王の室とエルサレムとに餘れる器皿につきてかくいひたまふ 二三 これら
はバビロンに携へゆかれ我これを顧る日まで彼處にあらん其後我これを此處にたづさへ歸らしめんとエホバいひ
たまふ

第二十八章

一 この年すなはちユダの王ゼデキヤが位に即し初その四年の五月ギベオンのアズルの子なる預言者
二 ハナニヤ、エホバの室にて祭司と凡の民の前にて我に語りいひけるは 二 萬軍のエホバ、イスラエル
三 の神かくいひたまふ我バビロンの王の軛を推けり 三 二年の内にバビロンの王ネブカデネザルがこの處より取て
四 バビロンに携へゆきしエホバの室の器皿を再び 悉くこの處に歸らしめん 四 我またユダの王エホヤキムの子エ
五 コニヤおよびバビロンに往しユダのすべての擄 人をこの處に歸らしめんそは我バビロンの王の軛を推くべけれ
ばなりとエホバいひたまふ

五 是に於て預言者エレミヤ、エホバの家に立る祭司の前とすべての民の前にて預言者ハナニヤと語ふ 六 預
言者エレミヤすなはちいひけるはアーメン願くはエホバかくなし給へ願くはバビロンに携へゆかれしエホバの室
の器皿及びすべて擄へうつされし者をエホバ、バビロンより復びこの處に歸らしめたまはんと汝の預言せし言の

八七 成んことを 然ど汝いま我なんぢの耳と諸の民の耳に語らんとする此言をきけ 我と汝の先にいでし預言者

九 は古昔より多くの地と大なる國につきて戦闘と災難と疫病の事を預言せり 泰平を預言する所の預言者は若し

一〇 その預言者の言とげなばその誠のエホバの遣したまへる者なること知らるべし ことゝに於て預言者ハナニヤ預

言者エレミヤの項より軛を取てこれを摧けり ハナニヤ諸の民の前にて語りエホバかくいひたまふわれ二年の

うちに是の如く萬國民の項よりバビロン王ネブカデネザルの軛を摧きはなさんといふ預言者エレミヤ遂に去りぬ

二三 預言者ハナニヤ預言者エレミヤの項より軛を摧きはなせし後エホバの言エレミヤに臨みていふ 汝ゆき

二四 てハナニヤにエホバかくいふと告よ汝木の軛を摧きたれども之に代て鐵の軛を作れり 萬軍のエホバ、イスラ

エルの神かくいふ我鐵の軛をこの萬國民の項に置きてバビロンの王ネブカデネザルに事へしむ彼ら之につかへん

一五 われ野の獸をもこれに與へたり また預言者エレミヤ預言者ハナニヤにいひけるはハナニヤよ請ふ聽けエホバ

一六 汝を遣はしたまはず汝はこの民に 謙を信ぜしむるなり 是故にエホバいひたまふ我汝を地の面よりのぞかん

一七 汝エホバに叛くことを教ふるによりて今年死ぬべしと 預言者ハナニヤはこの年の七月死ねり

第二十九章

一 預言者エレミヤ、エルサレムより書をかの擧へうつされて餘れるところの長老および祭司と預言者ならびにネブカデネザルがエルサレムよりバビロンに移したるすべての民に送れり 是より先

三 エコニヤ王と王后と寺人およびユダとエルサレムの牧伯等および木匠と鐵匠はエルサレムをされり エレミヤ

その書をシヤパンの子エラサおよびヒルキヤの子ゲマリヤ即ちユダの王ゼデキヤがバビロンにつかはしてバビロ

四 ンの王ネブカデネザルにいたらしむる者の手によりて送れり其書にいはいはく 萬軍のエホバ、イスラエルの神す

イ申一八・二二 二申二八・四八 耶 へ耶二九・三一 結 三三・三二 四 又申六・一〇 提前二
ロ耶二七・二 二七・七 一三・二二 下王下二四・二二 耶 二二・二六、二八、 二二
ハ耶二七・七 水耶二七・六 ト申一三・五 耶二九 二二・二六、二八、 二二 九耶一四・一四、二三

二二、二七、四、ワ代下三六・二二、二二 但九・二
 一五 弗五・六 二二 喇一・一 耶 力但九・三
 ヲ耶二九・三一 二五・二二、二七、ヨ耶二四・七
 夕利二六・三九、四〇 六、四六・一 賽 三、三三・三七
 申三〇・一 五五・六 ツ耶二四・一〇
 レ申四・七 詩三一・ソ耶二三・三、八、三〇 ネ耶二四・八
 ナ申二八・二五 代下 二九・八 耶一五、 一八
 四、二四・九、三四 一八

五 べて擲とらへうつされし者即ち我エルサレムよりバビロンに移さしめし者にかくいふ 汝ら屋を建てこれに住すまひ圃はたけを

六 つくりてその果をくらへ 妻を娶めとりて子女をうみ又汝らの子に媳よめを娶めとり汝らの女を嫁よめがしめ彼らに子女を生うまず

七 しめよ此は汝等かしこに滅へらずして増まさんがためなり 我汝らを擲とらへ移うつさしめしところの邑まちの安やすきを求めこれが爲ためにエ

八 ホバにいのれその邑まちの安やすきによりて汝らもまた安やすきをうればなり 萬軍のエホバ、イスラエルの神かみかくいひたまふ

九 汝らの中の預言者と卜筮士うらなひしに惑まどはさるゝ勿なれまた汝ら自ら作りしところの夢ゆめに聽きしたがふ勿なれ そは彼ら我名わがな

一〇 をもて 誑いつはりを汝らに預言よけんすればなり我彼らを遣つかさずとエホバいひたまふ 一〇 エホバかくいひたまふバビロンに於お

二 七十年満ねんみちなばわれ汝らを眷かへりみ我嘉言よきことばを汝らになして汝らをこの處ところに歸かへらしめん 一 一 エホバいひたまふ我が汝ら

三 二 望のぞみをあたへんとおもふなり 汝らわれに願ねがはり往ゆて我にいのらん我汝らに聽きべし 一三 汝らもし一心いっしんをもて我を

四 一 索もとめなば我に尋たづね遇あはん 一四 エホバいひたまふ我汝らの遇あふところとならんわれ汝らの俘擲とらはれを解とき汝らを萬國ばんこくより

五 一 すべて我汝らを逐おやりし處ところより集あつめ且我汝らをして擲とらはれて離はなれしめしその處ところに汝らをひき歸かへらんとエホバい

六 一 一 ひとたまふ

七 一 一 エホバわれらの爲ためにバビロンに於おいて預言者よけんしやを立たまひしと汝らはいふ 一六 ダビデの位くらゐに坐ざする王わうとこの邑まち

八 一 一 視みよわれ劍つるぎと饑饉うせきんと疫病えきびやうを彼らにおくり彼らを悪あしくして食くらはれざる悪あしき無花果いちじくのごとくになさん 一八 われ劍つるぎと饑

九 一 一 饑うせきんと疫病えきびやうをもて彼らを逐おひまた彼らを地ちの萬國ばんこくにわたして 虐しへたけにあはしめ我彼らを逐おやる諸國くにに於おいて呪詛のろひとなり

一〇 一 一

一一 一 一

一二 一 一

二九 詫異となり人の嗤笑となり耻辱とならしめん 是彼ら我言を聴ざればなりとエホバいひたまふ我この言を我僕

三〇 なる預言者によりて遣り頻におくれども汝ら聴ざるなりとエホバいひたまふ わがエルサレムよりバビロンに

おくりし諸の俘擄人よ汝らエホバの言をきけ

二二 我名をもて 誑を汝らに預言するコラヤの子アハブとマアセヤの子ゼデキヤにつきて萬軍のエホバ、イスラ

エルの神かくいふ視よわれ彼らをバビロンの王ネブカデネザルの手に付さん彼これを汝らの目の前に殺すべし

二三 バビロンにあるユダの俘擄人は皆彼らをもて 詛となし願くはエホバ汝をバビロンの王が火にて焚しゼデキヤ

とアハブのごとき者となしたまはん事をといふ 此は彼らイスラエルの中に悪をなし鄰の妻を犯し且我彼らに

命ぜざる 誑の言をわが名をもて語りしによる我これを知りまた證すとエホバいひたまふ

二四 汝ネヘラミ人シマヤにかく語りいふべし 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝おのれの名をもて

二五 書をエルサレムにある諸の民と祭司マアセヤの子ゼバニヤおよび諸の祭司に送りていふ エホバ汝を祭司エホヤ

二六 ダに代て祭司となし汝らをエホバの室の監督となしたまふ此すべて狂妄ひ且みづから預言者なりといふ者を獄と

二七 桎梏につながしめんためなり 然るに汝いま何故に汝らにむかひてみづから預言者なりといふところのアナト

二八 テのエレミヤを斥責めざるや 是は彼バビロンにをる我儕に書を送り時尙長ければ汝ら家を建て之に住ひ圍を

二九 つくりてその實をくらへといへり 祭司ゼバニヤこの書を預言者エレミヤに讀きかせたり 時にエホバの言を

三〇 エレミヤにのぞみていふ 諸の俘擄人に書をおくりて云べしネヘラミ人シマヤの事につきてエホバかくいふ

三一 我シマヤを遣さざるに彼汝らに預言し汝らに誑を信ぜしめしによりて エホバかくいふ視よ我ネヘラミ人

イ耶三五・四、三三 六五・一五 ホ王下二五・一八 耶 一 徒 二六・二四 又耶二八・一五 七耶三〇・一八、三三 四四 結三九・二五 方耶四・三一、六・二四 口制四八・二〇 賽 二耶二三・一四 入耶二〇・一 二 耶 二〇・二 九耶二八・一六 九 耶 二・一、一、三一、三二、三三 八但三・六 二二・一 二六・二四 又耶二八・一五 四四 結三九・二五 方耶四・三一、六・二四 四耳二・一、一、三一、三二

五・一八番一・二四 三〇・一三・三三 二四 何三・五 四六・二七・二八 二二八 半耶八・二二 夕伯一三・二四、一六
夕伯一・二一 一 夕伯五五・三、四 結 夕賽四一・一三、四三 未耶三・一八 六 詩六・一賽二七・八 ウ代下三六・一六 耶 一・九、一九・二一
レ路一・六九 徒二・ 三四・二三、三七・ 五、四四・二 耶 十慶九・八 耶一〇・二四、四六 一五・一八 オ耶五・六 十伯三〇・二一

シマヤと其子孫を罰すべし彼エホバに逆くことを教へしによりて此民のうちには彼に屬する者一人も住ふことなからん且我民に吾がなさんとする善事をみざるべしとエホバいひたまふ

第三〇章

一 エホバよりエレミヤにのぞめる言いふ 二 イスラエルの神エホバかく告ていふ我汝に言し言をこ
とごとく書に録せ 三 エホバいふわれ我民イスラエルとユダの俘囚人を返す日きたらんエホバこれ
をいふ我彼らをその先祖にあたへし地にかへらしめん彼らは之をたもたん

四 エホバのイスラエルとユダにつきていひたまひし言は是なり 五 エホバかくいふ我ら戦慄の聲をきく驚懼
あり平安あらず 汝ら子を産む男あるやを尋ね觀よ我男が皆子を産む婦のごとく手をその腰におき且その面色
皆青く變るをみるは何故ぞや 七 哀しいかなその日は大にして之に擬ふべき日なし此はヤコブの患難の時なり

八 然ど彼はこれより救出されん 九 萬軍のエホバいふ其日我なんぢの項よりその軛をくだきはなし汝の繩目をと
かん異邦人は復彼を使役はざるべし 九 彼らは其神エホバと我彼らの爲に立んところの其王ダビデにつかふべし

一〇 エホバいふ我僕ヤコブよ懼るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ我汝を遠方より救ひかへし汝の子孫を其とらへ移
されし地より救ひかへさんヤコブは歸りて平穩と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 二 エホバいふ我汝と

偕にありて汝を救はん設令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすとも汝をば滅しつくさじされど我道をもて汝
を懲さん汝を全たく罰せずにはおかざるべし

二三 エホバかくいふ汝の創は愈す汝の傷は重し 二三 汝の訟を理す者なく汝の創を裏む膏藥あらず 汝の愛
する者は皆汝を忘れて汝を求めず是汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我仇敵の撃がごとく汝を撃ち嚴く汝を

二五 懲せばなり 何ぞ汝の創のために叫ぶや汝の患は愈ることなし汝の愆の多きと罪の數多なるによりて我これを

二六 汝になすなり 然どすべて汝を食ふ者は食はれすべて汝を虐ぐる者は皆とらはれ汝を掠むる者は掠められん

二七 凡て汝の物を奪ふ者は我これをして奪はるゝ事にあはしむべし エホバいふ我汝に膏藥を貼り汝の傷を醫さん

二八 そは人汝を棄られし者とよび尋る者なきシオンといへばなり

二九 エホバかくいふ視よわれかの擄移されたるヤコブの天幕をかへし其住居をあはれまん斯邑はその故の丘埜

三〇 に建られん城には宜き様に人住はん 感謝と歡樂者の聲とその中よりいでん我かれらを増ん彼ら少からじ我

彼らを崇せん彼ら藐められじ 其子は疇昔のごとくあらん其集會は我前に固く立ん凡かれを虐ぐる者は我

これを罰せん 其首領は本族よりいで其督者はその中よりいでん我彼をちかづけ彼に近かん誰かその生命を繋

て我に近くものあらんやとエホバいふ 汝等は我民となり我は汝らの神とならん

三三 みよエホバの暴風あり怒と旋轉風いでて悪人の首をうたん エホバの烈き忿はかれがその心の思を行ひ

てこれを遂るまでは息じ末の日に汝ら明にこれを曉らん

第三章

一 エホバいひたまふ其時われはイスラエルの諸の族の神となり彼らは我民とならん エホバかく

三 遠方よりエホバ我に顯れていひたまふ我窮なき愛をもて汝を愛せり故にわれたえす汝をめぐむなり イスラ

五 エルの童女よわれ復び汝を建ん汝は建らるべし汝ふたゝび鼓をもて身を飾り歡樂者の舞にいでん 汝また葡萄

- イ耶一五・一八
- 口出二三・二二
- 三三・一、四・二一
- 耶一〇・二五
- ハ耶三三・六
- 二耶三〇・三、三三
- 七、一一
- ホ詩一〇二・一三
- ヘ賽三五・一〇、五一
- ・一一 耶三一・四、
- リ創四九・一〇
- 一、二、一三、三三
- 一〇、一一
- ト藍一〇・八
- チ賽一・二六
- ・二一 耶三一・四、
- リ創四九・一〇
- 又民一六・五
- ル耶二四・七、三一
- 一、三三、三三、三八
- 結一一・二〇、三六
- ・二八、三七、二七
- ヨ耶三〇・三二
- ヲ耶二三・一九、二〇、
- タ民一〇・三三 申一
- 二五・三二
- ワ創四九・一
- カ耶三〇・二四
- ヨ耶三〇・三二
- ヲ耶二三・一九、二〇、
- タ民一〇・三三 申一
- 三三 詩九五・一一
- 賽六三・一四
- レ羅一一・二八、二九
- ソ馬一・二一
- ツ何一一・四
- ネ耶三三・七
- ナ出一五・二〇 士
- 一一・三四 詩一四
- 九・三
- ラ耶六五・二一 摩九
- ・一四

ム申二〇・六、二八。 二二三八。 二四二二・二〇。 二五 結 二九 六五
三〇。 結二〇・三四、四一、 一賽三五・八、四三。 三四・二二、二三、 二〇
ウ賽二・三、米四・二 三四・二三 一九、四九・一〇、 四〇
半賽二・五、六 夕詩二二六・五、六耶 一一 一四 二四〇
ノ耶三・二二、一八、 五〇・四 一 出四・二二 二二〇 二四四・二三、四八 何三・五
サ賽五八・一一

六 樹をサマリヤの山に植ん植る者は植てその果を食ふことをえん 六 エフライムの山の上に守望者の立て呼はる
日きたらんいはく汝ら起よ我らシオンにのぼりて我儕の神エホバにまうでんと

七 エホバかくいひたまふ汝らヤコブの爲に歎びて呼はり萬國の首なる者のために叫べ汝ら示し且歌ひて言へ

八 エホバよ願くはイスラエルの遺れる者汝の民を救ひたまへと 八 みよ我彼らを北の地よりひきかへり彼らを地の

極より集めん彼らの中には替者 跛者 孕める婦子を産し婦ともに居る彼らは大なる群をなして此處にかへらん

九 彼ら悲泣來らん我かれらをして祈禱をもて來らしめ直くして蹶かざる途より水の流に歩みいたらしめん我はイ

スラエルの父にしてエフライムは我長子なればなり

一〇 萬國の民よ汝らエホバの言をきゝ之を遠き諸島に示していへイスラエルを散せしものこれを聚め牧者のそ

二 群を守るが如く之を守らん 二 すなはちエホバ、ヤコブを贖ひ彼等よりも強き者の手よりかれを救出したまへ

三 彼らは來てシオンの頂によばはりエホバの賜ひし福なる麥と酒と油および若き羊と牛の爲に寄集はん

三 三 その靈魂は灌ふ園のごとくならん彼らは重て愁ふること無るべし 三 三 その時童女は舞てたのしみ壯者と老者

四 もろともに樂しまん我かれらの悲をかへて喜となしかれらの愁をさりてこれを慰さめん 四 四 われ膏をもて祭司

の心を飫しめ我恩をもて我民に満しめんとエホバ言たまふ

一五 エホバかくいひたまふ歎き悲みいたく憂ふる聲ラマに聞ゆラケルその兒子のために歎きその兒子のあらず

一六 なりしによりて慰をえす 一六 エホバかくいひたまふ汝の聲を禁て哭こと勿れ汝の目を禁て涙を流すこと勿れ

一七 汝の工に報あるべし彼らは其敵の地より歸らんとエホバにひ給ふ 汝の後の日に望あり兒子等その境に歸らん

一八 とエホバにひたまふ われ固にエフライムのみづから歎くをきけり云く汝は我を懲しめたまふ我は軛に馴ざる

一九 犢のごとくに懲治を受たりエホバよ汝はわが神なれば我を牽轉したまへ然ば我轉るべし われ轉りし後に悔い

二〇 教を承しのちに我髀を撃つ我幼時の羞を身にもてば恥ぢかつ辱しめらるゝなりと エホバにひたまふエフライ

ムは我愛するところの子悦ぶところの子ならずや我彼にむかひてかたるごとに彼を念はざるを得ず是をもて我

腸 かれの爲に痛む我必ず彼を恤むべし

二 汝のために指路號を置き汝のために柱をたてよ汝のゆける道なる大路に心をとめよイスラエルの童女よ歸

三 此の汝の邑々にかへれよ 違ける女よ汝いつまで流蕩ふやエホバ新しき事を地に創造らん女は男を抱くべし

三三 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひ給ふ我かの俘囚し者を返さん時人々復ユダの地とその邑々に於て

三四 此言をいはん義き居所よ聖き山よ願くはエホバ汝を祝みたまへと ユダとその諸の邑々に農夫と群を牧ふもの

三六 偕に住はん われ疲れたる靈魂を飫しめすべての憂ふる靈魂をなぐさむるなり 茲にわれ目を醒しみるに我

眠は甘かりし

二七 エホバにひたまふ視よ我が人の種と畜の種とをイスラエルの家とユダの家とに播く日いたらん 我彼ら

二九 を抜き毀ち覆し滅し難さんとうかゞひし如くまた彼らを立て植ゑんとうかゞふべしとエホバにひ給ふ その時

三〇 彼らは父が酸き葡萄を食ひしによりて兒子の齒齧くと再びいはざるべし 人はおのおの自己の惡によりて死な

ん凡そ酸き葡萄をくらふ人はその齒齧く

イ耶三一・四、五 喇 八申三〇・二
一・五 何一・二一 二申三二・三六 賽 未賽五七・一八 何
六三・二五 何一 一四・四
へ耶五〇・五
ト耶三・六八、一一、
一三、一四、二二
リ亞八・三
チ耶二・一八、二三、
又詩一二三・五十八
ヲ結三六・九一
何二・二三 亞一〇
カ耶四四・二七
ル耶三三・一二、一三
九
ヨ耶二四・六

タ結一八・二、三
レ加六・五、七

ツ申一・三一	ラ耶二四・七、三〇	二〇米七・一八徒	九一	十耶三三・二二	ヨ耳三・一七
ネ耶三三・四〇	二二、三三、三八	一〇・四三、一三	一五	マ尼三・一	エ王下二五・二、二耶
ナ詩四〇・八 結一	ム賽五四・一三 約六	三九 羅一・二七	オ耶一〇・二六	一〇	三九・一
・二四 結二七・二六	・一九、二〇、三六	・四五 哥前二・一〇	・二六 詩七二	ク詩一四八・六	ケ結四〇・八 耶二・一
來八・八一、一二	二六、二七 哥後三	・五、一七、八九、二二	・五四、九、一〇	耶	フ代下二三・一五 尼
一〇・二六、一七	・三	・三六、三七、一一九	・三三、二〇	三三、二〇	・一、三七、二二、 三八・六、三九、一四

三三 三二 エホバ いひたまふみよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立る日きたらん 三三 この契約は我彼

三二 三二 らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立し所の如きにあらず我かれらを娶りたれども

三三 三三 彼らはその我契約を破れりとエホバ いひたまふ 三三 然どかの日の後に我イスラエルの家に立んところの契約は此

三三 三三 なり即ちわれ我律法をかれらの衷におきその心の上に録さん我は彼らの神となり彼らは我民となるべしとエホバ

三四 三四 三三 三三 いひたまふ 三三 人おのおの其隣とその兄弟に教へて汝エホバを識と復いはじそは小より大にいたるまで 三三 悉く我

三五 三五 三三 三三 をしるべければなりとエホバ いひたまふ我彼らの不義を赦しその罪をまた思はざるべし 三三 量繩ふたゝび直

三六 三六 三三 三三 しむる者その名は萬軍のエホバと言なり 三六 エホバ いひたまふもし此等の規律我前に廢らばイスラエルの子孫も

三七 三七 三三 三三 我前に廢りて永遠も民たることを得ざるべし 三七 エホバ かくいひたまふ若し上の天量ることを得下の地の基探る

三三 三三 三三 三三 ことをえば我またイスラエルのすべての子孫を其もろもろの行のために棄べしエホバこれをいふ 三三 量繩ふたゝび直

三九 三九 三三 三三 エホバ いひたまふ視よ此邑ハナネルの塔より隅の門までエホバの爲に建つ日きたらん 三九 量繩ふたゝび直

四〇 四〇 三三 三三 ちにガレブの岡をこえゴアテの方に轉るべし 四〇 屍と灰の谷またケデロンの溪にいたるまでと東の方の馬の門

三三 三三 三三 三三 の隅にいたるまでの諸の田地皆エホバの聖き處となり永遠におよぶまで再び拔れまた覆さるゝ事なかるべし

三三 三三 三三 三三 第三二章

三三 三三 三三 三三 一 ユダの王ゼデキヤの十年即ちネブカデネザルの十八年の頃エホバの言エレミヤにのぞめり 二

三三 三三 三三 三三 二 の時バビロンの軍勢エルサレムを攻環み居て預言者エレミヤはユダの王の室にある獄の庭の内に

三 禁錮られたり 三 ユダの王ゼデキヤ彼を禁錮ていひけるは汝何故に預言してエホバかく云たまふといふや云く
 四 視よ我この邑をバビロン王の手に付さん彼之を取るべし 四 またユダの王ゼデキヤはカルデア人の手より脱れず
 五 必ずバビロン王の手に付され口と口とあひ語り目と目あひ観るべし 五 彼ゼデキヤをバビロンに携きゆかんゼデ
 キヤはわが彼を顧る時まで彼處に居んとエホバいひたまふ汝らカルデア人と戦ふとも勝ことを得じと
 七六 六 エレミヤいふエホバの言われに臨みていはく 七 みよ汝の叔父シャルムの子ハナメル汝にきたりていはん
 八 汝アナトテに在るわが田地を買へそは之を贖ふ事は汝の分なればなりと 八 かくてエホバの言のごとく我叔父の
 子ハナメル獄の庭にて我に來り云けるは願くは汝ベニヤミンの地のアナトテに在るわが田地を買へそは之を嗣ぎ
 これを贖ふことは汝の分なれば汝みづからこれを買ひとれとこゝに於てわれ此はエホバの言なりと知りたれば
 〇九 我叔父の子ハナメルがアナトテにもてる田地をかひて彼に銀十七シケルを稱てあたふ 一〇 すなはち我その契券
 を書てこれに封印し證人をたて權衡をもて銀を稱て與ふ 一〇 而してわれその約定をのするところの封印せし契券
 二 とその開きたるものを取り 二 わが叔父の子ハナメルと契券に印せし證人の前および獄の庭に坐するユダ人の前
 三 にてその買券をマアセヤの子なるネリヤの子バルクに與へ 三 彼らの前にてわれバルクに命じていひけるは
 四 萬軍のエホバ、イスラエルの神かく云たまふ汝これらの契券すなはち此買券の封印せし者と開きたるものを
 一五 取り之を瓦器の中に貯へて多の日の間保たしめよ 一五 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふそは此地に
 於て人復屋と田地と葡萄園を買ふにいたらんと
 一六 われ買契をネリヤの子バルクに付せしのうちエホバに祈りて云けるは 一七 嗚呼主エホバよ汝はその大なる

イ耶三四・二 五、五二・九 ホ利二五・二四、二五、 一一・一三 一三三四・三、三八・ 八耶二七・二二 三二一 得四・四 一三三四・二 一八、二三、三九・ 二耶二一・四、三三・五 へ割二三・一六 亞 一三三四・四 一三三四・四

又王下一九・一五 七 申五・九、一〇 三三・一三 鐵五・ 一・二二 但九・一五 未出三・八、一七 耶 三耶三三・四
 ル創一八・一四 耶 七 賽九・六 二一 耶一六・一七 ツ出六・六 母後七・ 一・一五 一耶一四・一二 才耶三二・一七 マ耶一九・一三
 三三・二七 路一 力耶一〇・一六 二二 耶一七・一〇 三三 代下二七・二 一尼九・二六 耶一 一ウ耶三三・二五、三六 才耶三二・一〇、三七
 三七 三 賽二八・二九 三 出九・二六 代上 一詩一三六・一一、 八 但九・一〇 一 半耶三三・二四 一 八、一〇、五二、
 ヲ出二〇・六、三四・ 夕伯三四・二二 詩 一七・二一 賽六三 一二 一四 一 民一六・二二 一三

一八 能力と伸たる腕をもて天と地を造りたまへり汝には爲す能はざるところなし 一八 汝は恩寵を千萬人に施し又父の

一九 罪をその後の子孫の懐に報いたまふ汝は大なる全能の神にいまして其名は萬軍のエホバとまうすなり 一九 汝の

二〇 謀略は大なり汝は事をなすに能あり汝の目は人のこともらの諸の途を鑿はしおのおのの行に循ひその行爲の果

二一 によりて之に報いたまふ 二〇 汝休徴と奇跡をエジプトの地に行ひたまひて今日にまでいたるまたイスラエルと

二二 他の民の中にも然りかくして今日のごとくに汝の名を揚たまへり 二一 汝は休徴と奇跡と強き手と伸たる腕と大

二三 なる怖しき事をもて汝の民イスラエルをエジプトの地より導きいだし 二二 この地を彼らにたまへり是即ち汝がか

二四 れらの先祖等に與へんと誓ひたまひし乳と蜜の流るゝ地なり 二三 彼等すなはち入てこれを獲たりしかども汝の聲

二五 に遵はず汝の例典を行はず凡て汝がなせと命じたまひし事を爲ざりしによりて汝この災を其上にくだらしむ

二六 二四 みよ壘成れり是の邑を取んとて來れるなり 劍と饑饉と疫病のためにこの邑は之を攻るカルデヤ人の手に付

二七 二五 さる汝のいひたまひしことば既に成れり汝之を見たまふなり 二五 主エホバよ汝われに銀をもて田地を買へ證人を

二八 立よといひたまへり然るにこの邑はカルデヤ人の手に付さる 二六 二七 時にエホバの言エレミヤに臨みていふ 二七 二八 故にエホバかくいふ視よわれ此邑をカルデヤ人の手とバビロンの王ネブカデネザルの手に

二九 二八 付さん彼これを取るべし 二九 この邑を攻るところのカルデヤ人きたり火をこの邑に放ちて之を焚ん屋蓋のうへに

三〇 三〇 て人がバアルに香を焚き他の神に酒をそゝぎて我を怒らせしその屋をも彼ら亦焚ん 三〇 三〇 是はイスラエルの子孫と

ユダの子孫はその幼少時よりわが前に悪き事のみをなしましたイスラエルの民はその手の作爲をもて我をいからず
 事のみをなしたればなりエホバ之をいふ 此邑はその建し日より今日にいたるまで我震怒を惹き我憤恨をお
 三三

こすところの者なれば我前よりわれ之を除かんとするなり 此はイスラエルの民とユダの民諸の悪を行ひて
 三三

我を怒らせしによりてなり彼らその王等その牧伯等その祭司その預言者およびユダの人々とエルサレムに住る者
 三三

皆然なせり 彼ら背を我にむけて面を我にむけずわれ彼らををしへ頻に教ふれどもかれらは教をきかずしてう
 三三

けざるなり 彼らは憎むべき物をわが名をもて稱へらるゝ室にたてゝ之を汚し 又ベンヒンノムの谷にある
 三四

バアルの崇邱を築きその子女をモロクに献げたりわれは彼らにこの憎むべきことを行ひてユダに罪を犯さし
 三四

むることを命ぜず斯る事は我心におこらざりしなり
 三六

いまイスラエルの神エホバこの邑すなはち汝らが剣と饑饉と疫病のためにバビロン王の手に付されんとい
 三六

ひし所の邑につきて斯いひたまふ みよわれ我震怒と憤恨と大なる怒をもて彼らを逐やりし 諸の國より彼ら
 三七

を集め此處に導きかへりて安然に居らしめん 彼らは我民となり我は彼らの神とならん われ彼らに一の
 三八

心と一の途をあたへて常に我を畏れしめんこは彼らと其子孫とに福をえせしめん爲なり われ彼らを棄ずして
 四〇

恩を施すべしといふ永遠の契約をかれらにたて我を畏るゝの畏をかれらの心におきて我を離れざらしめん
 四一

れ悦びて彼らに恩を施し心を盡し精神をつくして誠に彼らを此地に植べし エホバかくいひたまふわれ此諸
 四二

の大なる災をこの民に降せしごとくわがかれらに言し 諸の福を彼等に降さん 人衆この地に田野を買はん
 四三

イ耶二・七、三・二五、二四・三、ヘ耶七・三〇、三一、一九・五、三三・一〇、結三七、二二・三、三一・三三、
 七・二二—二六、ハ察一・四、六、但九、二二・二、結八、リ耶七・三一、二二、カ耶二四・七、結二一、タ耶三一・三三、
 二二・二、結二〇、八、二耶二・二七、七・二四、ト利一八・二、五上、ル申三〇・三、耶二三、一六、ヨ賽五五・三、耶三一、
 二二八、二耶二・二七、七・二四、ト利一八・二、五上、ル申三〇・三、耶二三、一六、ヨ賽五五・三、耶三一、
 口王下二二・二七、ホ耶七・一三、一一・三三、三、二九・一四、ワ耶二四・七、三〇、三二、タ耶三一・三三、
 二八、廢九・一五、

ナ耶三三・一〇 申三三七・二六 ク賽四八・六 四四・三三・一一 五結三六・二五 亞 一八・二二 賽二
ラ耶一七・二六 ノ出一五・三 廢五・ 十耶三三・二四 賽一・二六 耶二四 一三・一 來九・ 九、二五・一〇 歌 一三六・一 賽二
ム耶三三・七、一一、 八、九・六 マ耶三三・二五 六、三〇・二〇、 一三、一四 賽六〇・五 代上一六・八、三四 四
二六 才詩九一・一五 耶 七耶三〇・一七 三一・四、二八、四二 耶三一・三四 米七 代下五・一三、七、 三
ウ耶三二・二、三 二九・一二 耶 三三・三〇・三、三三・ 一〇 一八 耶七・三四、一六、 三 爾三・一一 詩

四四

是汝等が荒て人も畜もなきにいたりカルデヤ人の手に付されしといへる地なり 人衆ベニヤミンの地とエルサ
レムの四周とユダの邑々と山の邑々と平地の邑々と南の方の邑々において銀をもて田野をかひ契券を書きてこれ
に封印し又證人をたてんそは我かの俘囚者を歸らしむればなりとエホバいひたまふ

第三三章

一 エレミヤ尙獄の庭に禁錮られてをる時エホバの言ふたゞび彼に臨みていふ 事をおこなふエホ
バ事をなして之を成就るエホバ其名をエホバと名る者かく言ふ 汝我に願求めよわれ汝に應へん
又汝が知ざる大なる事と秘密たる事とを汝に示さん イスラエルの神エホバ壘と劍によりて毀れたる此邑の
室とユダの王の室につきてかくいひ給ふ 彼らカルデヤ人と戦はんとて来る是には我震怒と憤恨をもて殺すと
ころの人々の屍體充るにいたらん我かれらの 諸の悪のためにわが面をこの邑に蔽ひかくせり 視よわれ卷布
と良薬をこれに持きたりて人々を醫し平康と眞實の豊厚なるをこれに示さん 我ユダの俘囚人とイスラエルの
俘囚人を歸らしめ彼らを建て従前のごとくになすべし われ彼らが我にむかひて犯せし一切の罪を潔め彼らが
我にむかひて犯し且行ひし一切の罪を赦さん 此邑は地のもろもろの民の中において我がために欣喜の名とな
り頌美となり榮耀となるべし彼等はわが此民にほどこすところの 諸の恩恵を聞ん而してわがこの邑にほどこす
ところの 諸の恩恵と 諸の福祿のために發振へ且身を動搖さん

一〇 エホバかくいひ給へり汝らが荒れて人もなく畜もなしといひしこの處 即ち荒れて人もなく住む者もなく
畜もなきユダの邑とエルサレムの街に 再び欣喜の聲 歡樂の聲 新娶者の聲 新婦の聲および萬軍のエホバを

あがめよエホバは善にしてその矜恤は窮なしといひて其感謝の祭物をエホバの室に携ふる者の聲聞ゆべし蓋われ

この地の俘囚人を返らしめて初のごとくになすべければなりエホバ之をいひたまふ

二 萬軍のエホバかくいひたまふ荒れて人もなく畜もなきこの處と其すべての邑々に再び牧者のその群を伏し

三 むる牧場あるにいたらん 山の邑と平地の邑と南の方の邑とベニヤミンの地とエルサレムの四周とユダの邑に

おいて群ふたゞびその之を核ふる者の手の下を過らんとエホバいひたまふ

二四 エホバ言たまはく視よ我イスラエルの家とユダの家に語りし善言を成就る日きたらん その日その時に

二六 いたらばわれダビデの爲に一の義き枝を生ぜしめん彼は公道と公義を地に行ふべし その日ユダは救をえエル

二七 サレムは安らかに居らんその名はエホバ我儕の義と稱へらるべし エホバかくいひたまふイスラエルの家の位

二八 に坐する人ダビデに缺ることなかるべし また我前に燔祭をさゞげ素祭を燃し恒に犠牲を献ぐる人レビ人なる

祭司に絶ざるべし

一九 エホバのことばエレミヤに臨みていふ エホバかくいふ汝らもし我晝につきての契約と我夜につきての

二 契約を破りてその時々晝も夜もなからしむることをえば 僕ダビデに吾が立し契約もまた破れその子はかれ

三 の位に坐して王となることをえざらんまたわが我に事ふるレビ人なる祭司に立し契約も破れん 天の星は數へ

られず濱の沙は量られずわれその如く我僕ダビデの裔と我に事ふるレビ人を増ん

二三 エホバの言またエレミヤに臨みていふ 汝この民の語りてエホバはその選みし二の族を棄たりといふを

- イ利七・二二 詩一〇 三一・二四、五〇、ハ耶二三・五、三二・リ耶二三・六
- 七・二二、二一六 一九 二七・三一 又母後七・一六 王上 一六 彼前二・五、
- 一七 二耶一七・二六、三二 二耶二九・一〇 二・四 詩八九・ 九 歌一・六、
- 口耶三三・七 四四 二耶四・二、一一・一 二九・三六 路一・ 一 詩八九・三七 祭
- ハ祭六五・一〇 耶 ホ利二七・三二 耶二三・五 三二、三三 五四・九 耶三一・ 三二、三七
- ル羅一二・一、一五 三六、三三、二五 ヨ耶三三・二二、二二
- ワ詩八九・三四 カ創一三・一六、一五 五、二二、二七 耶
- タ創八・三二 耶三三 二・一〇

レ詩七四・一六、一七、
一〇四・一九 耶 三九・一、五二・四
三二・三五、三六 二・一 耶 一・一五
ネ王下二五・一 耶 三・二八
ラ耶二一・一〇、三二 二一・一九
ク王下二八・一三、 十出二一・二 利二五
一〇四・一九 耶 三九・一、五二・四
三二・三五、三六 二・一 耶 一・一五
ム耶三二・二九、三四 牛代下一六・一四、
オ耶三二・二八 五・九
マ尼五・一一

二五 聞ざるか彼らはかく我民を藐じてその眼にこれを國と見なさざるなり 二五 エホバかくいひ給ふもしわれ晝と夜と

二六 についての契約を立すまた天地の律法を定めずば 二六 われヤコブと我僕ダビデとの裔をすて、再びかれの裔の中

よりアブラハム、イサク、ヤコブの裔を治むる者を取ざるべし我その俘囚し者を返らしめこれを恤れむべし

第三四章

一 諸の民を率てエルサレムとその諸邑を攻めて戦ふ時エホバの言エレミヤに臨みていふ 二 イスラ

二 エルの神エホバかくいふ汝ゆきてユダの王ゼデキヤに告ていふべしエホバかくいひたまふ視よわれ此邑をバビ

三 ロン王の手に付さん彼火をもて之を焚べし 汝はその手を脱れず必ず擒へられてこれが手に付されん汝の目は

四 バビロン王の目をみ又かれの口は汝の口と語ふべし汝はバビロンにゆくにいたらん 然どユダの王ゼデキヤよ

五 エホバの言をきけエホバ汝の事につきてかくいひたまふ汝は劍に死じ 汝は安らかに死なん民は汝の先祖たる

汝の先の王等の爲に香を焚しごとく汝のためにも香を焚き且汝のために嘆て嗚呼主よといはん我この言をいふと

エホバいひたまふ

六 預言者エレミヤすなはち此言をことごとくエルサレムにてユダの王ゼデキヤにつげたり 時にバビロン

七 王の軍勢はエルサレムおよび存れるユダの諸の邑を攻めラキシとアゼカを攻て戦ひをる其はユダの諸邑のうち

八 是等の城の邑尙存りゐたればなり

九 ゼデキヤ王エルサレムに居る諸の民と契約を立てて彼らに釋放の事を宣示せし後エホバの言エレミヤに臨

めり その契約はすなはち人をしておのおの其僕婢なるへブルの男女を釋たしめその兄弟なるユダヤ人を

ワ耶三七・八、一〇 七、一三
カ耶三八・三、三九 ヨ耶九・一一、四四 上二・五五
二、二、八、五二、二、六 二、六
タ王下一〇・一五代 ソ王下一二・九、二五 ツ王上一〇・一五
一八、二九 代上九、ネ出二〇・二二 弗六
二、三

三 三 三
に付さん エホバいひたまふ視よ我彼らに命じて此邑に歸らしめん彼らこの邑を攻て戦ひ之を取り火をもて焚くべしわれユダの諸邑を住人なき荒地となさん

第三十五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの時エレミヤにのぞみしエホバの言いふ 汝レカブ人の家に往て彼らとかたり彼らをエホバの室の一房に携きたりて酒をのませよと 是に於てわれハバジニヤの子なるエレミヤの子ヤザニヤとその兄弟とその諸子およびレカブ人の全家を取り これをエホバの室にあるハナンの諸子の房につれきたれりハナンはイグダリヤの子にして神の人なり其房は牧伯等の房の次にして門を守るシヤレムの子マアセヤの房のうへに在り 我すなはちレカブ人の家の諸子の前に酒を満したる壺と杯を置き彼らに告て汝ら酒を飲めといひければ 彼らこたへけるは我儕は酒をのます蓋レカブの子なる我らの先祖ヨナダブ我らに命じて汝等と汝らの子孫はいつまでも酒をのむべからず また汝ら屋を建す種をまかず葡萄園を植ざれ亦これを有べからず汝らの生存ふるあひだ幕屋にをれ然らば汝らが寄寓ところの地に於て汝らの生命長からんと云たればなり 斯我らはレカブの子なるわれらの先祖ヨナダブの凡て命ぜし言に遵ひて我儕とわれらの妻と子女は生存ふるあひだ酒を飲ず 我らは住べき屋を建す葡萄園も田野も種も有ずして 幕屋にをりす べて我儕の先祖ヨナダブが我らに命ぜしごとく行へり 然どバビロンの王ネブカデネザルがこの地に上り來りしとき我ら云けるは我らカルデア人の軍勢とスリア人の軍勢を畏るれば去來エルサレムにゆかんとすなはち我らはエルサレムに住へり

二 三 三
時にエホバの言エレミヤにのぞみていふ 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝ゆきてユダの人を

一四 とエルサレムに住る者にと告よエホバひたまふ汝らは我言を聴て教を受ざるか 一四 レカブの子ヨナダブがその

子孫に酒をのむべからずと命ぜし言は行はる彼らは今日に至るまで酒をのます其先祖の命令に遵ふなり然るに汝

一五 らは吾汝らに語り頻に語れども我にきかさるなり 一五 われまた我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣して

いはせけるは汝らいまおのおの其悪き道を離れて歸り汝らの行をあらためよ他の神に従ひて之に奉ふる勿れ然ら

一六 汝らはわが汝らと汝らの先祖に與へたるこの地に住ことをえんと然ど汝らは耳を傾けず我にきかさりき 一六 レカ

一七 ブの子ヨナダブの子孫はその先祖が彼らに命ぜしところの命令に遵ふなり然ど此民は我に聴ず 一七 この故に萬軍

の神エホバ、イスラエルの神かくいふ視よわれユダとエルサレムに住る者とに我彼らにつきていひし所の災を降

さん我かれらに語れども聴ずかれらを召ども應へざればなり 一八 茲にエレミヤ、レカブ人の家にいひけるは萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らはその先祖

一八 ヨナダブの命に遵ひその凡の誠を守り彼が汝らに命ぜしことを行ふ 一九 是によりて萬軍のエホバ、イスラエルの

神かくいひたまふレカブの子ヨナダブには我前に立つ人いつまでも缺ることあらじ

第三十六章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にこの言エホバよりエレミヤに臨みていふ 二 汝巻物をと

三 語りしすべての言を之に録せ 三 ユダの家わが降さんと擬るところの災をきよて各自その悪き途をはなれて轉る

四 こともあらん然ばわれ其愆とその罪を赦すべし

四 是に於てエレミヤ、ネリヤの子バルクを召べりバルクすなはちエレミヤの口にしたがひエホバの彼に告た

イ耶三三・三三 二耶七・二五、二五・四 八號一・二四 賽六五 卜耶一五・一九 耶耶二五・三
口代下三六・一五 ホ耶一八・一一、二五 六六・四 結二・九 又耶二五・一五 七
ハ耶七・二三、二五・三 五、六 耶七・二三 耶五・一 耶耶一八・八 余三・八 耶耶四・一

五 まひし言をことごとく巻物に録せり 五 エレミヤ、バルクに云けるはわれは禁錮られたればエホバの室に往くことを得ず 六 故に汝ゆきて汝が我が口にしたがひて巻物に録したるエホバの言をよみ断食の日にエホバの室に於て民の耳にこれを聴しめよまた之を讀みてユダの人々のその邑々より來れる者の耳に聴しむべし 七 彼らエホバの前にその祈禱を献り各自其惡き途をはなれて轉ることもあらんエホバの此民につきてのべたまひし怒と憤は大なり 八 斯てネリヤの子バルクは凡て預言者エレミヤが己に命ぜしごとくエホバの室にてその巻物よりエホバの言を讀り 九 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの五年九月エルサレムの諸の民およびユダの諸邑よりエルサレムに來れる諸の民にエホバの前に断食を行ふべきこと宣示さる 一〇 バルク、エホバの室の上庭に於てエホバの室の新しき門の入口の旁にあるシヤパンの子なる書記ゲマリヤの房にてその書よりエレミヤの言を民に讀きかせたり 一一 シヤパンの子なるゲマリヤの子ミカヤその書のエホバの言を盡くきよて 一二 王の宮にある書記の房にくだりいたるに諸の牧伯等即ち書記エリシヤマ、シマヤの子デラヤ、アカボルの子エルナタン、シヤパンの子ゲマリヤ、ハナニヤの子ゼデキヤおよび諸の牧伯等そこに坐せり 一三 ミカヤ、バルクが書を讀て民の耳に聴せしときに己が聴し所のすべての言を彼らに告げれば 一四 牧伯等クシの子シレミヤの子なるネタニヤの子エホデをバルクに遣していはせけるは汝が民に讀きかせしその巻物を手に取りて來れとネリヤの子バルクすなはち手に巻物を取りて彼らの許にきたりたれば 一五 彼らバルクにいひけるは請ふ坐して之を我らに讀きかせよとバルクすなはち彼らに讀聞せたり 一六 彼らその諸の言をきよて俱に懼れバルクにいひけるは我ら必ずこの諸の言を王に告んと 一七 また

二八 バルクに問ていひけるは請ふ汝いかにこの諸の言をかれの口にしたがひて録せしや我らに告よ 二八 バルク答へけるは彼その口をもてこの諸の言を我に述べたればわれ墨をもて之を書に録せり 一九 牧伯等バルクにいひけるは汝

ゆきてエレミヤとともに身を匿し在所を人に知しむべからずと

二〇 すなはち巻物を書記エリシヤマの房に置いて庭にいり王に詣りてこの諸の言を王につげければ 二一 王その

巻物を持來らせんとてエホデを遣せりエホデすなはち書記エリシヤマの房より巻物を取來りて之を王と王の側に

二二 立るすべてのの牧伯等に讀みきかせたり 二三 時は九月にして王冬の室に坐せり其前に火の燃る爐あり 二四 エホデ

三枚か四枚を讀けるとき王小刀をもてその巻物を切割き爐の火に投いれて之を盡く爐の火に焚り 二五 王とその

二六 臣僕等はこの諸の言をきけども懼れず亦その衣を裂ざりき 二七 エルナタン、デラヤ、ゲマリヤ等王にその巻物を

焚たまふ勿れと求めたれども聽ざりき 二八 王ハンメレクの子エラメルとアヅリエルの子セラヤとアブデルの子シ

二九 レミヤに書記バルクと預言者エレミヤを執へよと命ぜしがエホバかれらを匿したまへり

三〇 王巻物およびバルクがエレミヤの口にしたがひて記せし言を焚しのうちエホバの言エレミヤに臨みていふ

三二 汝また他の巻物を取りユダの王エホヤキムが焚しところの前の巻物の中の言をことごとく其に録せ 三三 汝また

たユダの王エホヤキムに告よエホバかくいふ汝かの巻物を焚ていへり汝何なれば此巻物に録してバビロンの王必

三四 ず來りてこの地を滅し此に人と畜を絶さんと云しやと 三五 この故にエホバ、ユダの王エホヤキムにつきてかくい

三六 ひ給ふ彼にはダビデの位に坐する者無にいたらん且かれの屍は棄られて晝は熱氣にあひ夜は寒氣にあはん 三七 我

三九 また彼とその子孫とその臣僕等をその惡のために罰せんまた彼らとエルサレムの民とユダの人々には我わが彼ら

イ 歴三・一五 八 耶二二・三〇
 口 王下二二・一一 賽 二 耶二二・一九
 三六・二二、三三、三七一 ホ 耶二三・三四
 王下二四・一七 代 一 耶二二・二二、二九
 下三六・一〇 耶 一 耶二二・二二、二九
 二二・二四 耶 一 耶二二・二二、二九
 二五、五二、二四 又 耶三四・二二、三七
 一七・一五 結 一 耶二二・二二
 ル 耶二二・二二
 ヲ 耶三四・二二
 ワ 耶二二・四、五
 カ 耶三七・五

三 つきて語りしかども彼らが聴くことをせざりし所の禍を降すべし 是に於てエレミヤ他の巻物を取てネリヤの子書記バルクにあたふバルクすなはちユダの王エホヤキムが火に焚たるところの書の諸の言をエレミヤの口にしたがひて之に録し外にまた斯る言を多く之に加へたり

第三十七章

一 ヨシヤの子ゼデキヤ、エホヤキムの子ユニヤに代りて王となるバビロンの王ネブカデネザル彼をユダの地に王となせしなり 彼もその臣僕等もその地の人々もエホバが預言者エレミヤによりて

示したまひし言を聴ざりき

三 ゼデキヤ王シレミヤの子ユカルとマアセヤの子祭司ゼバニヤを預言者エレミヤに遣して請ふ汝我らの爲に

四 我らの神エホバに祈れといはしむ エレミヤは民の中に入出せりそはいまだ獄に入られざればなり 五 バロの

軍勢のエジプトより來りしかばエルサレムを攻圍みたるカルデヤ人は其音信をきよてエルサレムを退けり

六 時にエホバの言預言者エレミヤにのぞみていふ 七 イスラエルの神エホバかくいふ汝らを遣して我に求め

八 シユダの王にかくいへ汝らを救はんとて出きたりしバロの軍勢はおのれの地エジプトへ歸らん 九 カルデヤ人再

九 び來りてこの邑を攻て戦ひこれを取り火をもて焚べし 九 エホバかくいふ汝らカルデヤ人は必ず我らをはなれて

一〇 去んといひて自ら欺く勿れ彼らは去ざるべし 一〇 設令汝らおのれを攻て戦ふところのカルデヤ人の軍勢を悉く

撃ちやぶりてその中に負傷人のみを遺すとも彼らはおのおの其幕屋に起ちあがり火をもて此邑を焚かん

二 茲にカルデヤ人の軍勢バロの軍勢を懼れてエルサレムを退きければ 三 エレミヤ、ベニヤミンの地にて民

三 の中にその分を分ち取らんとてエルサレムを出でてかの地に行きしが 三 べニヤミンの門にいりし時そこにハナ

ニヤの子シレミヤの子なるイリヤと名くる門守を預言者エレミヤを執へて汝はカルデヤ人に降るなりといふ

一四 エレミヤいひけるは詐なり我はカルデア人に降るにあらずと然どイリヤこれを聴すエレミヤを執へて侯伯等の許に引ゆけり 侯伯等すなはち怒りてエレミヤを撻ちこれを書記ヨナタンの室の獄にいれたり蓋この室を獄となしたればなり

一六 エレミヤ獄にいり土牢に入てそこに多の日を送りしのち ゼデキヤ王人を遣して彼をひきいださしむ而して王室にて竊にかれにいひけるはエホバより臨める言あるやとエレミヤ答へていひけるは有り汝はバビロン王

一八 の手に付されん エレミヤまたゼデキヤ王にいひけるは我汝あるひは汝の臣僕或はこの民に何なる罪を犯したれば汝ら我を獄にいれしや 汝らに預言してバビロンの王は汝らにも此地にも攻來らじといひし汝らの預言者

二〇 はいま何處にあるや されば王わが君よ願くはいま我に聽たまへ請ふわが願望を受納れたまへ我を書記ヨナタンの家に歸らしめたまふなかれ恐くは我彼處に死なんと 是においてゼデキヤ王命じてエレミヤを獄の庭にい

二二 れしめ且邑のパンの悉く盡るまでパンを製る者の街より日に一片のパンを彼に與へしむ即ちエレミヤは獄の庭にをる

一 マツタンの子シバテヤ、バシユルの子ゲダリヤ、シレミヤの子ユカル、マルキヤの子バシユル、エレミヤがすべての民に告たるその言を聞き 云くエホバかくいひたまふこの邑に留るものは劍と

二 饑饉と疫病に死べし然どいでてカルデア人に降る者は生んすなはちその生命をおのれの掠取物となして生べし

三 エホバかくいひたまふこの邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん彼之を取べしと 是をもてかの牧伯等

四 王にいひけるは請ふこの人を殺したまへ彼はかくの如き言をのべて此邑に遺れる兵卒の手と民の手を弱くす夫人

第三十八章

一 マツタンの子シバテヤ、バシユルの子ゲダリヤ、シレミヤの子ユカル、マルキヤの子バシユル、エレミヤがすべての民に告たるその言を聞き 云くエホバかくいひたまふこの邑に留るものは劍と饑饉と疫病に死べし然どいでてカルデア人に降る者は生んすなはちその生命をおのれの掠取物となして生べし

二 エホバかくいひたまふこの邑は必ずバビロン王の軍勢の手に付されん彼之を取べしと 是をもてかの牧伯等

三 王にいひけるは請ふこの人を殺したまへ彼はかくの如き言をのべて此邑に遺れる兵卒の手と民の手を弱くす夫人

イ耶三三八・二六 一三三・二八 へ耶三二・一
 口耶三三八・六 二耶三三八・九、五二・六 ト耶三二・一八
 ハ耶三二・二、三八・ ホ耶三七・三 チ耶三二・九
 リ耶二二・一〇、三三
 ル耶三七・二一 七耶三八・六
 ヲ耶三九・一六 八耶三九・二一
 カ耶三七・二一 九耶三九・二一
 ク耶五七・一六 十耶三九・三
 レ王下二四・二二

五 は民の安を求めずして其害を求むるなりと 五 ゼデキヤ王いひけるは視よ彼は汝らの手にあり王は汝らに逆ふ

六 こと能はざるなりと 六 彼らすなはちエレミヤを取て獄の庭にあるハンメレクの子マルキヤの阱に投いる即ち索

をもてエレミヤを縋下せしがその阱は水なくして汚泥のみなりければエレミヤは汚泥のなかに沈めり

七 王の室の寺人エテオピア人エベデメレク彼らがエレミヤを阱になげいれしを聞き時に王ベニヤミンの門に

九八 坐しむたれば 八 エベデメレク王の室よりいでゆきて王にいひけるは 九 王わが君よかの人々が預言者エレミヤ

〇 に行ひし事は皆好らず彼らこれを阱になげ入たり邑の中に食物なければ彼はその居るところに餓死せん 一〇 王エ

テオピヤ人エベデメレクに命じていひけるは汝こゝより三十人を携へゆきて預言者エレミヤをその死ざる先に阱

二 より曳あげよと 二 エベデメレクすなはちその人々を携へて王の室の庫の下にいり其處より破れたる舊き衣の

三 布片をとり索をもてこれを阱にをるエレミヤの所に縋下せり 而してエテオピア人エベデメレク、エレミヤに

告て汝この破れたる舊き衣の布片を汝の腋の下にはさみて索に當よと云ければエレミヤ然なせり 彼らすなは

ち索をもてエレミヤを阱より曳あげたりエレミヤは獄の庭にをる

四 かくてゼデキヤ王人を遣して預言者エレミヤをエホバの室の第三の門につれきたらしめ王エレミヤにいひ

五 けるは我汝に問ことあり毫もわれに隠す勿れ 一五 エレミヤ、ゼデキヤにいひけるは我もし汝に示さば汝かならず

一六 我を殺さざらんや假令われ汝を勸むるとも汝われに聽じ 一六 ゼデキヤ王密にエレミヤに誓ひていひけるは我らに

この靈魂を造りあたへしエホバは活く我汝を殺さず汝の生命を索むる者の手に汝を付さじ

一七 エレミヤ、ゼデキヤにいひけるは萬軍の神イスラエルの神エホバかくいひたまふ汝もしまことにバビロン

一八 王の牧伯等に降らば汝の生命活んまた此邑は火にて焚れず汝と汝の家の者はいくべし 然ど汝もし出てバビロ

一ノ王の牧伯等に降らずば此邑はカルデヤ人の手に付されん彼らは火をもて之を焚ん汝はその手を脱れざるべし

二九ゼデキヤ王エレミヤに云けるは我カルデヤ人に降りしところのユダ人を恐る恐くはカルデヤ人我をかれらの

三〇手に付さん彼ら我を辱しめん 二〇 エレミヤいひけるは彼らは汝を付さじ願くはわが汝に告しエホバの聲に聽した

二一がひたまへさらば汝祥をえん汝の生命いきん 二二 然ど汝もし降ることを否まばエホバこの言を我に示し給ふ

二三 すなはちユダの王の室に遺れる婦は皆バビロンの王の牧伯等の所に曳いだされん其婦等いはん汝の朋友等は

二四 汝を誘ひて汝に勝り汝の足は泥に沈む彼らは退き去る 二三 汝の妻たちと汝の子女等はカルデヤ人の所に曳出され

二五 汝は其手を脱れじバビロンの王の手に執へられん汝此邑をして火に焚しめん

二六 ゼデキヤ、エレミヤにいひけるは汝この事を人に知する勿れさらば汝殺されじ 二五 もし牧伯等わが汝と語

二七 りしことを我儕に告げよ我らに隠す勿れ然ば我ら汝を殺さじ又王の汝に語りしことを告よといはゞ 二六 汝彼らに

二八 答へて我王に求めて我をヨナタンの家に歸して彼處に死しむること勿れといへりといふべし 二七 かくて牧伯等

二九 エレミヤにきたりて問けるに彼王の命ぜし言のごとく彼らに告たればその事露はれざりき是をもて彼ら彼とも

三〇 いふことを罷たり 二八 エレミヤはエルサレムの取るゝ日まで獄の庭に居りしがエルサレムの取れし時にも彼處に

をれり

第三十九章

一 ユダの王ゼデキヤの九年十月バビロンの王ネブカデネザルその全軍をひきゐエルサレムにきたり
二 て之を攻圍みけるが 二二 ゼデキヤの十一年四月九日にいたりて城邑破れたれば 二三 バビロンの王の

三 牧伯等即ちネルガルシヤレゼル、サムガルネボ 寺人の長サルセキム 博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロ

イ耶三三・四、三四・一、ホ耶三七・二〇
三、三八・二三 一〇 耶三九・六、四一・一、ホ耶三七・二〇
口母前三一・四 二耶三八・一八 ト耶三七・二一、三九 耶五二・四一七
チ王下二五・一、四 耶三三・二一、三九 耶五二・四一七
リ耶三八・一七

又王下二五・四 耶 一八・二三 三九・一〇、一一 一三 三九・一八、五二・
 五二・七 王下二三・三三 三二・四 一三 王下二五・一一 耶 三九・二八
 九 耶三二・四、三八・ 王耶四・一一 王下二五・九 耶 夕創三七・三六 耶 五二・一五
 五二・一五 耶 三九・二八、二八 耶 三九・二六、二四 耶 三九・二七、一一
 耶 三九・二五 耶 三九・二五 耶 三九・二五 耶 三九・二五 耶 三九・二五

ンの王のその外の牧伯等皆ともに入て中の門に坐せり

四 ユダの王ゼデキヤおよび兵卒ども之を見て逃げ夜の中に王の園の途より兩の石垣の間の門より邑をいでて

五 アラバの途にゆきしが 五 カルデヤ人の軍勢これを追ひエリコの平地にてゼデキヤにおひつき之を執へてハマテ

六 の地リブラにをるバビロンの王ネブカデネザルの許に曳ゆきければ王かしこにて彼の罪をさだめたり 六 すなは

ちバビロンの王リブラにてゼデキヤの諸子をかれの目の前に殺せりバビロンの王またユダのすべての牧伯等を殺

八七 せり 王またゼデキヤの目を抉さしめ彼をバビロンに曳ゆかんとて銅索に縛げり 八 またカルデヤ人火をもて

九 王の室と民の家をやき且エルサレムの石垣を毀てり 九 かくて侍衛の長ネブザラダンは邑の中に餘れる民とおの

一〇 れに降りし者およびその外の遺れる民をバビロンに移せり 一〇 されど侍衛の長ネブザラダンはその時民の貧しく

して所有なき者等をユダの地に遺し葡萄園と田地とをこれにあたへたり

一一 爰にバビロンの王ネブカデネザル、エレミヤの事につきて侍衛の長ネブザラダンに命じていひけるは 一一 彼

一二 を取りて善く待へよ害をくはふる勿れ彼が汝に云ふごとくなすべしと 一二 是をもて侍衛の長ネブザラダン寺人の

一四 長ネブシヤスバン博士の長ネルガルシヤレゼルおよびバビロンの王の牧伯等 一四 人を遣してエレミヤを獄の庭よ

一五 りたづさへ來らしめシヤバンの子アヒカムの子なるゲダリヤに付して之を家につれゆかしむ斯彼民の中に居る

一六 エレミヤ獄の庭に禁錮られをる時エホバの言彼にのぞみていふ 一六 汝ゆきてエテオピア人エベデメレクに

告よ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふわれ我語しところの 禍を此邑に降さん 福はこれに降さじその日こ

一七 の事なんぢの目前にならん 一七 エホバいひたまふその日にはわれ汝を救はん汝はその畏るゝところの人衆の手に

アヒカムの子なるゲダリヤ彼らと彼らに屬する人々に誓ひていひけるは汝らカルデヤ人に事することを怖るゝ勿れ
 一〇 この地に住てバビロンの王に事へなば汝ら幸福ならん 我はミヅバに居り我らに來らん所のカルデヤ人に事へ
 二 汝らは葡萄酒と菓物と油とをあつめて之を器に蓄へ汝らが獲る所の諸邑に住めと 又モアブとアンモン人の
 中およびエドムと諸の邦にをる所のユダヤ人はバビロンの王がユダに人を遣したるとシヤバンの子アヒカムの
 三 子なるゲダリヤを立てこれが有司となしたることを聞き 是においてそのユダヤ人皆その追やられし諸の處
 よりかへりてユダの地のミヅバに來りゲダリヤに詣り而して多の葡萄酒と菓物をあつむ
 一三 又カレヤの子ヨハナンおよび田舎にをりし軍勢の長たちミヅバにきたりてゲダリヤの許にいたり 彼に
 一四 いひけるは汝アンモン人の王バアリスが汝を殺さんとしてネタニヤの子イシマエルを遣せしを知るやと然どアヒカ
 一五 ムの子ゲダリヤこれを信ぜざりしかば カレヤの子ヨハナン、ミヅバにて密にゲダリヤに語りて言けるは請ふ
 われゆきて人知ずにネタニヤの子イシマエルを殺さんいかで彼汝を殺し汝に集れるユダ人を散しユダの遺れる者
 一六 を滅すべけんやと 然るにアヒカムの子ゲダリヤ、カレヤの子ヨハナンにいひけるは汝この事をなすべからず
 汝イシマエルにつきて偽をいふなり

第四章

一 七月ごろ王の血統なるエリシヤマの子ネタニヤの子イシマエル王の十人の牧伯等とともにミヅバ
 二 にゆきてアヒカムの子ゲダリヤにいたりミヅバにて借に食をなせしが ネタニヤの子イシマエル
 および借にをりし十人の者起上りバビロンの王がこの地の有司となせしシヤバンの子アヒカムの子なるゲダリヤ
 三 を刀にて殺せり イシマエルまたミヅバにゲダリヤと借にをりし諸のユダヤ人と彼處にをりしカルデヤ人の
 兵卒を殺したり

四 彼がゲダリヤを殺してより二日の後いまだ誰も之を知ざりし時 五 ある人八十人その鬚を薙り衣を裂き身

六 に傷つけ手に素祭の物と香を携へてシケム、シロ、サマリヤよりきたりてエホバの室にいたらんとせしかば 六 ネ

タニヤの子イシマエル、ミツバよりいでて哭きつゝ行て彼らを迎へ彼等に逢てアヒカムの子ゲダリヤの許に來れ

七 といへり 而して彼ら邑の中に入しときネタニヤの子イシマエル己と偕にある人々とともに彼らを殺してその

八 屍を阱に投いれたり 但しその中の十人イシマエルにむかひ我らは田地に小麦麩麥油および蜜を藏し有り

九 我らをころすなかれと言たれば彼らをその兄弟と偕に殺さずして已ぬ 九 イシマエルがゲダリヤの名をもて殺せ

一〇 殺せし人々を之に充せり 一〇 イシマエルはミツバに遺りをる諸の民即ち王の諸女と侍衛の長ネブザラダンがアヒ

カムの子ゲダリヤに交付しところのミツバに遺れる諸の民とを擄にせりネタニヤの子イシマエルすなはち彼らを

擄にしアンモン人に往んとて去れり

二 カレヤの子ヨハナンおよび彼と偕に在る軍勢の長たちネタニヤの子イシマエルの爲し諸の悪事を聞けれ

三 ば 三 その衆卒を率てネタニヤの子イシマエルと戦はんとて出でギベオンの池の旁にて彼に遇ふ 三 イシマエル

四 と偕に在る人々はカレヤの子ヨハナンおよび彼とともに在る軍勢の長たちを見て欣べり 四 是をもてイシマエル

五 がミツバより擄へきたりし所の人々身をめぐらしてカレヤの子ヨハナンの許にゆけり 五 ネタニヤの子イシマエ

六 ルは八人の者と偕にヨハナンを避け逃てアンモン人に往り 六 カレヤの子ヨハナンおよび彼とともにある軍勢の

長等はネタニヤの子イシマエルがアヒカムの子ゲダリヤを殺してミツバより擄へゆけるところの彼遺れる民すな

イ利一九・二七、二八 口母前一・七 王下 下一六・六

申一四・一 賽一五 二五・九 二耶四三・六

二 八王上一五・二二 代 ホ耶四〇・七

へ耶四〇・一四

ト耶四〇・七、八、一三

チ母後二・一三

リ母後一九・三七、ル耶四〇・八、一三、一九 賽三七・四 方爾八・二一 二〇・二〇 二耶二四・六、三一、一八・八 ヲ詩一〇六・四五、
三八 四一・二一 雅五・一六 ヲ王上二二・一四 レ創三一・五〇 二八、三三七 ナ賽四三・五 羅八・ 四六
又耶四〇・五 ヲ母前七・八、一二・ワ利二六・二二 夕母前三・一八 徒 ソ中六・三耶七・二三 申申三二・三六 耶 三一 三一

一七 はち兵卒婦人兒女寺人等を其手より取りかへして之をギベオンより携かへりしが 進てエジプトにいたらんと
一八 てベツレヘムの近傍にあるキムハムの住處に往て留れり 一八 これはネタニヤの子イシマエルがバビロンの王の此地
の有司となしたるアヒカムの子ゲダリヤを殺せしによりカルデヤ人を懼たればなり

第四章

一 茲に軍勢の長たちおよびカレヤの子ヨハナンとホシヤヤの子エザニヤ並に民の至微者より至
二 大者にいたるまで 皆預言者エレミヤの許に來りて言けるは汝の前に我らの求の受納られんこ
とを願ふ請ふ我ら遺れる者の爲に汝の神エホバに祈れ(今汝の目に見がごとく我らは衆多の中の遺れる者にして

寡なり) 三 さらに汝の神エホバ我らの行むべき途となすべき事を示したまはん 四 預言者エレミヤ彼らに云
けるは我汝らに聽り汝らの言に循ひて汝らの神エホバに祈らん凡そエホバが汝らに應へたまふことはわれ隠す所
なく汝らに告べし 五 彼らエレミヤにいひけるは願くはエホバ我儕の間にありて眞實なる信すべき證者となりた
まへ我らは汝の神エホバの汝を遣して我らに告しめたまふ諸の事に遵ひて行ふべし 六 我らは善にまれ惡にまれ

我らが汝を遣すところの我らの神エホバの聲に遵はん斯我らの神エホバの聲に遵ひてわれら 福をうけん
七 十日の後エホバの言エレミヤにのぞみしかば 八 エレミヤ、カレヤの子ヨハナンおよび彼と偕に在る軍勢
の長たち並に民の至微者より至大者までを悉く招きて 九 これにいひけるは汝らが我を遣して汝らの祈を

一〇 獻げしめしところのイスラエルの神エホバかくいひ給ふ 汝らもし信に此地に留らばわれ汝らを建てて倒さず
汝らを植て拔じそは我汝らに 災を降せしを悔ればなり 二 エホバいひたまふ汝らが畏るゝ所のバビロンの王を
三 畏るゝ勿れ彼をおそるゝ勿れわれ汝らとともにありて汝らを救ひ彼の手より汝らを拯ふべし 三 われ汝らを恤み

三 また彼をして汝らを恤ませ汝らを故土に歸らしめん 然ど汝らもし我らはこの地に留らじ汝らの神エホバの聲
 四 に遵はじと言ひ 一四 また然りわれらはかの戦争を見ず箠の聲をきかず食物に乏しからざるエジプトの地にいたり
 五 て彼處に住はんといはゞ 一五 汝らエダの遺れる者よエホバの言をきけ萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひた
 六 まふ汝らもし強てエジプトにゆきて彼處に住はゞ 一六 汝らが懼るゝところの劍エジプトの地にて汝らに臨み汝ら
 七 が恐るゝところの饑饉エジプトにて汝らにおよばん而して汝らは彼處に死べし 一七 凡そエジプトにおもむき至り
 て彼處に住はんとする人々は劍と饑饉と疫病に死べしその中には我彼らに降さんとところの災を脱れて遺る者無
 るべし

一八 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ我震怒と憤恨のエルサレムに住る者に注ぎし如くわが憤恨
 汝らがエジプトにいらん時に汝らに注がん汝らは呪詛となり詫異となり罵詈となり凌辱とならん汝らは再びこの
 一九 處を見ざるべしと 一九 ユダの遺れる者よエホバ汝らにつきていひたまへり汝らエジプトにゆく勿れと汝ら今日わ
 二〇 が汝らを警めしことを確に知れ 二〇 汝ら我を汝らの神エホバに遣して言へり我らの爲に我らの神エホバに祈り我
 二一 らの神エホバの汝に示したまふ事をことごとく我らに告よ我ら之を行はんと斯なんぢら自ら欺けり 二二 われ今日
 汝らに告たれど汝らは汝らの神エホバの聲に遵はず汝らはエホバが我を遣して命ぜしめたまひし事には都て遵は
 二三 ざりき 二三 然ば汝らはその往て住んとねがふ處にて劍と饑饉と疫病に死ることを今確に知るべし
 一 エレミヤ諸の民にむかひて其神エホバの言を盡く宣べその神エホバが己を遣して言しめたまへ
 二 其諸の言を宣をはりし時 二 ホシヤヤの子アザリヤ、カレヤの子ヨハナンおよび驕る人皆エレ

第四三章

イ耶四四・一六 八路九・五一 二二二 耶一八・一六、二四 一二 亞八・一三 耶四二・一七 結六
 口申一七・一六 耶二結一一・八 二二二 耶四四・一四、二八 九、二六、二九 申一七・一六 二二二
 四四・二二—二四 耶二四・一〇、四二 二二二 耶七・二〇 二二二 耶四二・二二 耶四二・一

ワ耶四〇・二二、二二 七
カ耶四一・一〇 夕耶二・一六、四四 結二九・一八、二〇 ツ耶一五・二 羅一 ナ出一四・二 耶四六 ム察一九・一三
ヨ耶三九・一〇、四〇 一 察三〇・四 ソ耶四四・一三、四六 九 二四

ミヤに語りていひけるは汝は 誑をいふ我らの神エホバはエジプトにゆきて彼處に住む勿れと汝をつかはして云
三 せたまはざるなり 三 ネリヤの子バルク汝を 唆して我らに逆はしむ是我らをカルデア人の手に付して殺さしめ
四 バビロンに移さしめん爲なり 四 斯カレヤの子ヨハナンと軍勢の長等および民皆エホバの聲に遵はずしてユダの
五 地に住ことをせざりき 五 斯てカレヤの子ヨハナンと軍勢の長等はユダに遺れる者即ちその逐やられし國々より
六 ユダの地に住んとて販りし者 六 男女嬰孩王の女たちおよび凡て侍衛の長ネブザラダンがシヤパンの子なるア
七 ヒカムの子ゲダリヤに付し置し者並に預言者エレミヤとネリヤの子バルクを取て 七 エジプトの地に至れり彼ら
八 斯エホバの聲に遵はざりき而して遂にタバネスに至れり
九 エホバの言タバネスにてエレミヤに臨みていふ 九 汝大なる石を手に取りユダの人々の目の前にてこれ
一〇 をタバネスに在るパロの室の入口の旁なる磚窰の泥土の中に藏して 一〇 彼らにいへ萬軍のエホバ、イスラエルの

神かくいひたまふ視よわれ使者を遣してわが僕なるバビロンの王ネブカデネザルを召きその位をこの藏したる石
二 の上に置しめん彼錦繡をその上に敷べし 二 かれ來りてエジプトの地を撃ち死に定まれる者を死しめ虜に定まれ
三 る者を虜にし劍に定まれる者を劍にかけん 三 われエジプトの諸神の室に火を燃さんネブカデネザル之を焚きか
れらを虜にせん而して羊を牧ふ者のその身に衣を纏ふがごとくエジプトの地をその身に纏はん彼安然に其處をさ
四 るべし 四 彼はエジプトの地のベテシメシの偶像を毀ち火をもてエジプト人の諸神の室を焚べし

第四四章

エジプトの地に住るところのユダの人衆すなはちミグドル、タバネス、ノフ、バテロスの地に住る
者之事につきてエレミヤに臨みし言に曰く 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいふ汝らは我

三 エルサレムとユダの諸邑に降せしところの災をみたり視よこれらは今日すでに空曠となりて住む人なし 三
 彼は彼ら悪をなして我を怒らせしによる即ちかれらは己も汝らも汝らの先祖等も識ざるところの他の神にゆきて香を
 焚き且これに奉へたり 四 われ我僕なる預言者たちを汝らに遣し頻にこれを遣して請ふ汝らわが嫌ふところの此
 憎むべき事を行ふ勿れといはせけるに 五 彼ら聽かず耳を傾けず他の神に香を焚きてその悪を離れざりし 六 是
 によりて我震怒とわが憤恨ユダの諸邑とエルサレムの街にそよぎて之を焚たれば其等は今日のごとく荒れかつ
 傾圮たり 七 萬軍の神イスラエルの神エホバイまかくいふ汝ら何なれば大なる悪をなして己の靈魂を害しユダの
 中より汝らの男と女と孩童と乳哺子を絶て一人も遺らざらしめんとするや 八 何なれば汝ら其手の行爲をもて我
 を怒らせ汝らが往て住ふところのエジプトの地に於て他の神に香を焚きて己の身を滅し地の萬國の中に呪詛と
 なり凌辱とならんとするや 九 ユダの地とエルサレムの街にて行ひし汝らの先祖等の悪ユダの王等の悪其妻等の
 一〇 悪および汝らの身の悪汝らの妻等の悪を汝ら忘れしや 一〇 彼らは今日にいたるまで悔いすまた畏れず汝らと汝ら
 の先祖等の前に立たる我律法とわが典例に循ひて行まざるなり
 一 是故に萬軍のエホバイスラエルの神かくいふ視よわれ面を汝らにむけて災を降しユダの人衆を悉く絶
 二 又われエジプトの地にすまんとてその面をこれにむけて往しところの彼ユダの遺れる者を取らん彼らは皆
 滅されてエジプトの地に仆れん彼らは劍と饑饉に滅され微者も大者も劍と饑饉によりて死べし而して呪詛と
 三 なり詫異となり罵詈となり凌辱とならん 四 われエルサレムを罰せし如く劍と饑饉と疫病をもてエジプトに住る
 者をも罰すべし 五 是をもてエジプトの地に往て彼處に住るところのユダの遺れる者の中に一人も逃れまたは遺り

イ耶九・一一、三四、八申一三・六、三三・
 二二 七・二五、二五・四、
 二二 二六・五、二九・一九、
 一七 一・一九
 二代下三六・一五 耶 ホ耶四二・一八
 一七 二二
 ト耶二五・六、七
 一七 一・二七
 一〇 摩九・四
 一〇 耶四二・一八、四四
 又 二八・一四
 一〇 耶四二・一五、一七
 一七 一・二七
 一〇 耶四二・一八、一七
 一七 一・二七
 一〇 耶四二・一八、一七
 一七 一・二七
 一〇 耶四二・一八、一七
 一七 一・二七

ヨ耶四四・二八 二三・二三 士一一 ツ耶七・一八 三八
タ耶六・二六 三六 耶四四・二五 ネ耶四四・六 ラ但九・一一、一二 一五
レ民三〇・一二 申 ソ耶七・一八 ナ耶二五・二一、一八、ム耶四三・七、四四、 ウ耶二四・一五

てその心にしたひて歸り住はんとねがふところのユダの地に歸るもの無るべし逃るゝ者の外には歸る者無るべし

一五 是に於てその妻が香を他の神に焚しことを知れる人々および其處に立てる婦人等の大なる群衆並にエジプ

一六 トの地のパテロスに住るところの民エレミヤに答へて云けるは 汝がエホバの名をもてわれらに述し言は我ら

一七 聽かじ 我らは必ず我らの口より出る言を行ひ我らが素なせし如く香を天后に焚きまた酒をその前に灌ぐべし

即ちユダの諸邑とエルサレムの街にて我らと我らの先祖等および我らの王等と我らの牧伯等の行ひし如くせん

一八 當時われらは糧に飽き福をえて災に遇ざりし 我ら天后に香を焚くことを止め酒をその前に灌がすなりし時

一九 より諸の物に乏しくなり劍と饑饉に滅されたり 我らが天后に香を焚き酒をその前に灌ぐに方りて之に象りて

二〇 パンを製り酒を灌ぎしは我らの夫等の許せし事にあらずや 我らが天后に香を焚き酒をその前に灌ぐに方りて之に象りて

二一 エレミヤ即ち男女の諸の人衆および此言をもて答へたる諸の民にいひけるは ユダの諸邑とエルサレ

二二 ムの街にて汝らと汝らの先祖等および汝等の王等と汝らの牧伯等および其地の民の香を焚しことはエホバ之を憶

二三 えまた心に思ひたまふにあらずや エホバは汝らの悪き爲のため汝らの憎むべき行の爲に再び忍ぶことをえ

二四 せざりきこの故に汝らの地は今日のごとく荒地となり詫異となり呪詛となり住む人なき地となれり 汝ら香を

二五 焚きエホバに罪を犯しエホバの聲に聽したがはずその律法と憲法と証詞に循ひて行まざりしに由て今日のごとく

此災汝らにおよべり

二四 エレミヤまたすべての民と婦等にいひけるはエジプトの地に居るユダの子孫よエホバの言をきけ 萬軍

二五 のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ汝らと汝らの妻等は口をもていひ手をもて成し我ら香を天后に焚き酒

二六 を灌ぎて立しところの誓を必ず成就んといふ汝ら必ず誓をたてかならず其誓を成就んとす 二六 この故にエジプト

の地に住るユダの人々よエホバの言をきけエホバいひたまふわれ我大なる名を指て誓ふエジプトの全地にユダの

二七 人々一人もその口に主エホバは活くといひて再び我名を稱ふることなきにいたらん 二七 視よわれ彼らをうかゞは

ん是福をあたふる爲にあらす禍をくださん爲なりエジプトの地に居るユダの人々は剣と饑饉に滅びて絶るに

二八 いたらん 然ど剣を逃るゝ僅少の者はエジプトの地を出てユダの地に歸らん又エジプトの地にゆきて彼處に

二九 寄寓れるユダの遺れる者はその立ところの言は我のなるか彼らのなるかを知るにいたるべし 二九 エホバいひ給ふ

わがこの處にて汝らを罰する兆は是なり我かくして我汝らに禍をくださんといひし言の必ず立ことを知しめん

三〇 すなはちエホバかくいひたまふ視よわれユダの王ゼデキヤを其生命を索むる敵なるバビロンの王ネブカデネ

ザルの手に付せしが如くエジプトの王パロホフラを其敵の手その生命を索むる者の手に付さん

第四五章

一 ユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年ネリヤの子バルクが此等の言をエレミヤの口にしたりがひて
二 書に録せしとき預言者エレミヤこれに語りていひけるは 二 バルクよイスラエルの神エホバ汝にか

三 くいひ給ふ 汝曾ていへり嗚呼我は禍なるかなエホバ我憂に悲を加へたまへり我は歎きて疲れ安きをえずと

四 汝かく彼に語れエホバかくいひたまふ視よわれ我建しところの者を毀ち我植しところの者を抜ん是此の全地な

五 汝己れの爲に大なる事を求むるかこれを求むる勿れ視よわれ 災をすべての民に降さん然ど汝の生命は我

汝のゆかん諸の處にて汝の掠物とならしめんとエホバいひたまふ

第四六章

一 茲にエホバの言預言者エレミヤに臨みて諸國の事を論ふ

イ創二二・二六 二八 結七・六 二七・二三 ト詩三三・一一 二二 ル賽五・五
口結二〇・三九 二耶四四・一一 二耶四四・二七、二五、 二耶四六・二五、二六 二耶三九・五 二耶二五・二六 二、三九・一八
ハ耶一・一〇、三一、 水耶四四・一四 賽 二六 二六 結二九・三、三〇、 又耶三六・一、四、三二 二耶二一・九、三八、 二、三五・一五

ヨ王下二三・二九 代 第二・一、三・一四 ソ但一・一九 ネ賽六六・一九 結三九・一七 ノ結三〇・二一
下三五・二〇 ヲ耶六・二五、四九・ツ賽八・七、八耶四七 ナ賽一三・六 耳一・三四・六 ウ賽四七・二 耶四三
夕耶五一・一一、一二 二九 二二但一・二二 一五、二・一 ム賽三四・六番一・七 牛耶八・二二、五一・八 一〇、一一結二九 ヤ耶四六・一〇

二 先エジプトの事すなはちユフラテ河の邊なるカルケミシの近傍にをるところのエジプト王バロネコの軍勢の事を論ふ是はユダの王ヨシヤの子エホヤキムの四年にバビロンの王ネブカデネザルが撃やぶりし者なり其言にいはいはく

三 汝ら大楯小干を備へて進み戦へ 馬を車に繋ぎ馬に乗り盜を被りて立て戈を磨き甲を着よ われ見る

四 彼らは懼れて退きその勇士は打敗られ狼狽遁て後をかへりみず是何故ぞや畏懼かれらのまはりにありとエホバにいひたまふ 快足なる者も逃えず強者も遁れえず皆北の方にてユフラテ河の旁に蹶き仆れん かのナイルの

五 ごとくに湧あがり河のごとくに其水さかまく者は誰ぞや エジプトはナイルの如くに湧あがりその水は河の如くに逆まくなり而していふ我上りて地を蔽ひ邑とその中に住る者とを滅さん 汝等馬に乗り車を驅馳らせよ勇士よ盾を執るエテオピア人および弓を張り挽くルデ人よ進みいづべし 此は主なる萬軍のエホバの復仇の日即ちその敵に仇を復し給ふ日なり劍は食ひて飽きその血に酔はん主なる萬軍のエホバ北の地にてユフラテ河

六 の旁に宰ることをなし給へばなり 處女よエジプトの女よギレアデに上りて乳香を取れ汝多の藥を用ふるも益なし汝は愈ざるべし 汝の恥辱は國々にきこえん汝の號泣は地に満てり勇士は勇士にうち觸てともに仆る

七 バビロンの王ネブカデネザルが來りてエジプトの地を撃んとする事につきてエホバの預言者エレミヤに告たまひし言

八 汝らエジプトに宣べミグドルに示し又ノフ、タバネスに示しいふべし汝ら堅く立ちて自ら備よ劍なんぢの四周を食ひたればなり 汝の力ある者いかにして拂ひ除かれしやその立ざるはエホバこれを仆したまふに由る

九

二六 なり 一六かれおほく 彼多の者を蹶かせたまふ人其友の上に仆れかさなり而していふ起よ我ら滅すところの劍を避てわが國に

二七 かへり故土にいたらんと 一七ひとかたし 人彼處に叫びてエジプトの王パロは滅されたり彼は機會を失へりといふ 一八はんぐん 萬軍の

エホバと名りたまふところの王いひたまふ我は活く彼は山々の中のタボルのごとく海の傍のカルメルのごとくに

一九 來らん 一九(ロ) エジプトに住る女よ汝移轉の器皿を備へよそはノフは荒蕪となり焼れて住む人なきにいたるべけれ

二〇 ばなり 二〇 エジプトは至美しき牝の犢のごとし蜚虻きたり北の方より來る 二一 また其中の傭人は肥たる犢のご

三三 とし彼ら轉向てともに逃げ立ことをせず是の滅さるゝ日いたり其罰せらるゝ時來りたればなり 三三 彼は蛇の如

三三 く聲をいだす彼ら軍勢を率ゐて來り樵夫の如く斧をもて之にのぞめり 三三 エホバいひ給ふ彼らは探りえざるに由

二四 りて彼の林を砍仆せり彼等は蝗蟲よりも多して數へがたし 二四 エジプトの女は辱められ北の民の手に付されん

二五 萬軍のエホバ、イスラエルの神いひ給ふ視よわれノフのアモンとパロとエジプトとその諸神とその王等すなは

二六 ちパロとかれを頼むものとを罰せん 二六 われ彼らを其生命を索むる者の手とバビロンの王ネブカデネザルの手と

その臣僕の手付すべしその後この地は昔のごとく人の住むところとならんとエホバいひたまふ

二七 我僕ヤコブよ怖るゝ勿れイスラエルよ驚く勿れ視よわれ汝を遠方より救ひきたり汝の子孫をその擄移され

二八 たる地より救ひとるべしヤコブは歸りて平安と寧靜をえん彼を畏れしむる者なかるべし 二八 エホバいひたまふ我

僕ヤコブよ汝怖るゝ勿れ我汝と偕にあればなり我汝を逐やりし國々を悉く滅すべけれど汝をば悉くは滅さじ

われ道をもて汝を懲し汝を全くは罪なき者とせざるべし

イ利二六・三七	ホ何一〇・一一	チ賽二九・四	翁三・八	ヨ結二九・一一、一二、一三、	レ耶一〇・二四、三〇
ロ賽四七・四、四八・二	ヘ耶一・一四、四六・	リ賽一〇・三四	ワ耶四三・一二、一三	一四	レ耶一〇・二四、三〇
耶四八・一五	六、一〇、四七・二、	又士六・五	結三〇・二三	夕賽四一・二三、一四、	
ハ耶四八・一八	ト詩三七・一三 耶	ル耶一・一五	カ耶四四・三〇 結	四三・五、四四・二	
ニ賽二〇・四	五〇・二七	ヲ結三〇・一四、一六	三二・一一	耶三〇・一〇、一一	
				ソ摩一・六一八	
				ツ耶二五・二〇 結	

二五・一五、一六番 二〇 八、九・七 九一・二四 賽四六・
二・四、五 耶八・一六、番三・二 ノ摩一・七米一・一六 五、四八・三七 フ摩一五、一六・耶 四七 賽一五・二一 一、二一 耶四三・二二
ネ賽八・七 耶四六・ ム耶二五・二二 番二・四、七 亞九・ 申三三・四一 結 二五・二二、二七・三 二民三三・三七 二耶五一・六 一、二一 耶四九・三
七、八 七、八 ウ創一〇・一四 五 二一・三一・五 結 二五・九 摩二・ 一、二一 耶一七・六 二耶一七・六 二耶六・二六、四八・
ナ耶一・一四、四六・ 牛結二五・一六 摩一 才耶二五・二〇 マ結一四・一七 一、二一 耶一五・四 二民二一・二九 士 一八

第四十七章

一 バロがガザを撃ざりし先にペリシテ人の事につきて預言者エレミヤに臨みしエホバの言
二 エホバかくいひたまふ視よ水北より起り溢れながれて此地と其中の諸の物とその邑と其中
三 に住る者とに溢れかゝるべしその時人衆は叫びこの地に住る者は皆哭くべし 其の逞しき馬の蹄の蹴たつる音
四 のため其車の響のため其輪の轟のため父は手弱りて己の子女を顧みざるなり 是ペリシテ人を滅しつくし
五 ツロとシドンにのこりて助力をなす者を悉く絶やす日來ればなりエホバ、カフトルの地に遺れるペリシテ人を滅
六 したまふべし ガザには髪を剃るの事はじまるアシケロンと其剩餘の平地は滅さる汝いつまで身に傷くるや
七 エホバの劍よ汝いつまで息まざるや汝の鞘に歸りて息み静れ エホバこれに命じたるなればいかで息むこと
をえんやアシケロンと海邊を攻ることを定めたまへり

第四十八章

一 萬軍のエホバ、イスラエルの神モアブの事につきてかくいひたまふ嗚呼ネボは禍なるかな是滅さ
二 れたりキリアタイムは辱められて取られミスガブは辱められて毀たる モアブの榮譽は失さりぬ
三 ヘシボンにて人衆モアブの害を謀り去來之を絶ちて國をなさざらしめんといふマデメンよ汝は滅されん劍汝を
四 追はん ホロナイムより號咷の聲きこゆ毀敗と大なる滅亡あり モアブ滅されてその嬰孩等の號咷聞ゆ
五 彼らは哭き哭きてルヒテの坂を登る敵はホロナイムの下り路にて滅亡の號咷をきけり 逃て汝らの生命を救
六 へ曠野に棄られたる者の如くなれ 汝は汝の工作と財寶を頼むによりて汝も執へられん又ケモシは其祭司およ
七 びその牧伯等と偕に擄へうつさるべし 殘害者諸の邑に來らん一の邑も免れざるべし谷は滅され平地は荒され
八

二九 ンエホバのいひたまひしが如し 翼をモアブに予へて飛さらしむ其諸邑は荒て住者なからん 一〇 エホバの事を

行ふて怠る者は誼はれ又その劍をおさへて血を流さざる者は誼はる

二〇 二 モアブはその幼時より安然にして酒の其滓のうへにとどまりて此器よりかの器に斟うつされざるが如く

三 なりき彼擄うつされざりしに由て其味 尙存ちその香氣變らざるなり 二二 エホバいひたまふ此故にわがこれを傾

くる者を遣す日來らん彼らすなはち之を傾け其器をあけ其罅を碎くべし 二三 モアブはケモシのために羞をとらん

二四 是イスラエルの家がその恃めるところのベテルのために羞をとりしが如くなるべし 二四 汝ら何ぞ我らは勇士なり

二五 強き軍人なりといふや 二五 モアブはほろぼされその諸邑は騰りその選擇の壯者は下りて殺さる萬軍のエホバと名

二六 二七 王これをいひ給ふ 一六 モアブの滅亡近けりその禍速に來る 一七 凡そ其四周にある者よ彼のために歎けその

二八 名を知る者よ強き竿美しき杖いかにして折しやといへ 一八 デボンに住る女よ榮をはなれて下り燥ける地に坐せよ

二九 一〇 九 モアブを敗る者汝にきたりて汝の城を滅さん 一九 アロエルに住る婦よ道の側にたちて鬪ひ逃きたる者と脱れい

三〇 二〇 二一 たる者に事いかんと問へ 二〇 モアブは敗られて羞をとる汝ら呼はり咥びモアブは滅されたりとアルノンに告よ

三二 二二 三三 二四 三 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

三三 二二 三三 二四 三 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

三六 折たりとエホバいひたまふ

二六 汝らモアブを酔はしめよ彼エホバにむかひて驕傲ればなりモアブは其吐たる物に轉びて笑柄とならん

イ詩五五・六 耶四八 八番一・二二
 二二八 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七
 二〇・四一 五七

ト賽一六・六 二九
 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七

ル賽九・四、一四・四、 一九
 五 五
 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七

カ耶四八・八 一九
 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七

ソ民二一・二三 一九
 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七

ラ結三〇・二一 一九
 二士一・二四 王上 五
 二五五・二三 母前 一七
 一五三・九 王上 何一〇・六 五七

ウ番二・八
 半耶二・二六
 ノ詩五五・六、七 耶
 四八・九
 オ歌二・二四

ク祭一六・六
 耶五〇
 三三六
 マ祭一五・五、一六
 七、一一

ケ祭一六・八、九
 フ祭一六・一〇 耳一
 二二
 コ祭一五・四一六
 エ祭一五・五、六 耶

四八・五
 一五・二、一六
 一二
 ア祭一五・五、一六
 一一

サ祭一五・七
 一五・二、三 耶
 四七・五
 一
 ユ創三七・三四
 ヌ耶二二・二八

ミ申二八・四九 耶
 四九・二二 但七・四
 何八・一 哈一・八
 シ祭八・八
 エ耶四八・二四

二七 イスラエルは汝の笑柄にあらざりしや彼盗人の中にありしや汝彼の事を語るごとに首を揺たり 二八 モアブに

二八 住る者よ汝ら邑を離れて磐の間にすめ穴の口の側に巢を作る斑鳩の如くせよ 二九 われらモアブの驕傲をきけり

三〇 其驕傲は甚し即ち其驕慢矜高驕誇およびその心の自ら高くするを聞き 三〇 エホバいひたまふ我モアブの驕傲と

三一 その言の虚きとを知る彼らは偽を行ふなり 三二 この故に我モアブの爲に咄びモアブの全地の爲に呼はるキルハ

三三 レスの人々の爲に嗟歎あり 三三 シブマの葡萄の樹よわれヤゼルの哭泣にこえて汝の爲になげくべし汝の蔓は海を

三四 踰え延てヤゼルの海にまでいたる掠奪者來りて汝の果と葡萄をとらん 三三 欣喜と歡樂園とモアブの地をはなれ去

三三 我酒醉に酒無らしめん呼はりて葡萄を踐もの無るべし其喚呼は葡萄をふむ喚呼にあらざらん 三四 ヘシボンより

三五 エレアレとヤハヅにいたりゾアルよりホロナイムとエグラテシリシヤにいたるまで人聲を揚ぐそはニムリムの水

三六 までも絶たればなり 三五 エホバいひたまふ我祭物を崇邱に献げ香をその諸神に焚くところの者をモアブの中に

三六 滅さんと 三六 この故に我心はモアブの爲に簫のごとく歎き我心はキルハレスの人衆のために簫のごとく歎く是其獲たる

三七 ところの財うせたればなり 三七 人みなその髪を剃り皆その鬚をそり皆その手に傷け腰に麻布をまとはん 三八 モア

三九 ブにては家蓋の上と街のうちに遍く悲哀ありそはわれ心に適ざる器のごとくにモアブを碎きたればなりとエホバ

三九 いひたまふ 三九 嗚呼モアブはほろびたり彼らは咄ぶ嗚呼モアブは羞て面を背けたりモアブはその四周の者の笑柄

四〇 となり恐懼となれり 四〇 エホバかくいひたまふ視よ敵驚のごとくに飛來りて翼をモアブのうへに舒ん 四一 ケリオ

一 テは取られ城はみな奪はるその日にはモアブの勇士の心子を産む婦のごとくになるべし
 二 モアブはエホバにむかひて傲りしゆゑに滅ぼされて再び國を成さるべし
 三 エホバいひたまふモアブにすめる者よ恐怖と陷阱と罟なんぢに臨めり
 四 恐怖をさけて逃るものは陷阱におちいり陷阱より出るものは罟にとらへられん其はわれモアブにその罰をうくべき年をのぞましむればなりエホバこれをいふ
 五 遁逃者は力なくしてヘシボンの蔭に立つ是は火ヘシボンより出で火焰シホンのうちより出てモアブの地
 六 および喧鬧をなす者の首の頂を焼ばなり
 七 嗚呼禍なるかなモアブよケモシの民は亡びたり即ち汝の諸子は擄へうつされ汝の女等は執へゆかれたり
 八 然ど末の日に我モアブの擄移されたる者を返さんとエホバいひ給ふ
 九 此まではモアブの鞫をいへる言なり

第四九章

一 アンモン人の事につきてエホバかくいひたまふイスラエルに子なからんや嗣子なからんや何なれば彼らの王ガドを受嗣ぎ彼の民その邑々に住や
 二 エホバいひたまふ是故に視よわが戦鬪の號呼をアンモン人のラバに聞えしむる日いたらんラバは荒埵となりその女等は火に焚れんその時イスラエルはおのれの嗣者となりし者等の嗣者となるべしエホバこれをいひたまふ
 三 ヘシボンよ咄べアイは滅びたりラバの女たちよ呼はれ麻布を身にまとひ嗟て籬のうちを走れマルカムとその祭司およびその牧伯等は偕に擄へ移されたり
 四 汝何なれば谷の事を誇るや背ける女よ汝の谷は流るゝなり汝財貨に倚頼みていふ誰か我に來らんやと
 五 主なる萬軍のエホバいひたまふ視よ我畏懼を汝の四周の者より汝に來らしめん汝らおのおの逐れて直にすゝまん逃る者

イ 耶一三・八、二一・三
 耶三〇・六、四九
 二二・二四、五〇
 四三・五一・三〇
 米四・九
 詩八三・四 賽七・八
 八 賽二四・一七、一八
 二 耶一一・二三
 八 民二一・二八
 八 民二四・一七
 二 民二一・二九
 二 耶四九・六、三九
 二 耶二一・二八、二五
 二 二 摩一・二三番
 二 八、六、二六
 二 八、九
 二 摩一・二三
 二 結二五・五
 二 摩一
 二 耶四八・七
 二 摩一
 二 王上一・五、三三
 二 耶四八・七
 二 摩一
 二 耶四八・四七、四九
 二 結二五・二二
 二 摩一
 二 阿八

一六 二九・二三 耶五〇 耶一・二五
 一七 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 一八 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 一九 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二〇 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二一 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二二 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二三 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二四 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二五 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二六 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二七 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二八 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 二九 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五
 三〇 一六 耶一・二六 耶五〇 耶一・二五

六 を集むる人無るべし 然ど後にいたりてわれアンモン人の擄移されたる者を返さんとエホバいひたまふ

七 エドムの事につきて萬軍のエホバかくいひたまふテマンの中には智慧あることなきにいたりしや明哲者に

八 は謀略あらずなりしやその智慧は盡はてしや デダンに住る者よ逃よ遁れよ深く竄れよ我エサウの滅亡をかれ

九 の上にのぞませ彼を罰する時をきたらしむべし 葡萄を斂むる者もし汝に來らば少許の果をも餘さざらんもし

一〇 夜間盗人きたらばその飽まで滅さん われエサウを裸にし又その隠處を露にせん彼は身を匿すことをえざる

一一 べしその裔も兄弟も隣舍も滅されん而して彼は在すなるべし 汝の孤子を遣せわれ之を生存へしめん汝の贅は

一二 我に倚頼むべし エホバかくいひ給ふ視よ杯を飲べきにあらざる者もこれを飲ざるをえざるなれば汝まつた

一三 く罰を免るゝことをえんや汝は罰を免れじ汝これを飲ざるべからず エホバいひたまふ我おのれを指して誓ふ

一四 ボズラは詫異となり羞辱となり荒地となり呪詛とならんその諸邑は永く荒地となるべし

一五 われエホバより音信をきけり使者遣されて萬國にいたり汝ら集りて彼に攻めきたり起て戦へよといへり

一六 視よわれ汝を萬國の中に小者となし人々の中に藐めらるゝ者となせり 磐の隠場にすみ山の高處を占る

一七 者よ汝の恐ろしき事と汝の心の驕傲汝を欺けり汝鷹のごとくに巢を高く處に作りたれどもわれ其處より汝を取り

一八 下さんとエホバいひたまふ エドムは詫異とならん凡そ其處を過る者は驚きその災害のために笑ふべし

一九 ホバいひたまふソドムとゴモラとその隣の邑々の滅しがごとく其處に住む人なく其處に宿る人の子なかるべし

二〇 視よ敵獅子のヨルダンの叢より上るがごとく堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼を其處より逐奔らせわが選み

二一 たる者をその上に立てん誰か我のごとき者あらん誰か我爲に時期を定めんや孰の牧者か我前にたつことをえん

二〇 さればエドムにつきてエホバの謀りたまひし御謀とテマンに住る者につきて思ひたまひし思をきけ群の

二一 弱者はかならず曳ゆかれん彼かならずかれらの住居を滅すべし 二二 その傾圮の響によりて地は震ふ號咷ありその

二三 聲紅海にきこゆ 二三 みよ彼鷹のごとくに上り飛びその翼をボズラの上に舒べんその日エドムの勇士の心は子を産

二四 婦の心の如くならん 二三 ダマスコの事 ハマテとアルバデは羞づそは凶き音信をきけばなり彼らは心を喪へり海の上に恐懼あり安

二五 き者なし 二四 ダマスコは弱り身をめぐらして逃んとす恐懼これに及び憂愁と痛劬子を産む婦にあるごとくこれに

二六 およぶ 二五 頌美ある邑我欣ぶところの邑を何なれば棄さらざるや 二六 さればその日に壯者は街に仆れ兵卒は悉

二七 く滅されんと萬軍のエホバひたまふ 二七 われ火をダマスコの石垣の上に燃しベネハダデの殿舎をことごとく

二八 焚くべし 二八 バビロンの王ネブカデネザルが攻め撃たるケダルとハゾルの諸國の事につきて

二九 エホバかくいひたまふ汝ら起てケダルに上り東の衆人を滅せ 二九 その幕屋とその羊の群は彼等これを取り

三〇 その幕とその 諸の器と駱駝とは彼等これを奪ひとらん人これに向ひ惶懼四方にありと呼るべし 三〇 エホバひひ

三二 たまふハゾルに住る者よ逃よ急に走りゆき深き處に居れバビロンの王ネブカデネザル汝らをせむる謀略を運らし

三三 汝らをせむる術計を設けたればなり 三三 エホバひひ給ふ汝ら起て 三三 なる安かに住める民の所に攻め上れ彼らは

三三 門もなく關もなくして獨り居ふなり 三三 その駱駝は擄掠とせられその多の畜は奪はれん我かの毛の角を剪る者を

イ耶五〇・四五 一三 摩一・三 三〇・六、四八、 四 七耶六・二五、四六・五 九耶九・二六、二五、 二二 三

口耶五〇・四六 九一、二 四一、四九、二二 四 八耶四九・八 二二 三 四九・三六 結五 一〇

ハ耶四・一三、四八、 ホ察五七・二〇 四一、四九、二二 四 二耶三三・九、五一、 又察二一・二三 三 結三八・一一 一〇

四〇、四一 へ察一三・八 耶四、 四一 四 又察二一・二三 三 結三八・一一 一〇 二耶九・一一、一〇、

二察一七・一、三七、 三一、六、二四、 耶五〇・三〇、五一 七詩二二〇・五 二八 米七・一四 二二 馬一・三 二二

二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二

二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二

二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二

二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二 二 耶九・一六、四八、二

牛那四三・一〇 才賽一三・二、二二・四四 才賽一三・一七、一八、フ何一・二一 三二・九 亞二二・才那三一・三二、三二
ノ耶四八・四七、四九 一、四七・一 才那四三・二二、二三 二〇耶五〇・三九、コ喇三・二二、二三 詩一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇
六 才賽四六・一 耶五一 才那五一・四八 四〇 一三六・五、六 耶 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五 一何三・五
一七 彼前二・二五 才那二二・二〇、三・六、三三

三三 四方に散しその滅亡を八方より來らせんとエホバいひたまふ ハヅルは山犬の痛となり何までも荒蕪となりを
らん彼處に住む人なく彼處に宿る人の子なかるべし

三四 ユダの王ゼデキヤが位に即し初のころエホバの言預言者エレミヤに臨みてエラムの事をいふ 萬軍のエ

ホバかくいひたまふ視よわれエラムが權能として頼むところの弓を折らん われ天の四方より四方の風をエラ

ムに來らせ彼らを四方の風に散さんエラムより追出さるゝ者のいたらざる國はなかるべし エホバいひたまふ

われエラムをしてその敵の前とその生命を索むるもの前に懼れしめん我災をくだし我烈しき怒をその上にい

たらせんまたわれ劍をその後につかはしてこれを滅し盡すべし われ我位をエラムに居る王と牧伯等を其處よ

り滅したゝんとエホバいひたまふ 然ど末の日にいたりてわれエラムの擄移されたる者を返すべしとエホバ

ひたまふ

第五〇章

一 エホバ預言者エレミヤによりてバビロンとカルデヤ人の地のことを語りたまひし言
二 汝ら國々の中に告げまた宣示せ霧を樹上隠すことなく宣示して言へバビロンは取られべし

三 辱められメロダクは碎かれ其像は辱められ其木像は碎かると 是は北の方より一の國人きたりて之を攻めそ

四 の地を荒して其處に住む者無らしむばれなり人も畜も皆逃去れり エホバいひたまふその日その時イスラエル

五 の子孫かへり來らん彼らと偕にユダの子孫かへり來るべし彼らは哭きつゝ行てその神エホバに請求むべし 彼

六 面をシオンに向てその路を問ひ來れ我らは永遠わするゝことなき契約をもてエホバにつらならんといふべし

我民は迷へる羊の群なりその牧者之をいざなひて山にふみ迷はしめられたれば山より岡とゆきめぐりて其休息

七 所を忘れたり 之に遇ふもの皆之を食ふその敵いへり我らは罪なし彼らエホバすなはち義きの在所その先祖の

八 望みしところなるエホバに罪を犯したるなり 汝らバビロンのうちより逃よカルデヤ人の地より出よ群の前に

九 ゆくところの牡山羊のごとくせよ 視よわれ大なる國々より人を起しあつめて北の地よりバビロンに攻め來らしめん彼ら之にむかひて備をたてん是すなはち取るべし彼らの矢は空しく返らざる狡き勇士の矢のごとくなるべし

一〇 カルデヤは人に掠められん之を掠むる者は皆飽ことをえんとエホバ曰たまふ

一一 我産業を掠る者よ汝らは喜び樂み穀物を碾す犢のごとくに躍り牡馬のごとく嘶けども 汝らの母は痛く辱められん汝らを生しものは恥べし視よ國々の中の終末の者荒野となり燥ける地となり沙漠とならん

一二 バの怒りの爲に之に住む者なくして 悉く荒地となるべしバビロンを過る者は皆その禍に驚き且嗤はん

一三 そ弓を張る者よバビロンの四周に備をなして攻め矢を惜まずして之を射よそは彼エホバに罪を犯したればなり

一四 その四周に喊き叫びて攻めかゝれ是手を伸ぶその城壁は倒れその石垣は崩る是エホバ仇を復したまふなり汝らこれに仇を復せ是の行ひしごとく是に行へ 播種者および穡收時に鎌を執る者をバビロンに絶せその滅すところの劍を怖れて人おのおの其民に歸り 各その故土に逃べし

一五 イスラエルは散されたる羊にして獅子之を追ふ初にアツスリヤの王之を食ひ後にこのバビロンの王ネブカデネザルその骨を碎けり

一六 この故に萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふ視よわれアツスリヤの王を罰せしごとくバビロンの王とその地を罰せん

一七 われイスラエルを再びその牧場に歸さん彼カルメルとバシヤン

イ詩七九・七 詩二二・四 三、四一、五一、ル賽四七・六

口耶四〇・二三 耶 二七 七何一〇・一一 二二九

一・五 五二・六、四五 耶 二 七耶五〇・二四、二九 夕耶五〇・九、五一・二

ハ耶二・三、但九・一六 六、七 歌一八・四 母後一・二二 力耶四九・一七 下三〇・八、哀五・六

ニ詩九〇・一、九一・一 ト耶一五・一四、五〇 又歌一七・一六 結一七・一八 六

ホ詩二二・四 三、四一、五一、ル賽四七・六

ヘ賽四八・二〇 耶 二七 七何一〇・一一 二二九

チ耶五〇・二四、二九 夕耶五〇・九、五一・二

リ母後一・二二 力耶四九・一七 下三〇・八、哀五・六

ヌ歌一七・一六 結一七・一八 六

ナ賽二二・一四 耶 廿王下二四・一〇、

ラ耶五〇・六 五〇・二九 歌一八 五〇・二九 結一七・一八 六

ム耶二・一五 五〇・二九 歌一八 五〇・二九 結一七・一八 六

ウ王下二七・六 一三、一四 一四

ノ賽六五・一〇 耶 三三・一二 結三四

結三四 一三、一四 一四

才耶三一・三四 三六・二三 賽一〇 一賽一四・六 耶五一 一三一
 ク賽一・九 六、四四・二八、 二一〇 一賽一三・五 一三一
 十結二三・二三 四八・一四 耶三四 一耶五一・八、三一、 三四・七 耶四六・ 一
 マ後一六・一一 王 二二 三九、五七 但五・ 二二 一 耶五〇・一四 一四
 下一八・二五 代下 一耶五一・五四 三〇、三一 一 耶四八・四四、五〇 一五六 一八・六 一耶二一・一四

二〇 の上に草をくらはんまたエフライムとギレアデの山にてその心を飽すべし 二〇 エホバひたまふ其日その時には
 イスラエルの愆を尋るも有らず又ユダの罪を尋るも遇じそはわれ我存せしところの者を赦すべければなり
 二一 エホバひたまふ汝ら上りて悖れる國罰を受べき民を攻めその後より之を荒し全くこれを滅せ我汝らに命
 二二 ぜしごとく行ふべし 二三 その地に戦闘の咄と大なる敗壞あり 二四 嗚呼全地を推きし鏈折れ砕くるかな嗚呼バビロ
 二五 ン國々の中に荒地となるかな 二六 バビロンよわれ汝をとるために罟を置き汝は擒へらるれども知す汝エホバに
 二七 敵せしにより尋られて獲へらるゝなり 二八 エホバ庫を啓きてその怒りの武器をいだしたまふ是主なる萬軍のエホ
 二九 バ、カルデヤ人の地に事をなさんとしたまへばなり 三〇 汝ら終の者にいたるまで來りてこれを攻めその庫を啓き
 三一 之を積て塵埴のごとくせよ 三二 盡くこれを滅して其處に遺る者なからしめよ 三三 その牡牛を悉く殺せこれを屠場
 三四 にくだらしめよ其等は禍なるかな其日その罰を受べき時來れり 三五 バビロンの地より逃げて遁れ來し者の聲あ
 三六 りて我らの神エホバの仇復その殿の仇復をシオンに宣ぶ
 三七 射者をバビロンに召集めよ凡そ弓を張る者よその四周に陣どりて之を攻め何人をも逃す勿れその作爲に
 三八 循ひて之に報いそのすべて行ひし如くこれに行へそは彼イスラエルの聖者なるエホバにむかひて驕りたればな
 三九 り 是故にその日壯者は衢に踏れその兵卒は悉く絶されんとエホバひたまふ 四〇 主なる萬軍のエホバひ
 四一 たまふ驕傲者よ視よわれ汝の敵となる汝の日わが汝を罰する時きたれり 四二 驕傲者は蹶きて仆れん之を扶け起す
 四三 者なかるべしわれ火をその諸邑に燃しその四周の者を焼盡さん

三三 萬軍のエホバかくいひたまふイスラエルの民とユダの民は偕に虐げらる彼らを擄にせし者は皆固くこれを

三四 守りて釋たざるなり 彼らを贖ふ者は強しその名は萬軍のエホバなり彼必ずその訴を理してこの地に安を與

三五 へバビロンに住る者を戰慄しめたまはん エホバひたまふカルデア人の上バビロンに住る者の上およびその

三六 牧伯等とその智者等の上に劍あり 劍偽る者の上にある彼ら愚なる者とならん劍その勇士の上にある彼ら懼

三七 れん 劍その馬の上にある其車の上にある又その中にあるすべての援兵の上にある彼ら婦女のごとくにならん

三八 劍その寶の上にある是掠めらるべし 旱その水の上にある是涸かん斯は偶像の地にして人々偶像に迷へばなり

三九 是故に野の獸彼處に山犬と偕に居り駝鳥も彼處に棲べし何時までも其地に住む人なく世々こゝに住む人なか

四〇 るべし エホバひたまふ神のソドム、ゴモラとその近隣の邑々を滅せしごとく彼處に住む人なく彼處に宿る

四一 人の子なかるべし 視よ北の方より民きたるあらん大なる國の人とおほくの王たち地の極より起らん 彼らは弓と槍をとる

四二 情なく矜恤なしその聲は海のごとくに鳴るバビロンの女よ彼らは馬に乗り戦士のごとくに備へて汝を攻ん

四三 ビロンの王その風聲をきゝしかば其手弱り苦痛と子を産む婦の如き劬勞彼に迫る 視よ敵獅子のヨルダンの

四四 叢より上るが如く堅き宅に攻めきたらんわれ直に彼等を其處より逐奔らせわが選みたる者をその上に立ん誰か

四五 我のごとき者あらんや誰かわが爲に時期を定めんや何の牧者か我前に立ことをえん さればバビロンにつきて

エホバの謀りたまひし御謀とカルデア人の地につきて思ひたまひし思想をきけ群の弱者必ず曳ゆかれん彼必ず

イ 一八・八 四八・三〇 耶 四四・二七 耶 又 一三・二二、二二、三、 一創一九・二五 賽 五一・二七 一七 耶 四九・二四
ロ 四七・四 耶 二五・二〇、二四 耶 三一・三二、三六 耶 三三・一四 耶 五一 一三・一九 耶 四九 一六
ハ 五・三〇 結 三〇・五 一六・二二 二七 一八・二二 一八、五一、二六 耶 六三・二三 四九・一九 耶
ニ 四七・一三 耶 五一・三〇 三三 耶 五〇・二二、五一、 耶 一三・二〇 耶 六三・二二、二五、 耶 一三・一八 耶
ホ 四四・二五 耶 一三 耶 五一・三〇 三三 耶 四四、四七、五二 二五・二二 一四、 五〇・九、 夕 五・三〇 耶 一四・二四 耶
ネ 一四・二四 耶 五二・二一

ナ 耶一八・九
 ラ 王下一九・七 耶四
 ム 耶一五・七
 ウ 耶五〇・一四

半 耶五〇・一四
 ノ 耶五〇・二一
 オ 耶四九・二六、五〇
 カ 耶五〇・八 耶一八
 ク 耶五〇・八 耶一八
 ケ 耶一七・四
 コ 耶二五・一六
 サ 耶二五・一四
 シ 耶四八・二〇
 タ 耶四八・二〇
 チ 耶二五・一六
 ツ 耶二五・一六
 テ 耶二五・一六
 ト 耶二五・一六
 ナ 耶二五・一六
 ニ 耶二五・一六
 ノ 耶二五・一六
 ハ 耶二五・一六
 ヒ 耶二五・一六
 フ 耶二五・一六
 ヲ 耶二五・一六
 ッ 耶二五・一六
 ヴ 耶二五・一六
 ヅ 耶二五・一六
 デ 耶二五・一六
 ヰ 耶二五・一六
 ヱ 耶二五・一六
 ヲ 耶二五・一六
 ン 耶二五・一六
 ヴ 耶二五・一六
 ヅ 耶二五・一六
 デ 耶二五・一六
 ヰ 耶二五・一六
 ヱ 耶二五・一六

四六 かれらの住居を滅すべし 四六 バビロンは取れたりとの聲によりて地震へその號咷國々の中に聞ゆ

第五章

一 エホバかくいひたまふ視よわれ滅すところの風を起してバビロンを攻め我に悖る者の中に住む者を攻べし 二 われ箴者をバビロンに遣さん彼らこれを箴てその地を空くせん彼らすなはちその禍の日にこれを四方より攻むべし 三 弓を張る者に向ひまた鎧を被て立あがる者に向ひて射者の者其弓を張らん汝らその壯者を憫ます其軍勢を悉く滅すべし 四 然ば殺さるゝ者カルデア人の地に踏れ刺るゝ者その街に踏れん 五 イスラエルとユダはその神萬軍のエホバに棄てられず彼らの地にはイスラエルの至聖者にむかひて犯せる 六 ところの罪充つ 汝らバビロンのうちより逃げいでておのおの其生命をすくへ其の罪のために滅さるゝ勿れ今はエホバの仇をかへしたまふ時なれば報をそれになしたまふなり 七 バビロンは金の杯にしてエホバの手にあり 諸の地を酔せたり國々その酒を飲めり是をもて國々狂へり 八 バビロンは忽ち踏れて壊る之がために哭けその傷のために乳香をとれ是或は愈ん 九 われらバビロンを醫さんとすれども愈す我らこれをすてゝ各その國に歸るべしそはその罰天におよび雲にいたればなり 一〇 エホバわれらの義をあらはしたまふ來れシオンに於て我らの神エホバの作爲をのべん

一 矢を磨ぎ楯を取れエホバ、メデア人の王等の心を激發したまふエホバ、バビロンをせめんと謀り之を滅さん

二 としたまふ是エホバの復仇その殿の復仇たるなり 三 バビロンの石垣に向ひて藁を樹て圍を堅くし番兵を設け伏兵をそなへよ蓋エホバ、バビロンに住める者をせめんとて謀りその言しごとく行ひたまへばなり 三 おほくの

二四 水の傍に住み多の財寶をもてる者よ汝の終汝の貪婪の限來れり 萬軍のエホバおのれを指して誓ひいひ給ふ

我まことに人を蝗のごとくに汝の中に充さん彼ら汝に向ひて鯨波の聲を揚ぐべし

二五 エホバその能力をもて地をつくり其智慧をもて世界を建てその明哲をもて天を舒たまへり 彼聲を發

二七 したまふ時は天に衆の水いづかれ雲を地の極より起らしめ電光と雨をおこし風をその庫よりいだしたまふ

べての人は獸のごとくにして智慧なし諸の鑄物師はその作りし像のために辱を取る其鑄るところの像は偽の者

二八 にしてその中に靈なし 其等は空しき者にして迷妄の工作なりわが臨むとき其等は滅べし ヤコブの分は

此の如くならず彼は萬物およびその産業の族の造化主なりその名は萬軍のエホバといふ

二〇 汝はわが鎚にして戰の器具なりわれ汝をもて諸の邦を碎き汝をもて萬國を滅さん われ汝をもて馬とそ

三三 の騎る者を推き汝をもて車とその御する者を碎かん われ汝をもて男と女をくだき汝をもて老たる者と幼き

三三 者をくだき汝をもて壯者と童女をくだくべし われ汝をもて牧者とその群をくだき汝をもて農夫とその軛を負

三四 ふ牛をくだき汝をもて方伯等と督宰等をくだかん 汝らの目の前にて我バビロンとカルデヤに住るすべての者

がシオンになせし諸の悪きことに報いんとエホバいひたまふ

三五 エホバ言ひたまはく全地を滅したる滅す山よ視よわれ汝の敵となるわれ手を汝の上に伸て汝を巖より轉ば

二六 し汝を焚山となすべし エホバいひたまふ人汝より石を取て隅石となすことあらじ亦汝より石を取りて基礎と

なすことあらじ汝はいつまでも荒地となりをらん

二七 森を地に樹て箠を國々の中に吹き國々の民をあつめて之を攻めアララテ、ミンニ、アシケナズの諸國を招き

イ耶四九・一三 慶六 ハ耶五〇・一五 ホ伯九・八 詩一〇四 ト詩一三五・七
八 創一・一六 耶一〇 二 賽四〇・二二 耶一〇・二四 又耶一〇・一五
口卷三・一五 二二 耶一〇・一三 三 耶五〇・二 耶一〇・一六 七代下三六・一七
ヲ賽一〇・五、一五 耶 耶五〇・一五、二九 五〇・二三 耶一三・二 耶四・七
レ耶五〇・四〇 夕歌八・八 耶一三・二 耶四・七
ネ耶五〇・四一 ツ耶二五・一四

ナ耶五〇・二一 三七
 ラ耶五〇・二三、三九、ウ哀二・九 歴一・五
 四〇、五一・四三 翁三・二三
 ム賽一九・一六 耶 中耶五〇・二四
 四八・四一、五〇、ノ耶五〇・三八
 オ賽二一・一〇 歴一
 一耳三・二三 耶 一四・一五、一八
 五〇・三九 歴一八 賽一三・一九 耶
 ク賽四一・一五 哈三
 マ耶五〇・一七
 ケ耶五〇・三四
 エ耶二五・九、一八
 フ耶五〇・三八
 ヤ賽一七・五 何六・
 テ耶五一・五七
 三〇

二八 て之を攻め軍長をたて、之を攻め恐ろしき蝗のごとくに馬をすゝめよ 國々の民をあつめて之を攻めメデア人

二九 の王等とその方伯等とその督宰等およびそのすべての領地の人をあつめて之を攻めよ 地は震ひ揺かんそはエ

三〇 ホバその意旨をバビロンになしバビロンの地をして住む人なき荒地とならしめたまふべければなり 三〇 バビロン

三一 の勇者は戦をやめて其城にこもりその力失せて婦のごとくにならん其宅は焼けその門門は折れん 三二 駟は趨て

三三 駟にあひ使者は趨て使者にあひバビロンの王につけて邑は盡く取られ 三三 渡口は取られ沼は焼れ兵卒は怖ると

いはん

三三 萬軍のエホバ、イスラエルの神かくいひたまふバビロンの女は禾場のごとしその踏るゝ時きたれり暫くあ

三四 りてその刈るゝ時いたらん 三三 巴ビロンの王ネブカデネザル我を食ひ我を滅し我を空き器のごとくなし龍の如く

三五 に我を呑みわが珍饈をもて其腹を充し我を逐出せり 三五 シオンに住る者いはんわがうけし虐遇と我肉はバビロン

三六 にかゝるべしエルサレムいはん我血はカルデヤに住る者にかゝるべしと 三六 さればエホバかくいひたまふ視よ

三七 われ汝の訟を理し汝の爲に仇を復さん我その海を涸かし其泉を乾かすべし 三七 バビロンは頽壘となり山犬の

三九 巢窟となり詫異となり嗤笑となり人なき所とならん 三九 彼らは獅子のごとく共に吼え小獅のごとくに吼ゆ 彼

四〇 らの慾の燃る時にわれ筵を設けてかれらを酔せ彼らをして喜ばしめながき寢にいりて目を醒すことなからしめ

四〇 んとエホバいひたまふ 四〇 われ屠る羔羊のごとく又牡羊と牡山羊のごとくにかれらをくだらしめん

四一 セシヤクいかにして取られしや全地の人の頌美者いかにして執へられしや國々の中にバビロンいかにして

四二 詫異となりしや 海バビロンに溢れかゝりその多の波濤これを覆ふ 四三 其の諸邑は荒て燥ける地となり沙漠と

四四 なり住む人なき地とならん人の子そこを過ることあらじ 四四 われベルをバビロンに罰しその呑たる者を口より取

出さん國々はまた川の如くに彼に來らじバビロンの石垣踏れん

四五 我民よ汝らその中よりいで 各エホバの烈しき怒をまぬかれてその命を救へ 四六 汝ら心を弱くする勿れ此

地にてきく所の浮言によりて畏るゝ勿れ浮言は此年も來り次の年も亦きたらん此地に強暴あり宰者と宰者とあひ

四七 攻ることあらん 故に視よ我バビロンの偶像を罰する日來らんその全地は辱められ其殺さるゝ者は悉くそ

四八 の中に踏れん 然して天と地とその中にあるところのすべての者はバビロンの事の爲に歡び歌はんそは敗壞者

四九 北の方より此處に來ればなりエホバこれをいひたまふ 四九 バビロンがイスラエルの殺さるゝ者を踏せし如く全地

の殺さるゝ者バビロンに踏るべし

五〇 劍を逃るゝ者よ往け止る勿れ遠方よりエホバを憶えエルサレムを汝らの心に置くべし 五一のしり 罵詈をきくによ

五二 りて我ら羞づ異邦人エホバの室の聖處にいるによりて我らの面には羞恥盈つ 五二 この故にエホバいひたまふ視

五三 よわがその偶像を罰する日いたらん傷けられたる者はその全國に呻吟べし 五三 たとひバビロン天に昇るとも其城

を高くして堅むるとも敗壞者我よりいでて彼らにいたらんとエホバいひたまふ

五四 バビロンに號咷の聲ありカルデヤ人の地に大なる敗壞あり 五五 エホバ、バビロンをほろぼし其中に大なる

五六 聲を絶したまふ其波濤は巨水のごとくに鳴りその聲は響わたる 五六 破滅者これに臨みバビロンにいたる其勇士は

五七 執へられ其弓は折らるエホバは施報をなす神なればかならず報いたまふなり 五七 われその牧伯等と博士等と督宰

イ賽八・七、八 八賽四六・一 餘五〇 ホ耶五一・六、五〇・ト耶五〇・二、五一・ 一三 歌一八・二〇 ル詩四四・一五、一六、 七耶四九・一六 慶九 三詩九四・一 耶五〇
口耶五〇・三九、四〇、 八 歌一八・四 五二 耶五〇・三、四一 七九・四 二一 阿四 二九、五一・二四
五一・二九 二耶五一・五八 へ王下一九・七 チ賽四四・二三、四九 又耶四四・二八 七耶五一・四七 カ耶五〇・三二 夕耶五一・三九

五八 等と勇士とを醉せん彼らは永き寝にいりて目を醒すことあらし萬軍のエホバと名くる王これをいひ給ふ 萬軍
のエホバかくいひたまふバビロンの闊き石垣は悉く毀たれその高き門は火に焚れん斯民の勞苦は徒となるべ
し民は火のために憊れん

五九 これマアセヤの子なるネリヤの子セラヤがユダの王ゼデキヤとともに其治世の四年にバビロンに往くとき

六〇 にあたりて預言者エレミヤがこれに命ぜし言なりこのセラヤは侍従の長なり エレミヤ、バビロンにのぞまん

六一 とする諸の災を書にしるせり是即ちバビロンの事につきて録せる此すべての言なり エレミヤ、セラヤにい

六二 ひけるは汝バビロンに往しとき慎みてこの諸の言を讀め 而して汝いふべしエホバよ汝はこの處を滅し人と畜

六三 をいはず凡て此處に住む者なからしめて窮なくこれを荒地となさんと此處にむかひていひたまへり 汝この書

六四 を讀畢りしとき之に石をむすびつけてエフラテの中に投いれよ 而していふべしバビロンは我これに災蓄をく

だすによりて是しづみて復おこらざるべし彼らは絶はてんと

第五章

一 一 此まではエレミヤの言なり
二 二 ゼデキヤは位に即きしとき二十一歳なりしがエルサレムに於て十一年世ををさめたりその母の名

三 三 はハムタルといひてリブナのエレミヤの女なり ゼデキヤはエホヤキムが凡てなしたる如くエホ

四 四 バの目の前に悪をなせり ずなはちエホバ、エルサレムとユダとを怒りて之をその前より棄てはなちたまふ
五 五 是に於てゼデキヤ、バビロンの王に叛けり ゼデキヤの世の九年十月十日にバビロンの王ネブカデネザ

六 六 ルその軍勢をひきゐてエルサレムに攻めきたり之に向ひて陣をはり四周に成樓を建て之を攻めたり かくこの

六 邑攻圍まれてゼデキヤ王の十一年にまでおよびしが 六 その四月九日にいたりて城邑のうち饑ること甚だしくなり其地の民食物をえざりき 七 是をもて城邑つひに打破られたれば兵卒は皆逃て夜の中に王の園の邊なる二個の石垣の間の門より城邑をぬけいで平地の途に循ひておちゆけり時にカルデヤ人は城邑を圍みをる 茲にカルデヤ人の軍勢王を追ひゆきエリコの平地にてゼデキヤに追付けるにその軍勢みな彼を離れて散りしかば 九 ヤ人王を執へて之をハマテの地のリブラにをるバビロンの王の所に曳きゆきければ王彼の罪をさだめたり 一〇 ビロンの王すなはちゼデキヤの子等をその目の前に殺さしめユダの牧伯等を悉くりブラに殺さしめ 一 又またゼデキヤの目を抉さしめたり斯てバビロンの王かれを銅索に繋ぎてバビロンに携へゆきその死る日まで獄に置けり 二三 バビロン王ネブカデネザルの世の十九年の五月十日バビロンの王の前につかふる侍衛の長ネブザラダン、エルサレムにきたり 二三 エホバの室と王の室を焼き火をもてエルサレムのすべての室と大なる諸の室を焼けり 二四 また侍衛の長と偕にありしカルデヤ人の軍勢エルサレムの四周の石垣を悉く毀てり 一五 侍衛の長ネブザラダンすなはち民のうちの貧乏者城邑の中に餘れる者およびバビロンの王に降りし人と民の餘れる者を擄へ移せり 一六 但し侍衛の長ネブザラダンその地のある貧乏者を遺して葡萄を耕る者となし農夫となせり 一七 カルデヤ人またエホバの室の銅の柱と洗盥の臺と銅の海を碎きてその銅を悉くバビロンに運び 一八 た鍋と火鏟と燭剪と鉢と匙と匙およびすべて用ふるところの銅器を取れり 一九 侍衛の長もまた洗盥と火盤と鉢と鍋と燭臺と匙と罌など凡て金銀にて作れる者を取り 二〇 またソロモン王がエホバの室に造りし所の二つの柱と一 の海と臺の下なる十二の銅の牛を取れりこのもろもろの銅の重は稱る可らず 二一 この柱は高さ十八キュビト

イ耶三三・四 二亞七・五、八・一九 ト耶三九・九 一五
 口結一一・一三 ホ耶五二・一四 耶耶二七・一九 又出二七・三 王下 耶王上七・一五 王下 一五
 ハ耶五二・二九 へ耶三九・九 耶王上七・一五、二三、 二五・一四、一六 二五・一七 代下三 一五

ワ王上七二〇 二五
 カ王下二五・一八 王下二四・二
 ヲ耶三一・一、二九・レ王下二四・二二
 ソ王下二四・一四 ネ王下二五・二七一 王後九・一三
 ツ耶五二・二二、三九 三〇
 ナ創四〇・一三、二〇

三 なり又紐をもてその周囲を測るに十二キュビトあり指四本の厚にして空なり 三三
 三 高さは五キュビトその周囲は銅の網子と石榴にて飾れり他の柱とその石榴も之におなじ 三三
 三 石榴あり網子の上なるすべての石榴の数は百なり

三四 侍衛の長は祭司の長セラヤと第二の祭司ゼバニヤと三人の門守を執へ 三五
 三六 また兵卒を督る一人の寺人と
 三七 王の前にはべるもののうち城邑にて遇しところの者七人とその地の民を募る軍勢の長なる書記と城邑の中にて遇

三六 しとところの六十人の者を邑よりとらへされり 三六
 三六 侍衛の長ネブザラダンこれらを執へてリブラに居るバビロンの
 三七 王の許にいたれり 三七
 三六 バビロンの王ハマテの地のリブラにこれを撃ち殺せりかくユダはおのれの地よりとらへ移

三八 されたり 三八
 三九 ねブカデネザルがとらへ移せし民は左の如し第七年にユダ人三千二十三人 三九
 四〇 またネブカデネザルその十
 四〇 八年にエルサレムより八百三十二人をとらへ移せり 四〇
 四〇 ねブカデネザルの二十三年に侍衛の長ネブザラダン、ユ

四〇 人七百四十五人をとらへ移したり其總ての数は四千六百人なりき 四〇
 四一 ねブカデネザルがとらへ移されたる後三十七年の十二月二十五日バビロンの王エビルメロダクその
 四一 治世の一年にユダの王エホヤキンを獄よりいだしてその首をあげしめ 四一
 四二 善言をもて彼を慰めその位をバビロン

四二 に偕に居るところの王等の位よりもたかくし 四二
 四三 其獄の衣服を易へしむエホヤキンは一生の間つねに王の前に食
 四三 せり 四三
 四四 かれ其死る日まで一生の間たえず日々の分をバビロンの王よりたまはりて其食物となせり

四四 せり 四四
 四五 かれ其死る日まで一生の間たえず日々の分をバビロンの王よりたまはりて其食物となせり

エレミヤ記 をはり